

KACHIYAMA

勝山遺跡

— グリーンプラザ茅野（仮称）建設に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 —

1994. 3

茅野市教育委員会

KACHIYAMA

勝山遺跡

— グリーンプラザ茅野（仮称）建設に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 —

1994. 3

茅野市教育委員会



遺跡全景（空撮）



遺跡全景（空撮）



配 石



配 石

はじめに

茅野市には300以上もの遺跡が発見されていますが、その多くが縄文時代の中でも中期と呼ばれる時期のものです。それらの遺跡の多くは八ヶ岳山麓の中でも標高1,000m前後に位置しており、その代表的な遺跡が国の特別史跡に指定されている豊平地区の尖石遺跡です。

八ヶ岳山麓に対する宮川左岸の守屋山系をみると、傾斜が急であることもあって、今まであまり大きな遺跡は発見されていませんでした。しかし、この守屋山系には、咲ヶ峰遺跡のような縄文時代前期の遺跡、御社宮司遺跡のような縄文時代晚期の遺跡、狐塚遺跡のような占墳時代前半の遺跡、高部遺跡などの縄文時代中期と平安時代の遺跡といった、八ヶ岳山麓とは違った様相を示す遺跡が数多く発見され、調査されています。

今回調査の行われた勝山遺跡も、縄文時代中期の大集落ではありますが、茅野市では数少ない縄文時代後期の住居址やお墓が多数見つかっています。また、平安時代の住居址も、八ヶ岳山麓にあっては、ある一時期にはばつんと数軒の家があるという遺跡が多いのに対して、ある程度の連續性が認められる大きな集落であったことが分りました。

この発掘調査は、株式会社アイシー企画の委託を受けて実施したものです。作業の計画・実施にあたっては、株式会社アイシー企画・協和建設株式会社にご協力いただき、設計変更により遺跡総面積約9,000m²の内の、ほぼ半分を盛土によって保存していただきました。代表取締役である今井晴美氏をはじめ、関係者の皆様にお礼申上げます。

最後に、調査の実施にあたってご指導いただいた長野県教育委員会をはじめ、調査に参加された関係者の皆様に対し、深甚なる感謝を申上げます。

平成6年3月

茅野市教育委員会
教育長 両角 昭二

例　　言

1. 本書は、ブルフ練習場グリーンプラザ茅野（仮称）の建設に伴う、造成工事に係る勝山（かつやま・かちやま）遺跡の緊急発掘調査報告書である。遺跡の呼称については、当初「かつやま」を用いていたが、地元の方々より「かちやま」であるとの指摘を受け、これを用いることとした。
2. 発掘調査は、株式会社アイシー企画の委託により、委託金を得て茅野市教育委員会が実施した。
3. 勝山遺跡の試掘調査は、平成4年11月24日から12月5日まで行った。発掘調査は、平成5年7月25日から12月1日まで行った。
整理作業は、平成5年12月2日から平成6年3月31日まで行った。
4. 出土品の整理及び報告書の作成は、尖石考古館で実施した。整理作業にあたっては、尖石考古館の小平基館長をはじめ、職員の協力を得た。
本報告書に係る出土品・諸記録は、茅野市文化財調査室に保管されている。
5. 本調査において、発掘調査作業を株式会社協和建設に、基準点測量および杭打ち作業を株式会社アルピスに、航空測量を中央航業株式会社に、J1器実測を株式会社東京航業研究所にそれぞれ委託した。
6. 発掘調査における構造写真、整理作業における遺物写真是岡 和宣が撮影した。本報告書の構成のトレースは伊藤千代美が行った。
7. 本報告書の執筆は、小林深志が行った。また、瓶蓋型集石については武藤雄六が執筆した。
8. 発掘調査から本書作成に至る過程で、下記の方々から指導・助言を得た。
北原 昭　　武居卒重　　宮坂光昭　　武藤雄六　　矢島三雄

9. 調査の体制

本調査は茅野市教育委員会茅野市文化財調査室が実施した。組織は以下の通りである。

調査主体者	両角昭二	(茅野市教育委員会教育長)
事務局	原 充	(茅野市教育委員会教育次長)
	永田光弘	(茅野市教育委員会文化財調査室長)
	鶴飼幸雄	(茅野市教育委員会文化財調査室係長)
	両角一夫	(茅野市教育委員会文化財調査室主任)
	大月三千代	(茅野市教育委員会文化財調査室主事補)
調査担当	守矢昌文	(茅野市教育委員会文化財調査室主任)
	小林深志	(茅野市教育委員会文化財調査室指導主事) 調査担当
	小池浩史	(茅野市教育委員会文化財調査室主事)
	功刀 司	(茅野市教育委員会文化財調査室主事)
	百瀬一郎	(茅野市教育委員会文化財調査室主事)
	小林健治	(茅野市教育委員会文化財調査室主事)
	柳川英司	(茅野市教育委員会文化財調査室主事)
調査補助員	赤堀彰子	伊藤千代美　牛山市弥　牛山徳博　占部美恵　小松とよみ
	関 嘉子	武居八千代　原 敏江　堀内 澄　矢崎つな子　矢嶋恵美子

発掘調査・整理作業協力者

阿久津知美	雨宮その子	伊藤京子	今井寿恵子	今井大輔	今井ちよ	今井晴美
今井祐佳	鵜飼澄雄	牛尾山香	牛山矩子	牛山秀子	太田友子	岡 和宣
大和隆吉	笠原幸一	金子清春	上村都夫	川端治人	北沢初子	北原章雄
北原きよえ	国枝朋之	国枝昌之	久根種則	栗原 昇	栗原博文	小池茂美
小平久子	小林修平	小林末芳	小林鈴子	小林千春	五味秀文	小宮山明美
志賀清美	白旗スエ子	田中慎太郎	田中洋二郎	知久裕昭	長田知恵	長田 真
中村寿幸	野沢千博	花岡照友	馬場きん子	馬場伸一郎	平 雅子	平出みね子
藤森英二	藤森美代子	宮嶋 勝	宮嶋ゆき	武藤さと江	武藤雄六	明田二三子
森 祥子	森脇悦子	両角琴枝	矢崎哲也	柳平しほみ	柳平高好	柳平 文
柳平みのる						

発掘調査の作業員募集にあたり、協和建設株式会社に協力を得た。

目 次

序
例 言

茅野市教育長 両 角 昭 二

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境	1
第Ⅱ章 調査経緯	3
第1節 調査に至るまでの経過	3
第2節 調査の経過	3
第Ⅲ章 遺構と遺物	7
第1節 繩文時代	7
(1) 住居址	7
(2) 土 坑	52
(3) 配 石	52
(4) 独立土器	53
(5) 石器・石製品	53
第2節 平安時代	55
(1) 住居址	55
(2) 土 坑	66
第Ⅳ章 ま と め	67
第1節 繩文時代	67
第2節 弥生・古墳時代	80
第3節 平安時代	81

挿図目次

第1図 牛山遺跡の位置(1/10,000)	2	第9図 10・11・12号住居址(1/60)	14
第2図 地形と発掘区(1/2,000)	4	第10図 13号住居址(1/60)	15
第3図 遺構分布図(1/300)	5・6	第11図 14号住居址(1/60)	16
第4図 1・2号住居址(1/60)	8	第12図 15・83号住居址(1/60)	17
第5図 3・35号住居址(1/60)	9	第13図 16・17号住居址(1/60)	19
第6図 4号住居址(1/60)	10	第14図 24号住居址(1/60)	20
第7図 5・6号住居址(1/60)	11	第15図 26・27号住居址(1/60)	21
第8図 7号住居址(1/60)	13	第16図 28号住居址(1/60)	22

第17図	30・70号住居址(1/60).....	23	第36図	84号住居址(1/60).....	46
第18図	31号住居址(1/60).....	24	第37図	87号住居址、413・414・415号土坑(1/60).....	47
第19図	33号住居址(1/60).....	25	第38図	88・89号住居址(1/60).....	48
第20図	34号住居址(1/60).....	26	第39図	8号住居址(1/60)と出土遺物(1/3).....	55
第21図	36・37・42・47・48・50・51号住居址(1/60).....	28	第40図	9号住居址(1/60)と出土遺物(1/3).....	56
第22図	36・37・48・50号住居址断面図(1/60).....	29	第41図	18号住居址(1/60).....	57
第23図	38~40号住居址(1/60).....	31	第42図	18号住居址出土遺物(1/3).....	58
第24図	41・44・56・90号住居址(1/60).....	33	第43図	19・49号住居址(1/60)と出土遺物(1/3).....	59
第25図	41・44・56・90号住居址断面図(1/60).....	34	第44図	20号住居址(1/60)と出土遺物(1/3).....	60
第26図	43・45・57号住居址(1/60).....	35	第45図	21号住居址(1/60)と出土遺物(1/3).....	61
第27図	43・45・57号住居址断面図(1/60).....	36	第46図	22号住居址(1/60)と出土遺物(1/3).....	62
第28図	46・55号住居址(1/60).....	37	第47図	23号住居址(1/60)と出土遺物(1/3).....	63
第29図	63・64号住居址(1/60).....	39	第48図	29号住居址(1/60).....	63
第30図	65号住居址(1/60).....	40	第49図	53・54号住居址(1/60)と出土遺物(1/3).....	65
第31図	66号住居址(1/60).....	41	第50図	403号土坑(1/40)と出土遺物(1/3).....	66
第32図	69号住居址(1/60).....	42	第51図	純文時代中期の土器(1は28件、他は30件)(1/6)....	69
第33図	74号住居址(1/60).....	43	第52図	ミニチュア土器(1/3)・純文時代後期の上器(1/6)....	70
第34図	75・76号住居址(1/60).....	44	第53図	土製品・石製品(1は1/3、他は2/3).....	71
第35図	81号住居址(1/60).....	45			

表 目 次

第1表 出土石器一覧表.....	72	第4表 白羅(絆石等)測定表.....	79
第2表 勝山・櫻畠遺跡出土石器対比表.....	77	第5表 平安時代上器観察表.....	82
第3表 鹿茸型集石内岩石数量表.....	78		

写真図版目次

卷頭図版 1	遺跡全景(空撮)	圖版 3 (2) 10~12号住居址敷石除去後
卷頭図版 1 (1)	遺跡全景(空撮)	圖版 3 (3) 12号住居址石面炉
卷頭図版 1 (2)	遺跡全景(空撮)	圖版 4 (1) 13・14号住居址
卷頭図版 2 (1)	配石	圖版 4 (2) 16号住居址遺物出土状態
卷頭図版 2 (2)	配石	圖版 4 (3) 16号住居址
図版 1 (1)	1・2号住居址	圖版 5 (1) 17号住居址遺物出土状態
図版 1 (2)	3・35号住居址	圖版 5 (2) 17号住居址
図版 1 (3)	3号住居址埋甕	圖版 5 (3) 24号住居址
図版 2 (1)	4・15号住居址	圖版 6 (1) 24号住居址埋甕
図版 2 (2)	5・6号住居址	圖版 6 (2) 25号住居址
図版 2 (3)	7号住居址	圖版 6 (3) 26・27号住居址
図版 3 (1)	10~12号住居址	圖版 7 (1) 28号住居址

- 図版7 (2) 30号住居址遺物出土状態
図版7 (3) 30号住居址遺物出土状態(部分)
図版8 (1) 30号住居址
図版8 (2) 30号住居址石調炉
図版8 (3) 31号住居址
図版9 (1) 32号住居址
図版9 (2) 33号住居址
図版9 (3) 34号住居址
図版10 (1) 36・48号住居址
図版10 (2) 36号住居址堆塗炉
図版10 (3) 37号住居址
図版11 (1) 38~40号住居址
図版11 (2) 41号住居址堆塗
図版11 (3) 42号住居址
図版12 (1) 43・45・57号住居址
図版12 (2) 43号住居址遺物出土状態
図版12 (3) 44号住居址石調炉(1)
図版13 (1) 44号住居址石調炉(2)
図版13 (2) 44号住居址ミニチュア土器出土状態
図版13 (3) 45号住居址堆塗(1)
図版14 (1) 45号住居址堆塗(2)
図版14 (2) 56号住居址堆塗炉(1)
図版14 (3) 56号住居址堆塗炉(2)
図版15 (1) 58・59号住居址煤出土壤物出土状態
図版15 (2) 58号住居址
図版15 (3) 65号住居址
図版16 (1) 66号住居址
図版16 (2) 66号住居址堆塗(1)
図版16 (3) 66号住居址堆塗(2)
図版17 (1) 67号住居址
図版17 (2) 68号住居址
図版17 (3) 68号住居址石調炉
図版18 (1) 69号住居址
図版18 (2) 71号住居址
図版18 (3) 72号住居址
図版19 (1) 73号住居址
図版19 (2) 74号住居址
図版19 (3) 75号住居址
図版20 (1) 76号住居址
図版20 (2) 77号住居址
図版20 (3) 79号住居址
図版21 (1) 81号住居址堆塗炉
図版21 (2) 82号住居址
図版21 (3) 84号住居址
図版22 (1) 84号住居址遺物出土状態
図版22 (2) 84号住居址堆塗
図版22 (3) 85号住居址
図版23 (1) 85号住居址遺物出土状態(1)
図版23 (2) 85号住居址遺物出土状態(2)
図版23 (3) 87号住居址
図版24 (1) 87号住居址(部分)
図版24 (2) 87号住居址堆塗
図版24 (3) 88号住居址
図版25 (1) 88号住居址堆塗(1)
図版25 (2) 88号住居址堆塗(2)
図版25 (3) 89号住居址堆塗炉
図版26 (1) 92号住居址石調炉
図版26 (2) 93号住居址
図版26 (3) 2号土坑
図版27 (1) 233号土坑
図版27 (2) 342号土坑
図版27 (3) 352号土坑
図版28 (1) 399~401号土坑
図版28 (2) 401号土坑遺物出土状態
図版28 (3) 402号土坑
図版29 (1) 414号土坑遺物出土状態
図版29 (2) 1010号土坑
図版29 (3) H-7遺物出土状態
図版30 (1) H-8遺物出土状態
図版30 (2) J-8遺物出土状態
図版30 (3) J-9遺物出土状態
図版31 (1) I-9遺物出土状態
図版31 (2) 簋形集石(東から)
図版31 (3) 1号住居址出土土器
図版31 (4) 3号住居址出土堆塗
図版32 (1) 7号住居址出土土器
図版32 (2) 10号住居址出土土器(1)
図版32 (3) 10号住居址出土土器(2)
図版32 (4) 10号住居址出土土器(3)
図版32 (5) 11号住居址出土丸筒土器
図版32 (6) 12号住居址出土土器
図版33 (1) 12号住居址出土ミニチュア土器(1)
図版33 (2) 12号住居址出土ミニチュア土器(2)
図版33 (3) 16号住居址出土土器(1)
図版33 (4) 16号住居址出土土器(2)
図版33 (5) 17号住居址出土土器(1)
図版33 (6) 17号住居址出土土器(2)
図版34 (1) 24号住居址出土土器(1)

- | | |
|----------------------------|--------------------------|
| 図版34 (2) 24号住居址出土土器 (2) | 図版41 (4) 84号住居址出土埋甕 |
| 図版34 (3) 24号住居址出土埋甕 | 図版41 (5) 85号住居址出土土器 (1) |
| 図版34 (4) 28号住居址出土炉体土器 | 図版41 (6) 85号住居址出土土器 (2) |
| 図版34 (5) 29号住居址出土七器 | 図版42 (1) 87号住居址出土埋甕 (1) |
| 図版34 (6) 30号住居址出土上器 (1) | 図版42 (2) 87号住居址出土埋甕 (2) |
| 図版35 (1) 30号住居址出土土器 (2) | 図版42 (3) 88号住居址出土埋甕 (1) |
| 図版35 (2) 30号住居址出土土器 (3) | 図版42 (4) 88号住居址出土埋甕 (2) |
| 図版35 (3) 30号住居址出土土器 (4-1) | 図版42 (5) 88号住居址出土埋甕 (3) |
| 図版35 (4) 30号住居址出土上器 (4-2) | 図版42 (6) 89号住居址出土炉体土器 |
| 図版35 (5) 30号住居址出土土器 (4-3) | 図版43 (1) 92号住居址出土炉体土器 |
| 図版35 (6) 30号住居址出土土器 (4-4) | 図版43 (2) 15号土坑出土土器 |
| 図版36 (1) 30号住居址出土土器 (5-1) | 図版43 (3) 233号土坑出土土器 |
| 図版36 (2) 30号住居址出土上器 (5-2) | 図版43 (4) 243号土坑出土土器 |
| 図版36 (3) 30号住居址出土上器 (6) | 図版43 (5) 248号土坑出土土器 |
| 図版36 (4) 30号住居址出土土器 (7) | 図版43 (6) 318号土坑出土土器 |
| 図版36 (5) 30号住居址出土土器 (8) | 図版44 (1) 342号土坑出土土器 |
| 図版36 (6) 31号住居址出土土器 | 図版44 (2) 372号土坑出土ミニチュア土器 |
| 図版37 (1) 33号住居址出土土器 | 図版44 (3) 388号土坑出土土器 |
| 図版37 (2) 34号住居址出土土器 | 図版44 (4) 399号土坑出土土器 |
| 図版37 (3) 36号住居址出土炉体土器 (1) | 図版44 (5) 400号土坑出土土器 |
| 図版37 (4) 36号住居址出土炉体土器 (2) | 図版44 (6) 401号土坑出土土器 |
| 図版37 (5) 37号住居址出土ミニチュア土器・蓋 | 図版45 (1) 402号土坑出土土器 |
| 図版37 (6) 38-40号住居址出土土器 (1) | 図版45 (2) 413号土坑出土土器 |
| 図版38 (1) 38-40号住居址出土土器 (2) | 図版45 (3) 414号土坑出土土器 |
| 図版38 (2) 41号住居址出土炉体土器 | 図版45 (4) 415号土坑出土土器 |
| 図版38 (3) 43号住居址出土土器 | 図版45 (5) 1010号土坑出土土器 |
| 図版38 (4) 44号住居址出土土器 | 図版45 (6) H-7出土土器 (1) |
| 図版38 (5) 45号住居址出土埋甕 | 図版46 (1) H-7出土土器 (2) |
| 図版38 (6) 47号住居址出土土器 | 図版46 (2) H-8出土土器 |
| 図版39 (1) 55号住居址出土土器 (1) | 図版46 (3) J-9出土土器 |
| 図版39 (2) 55号住居址出土土器 (2) | 図版46 (4) J-8出土土器 |
| 図版39 (3) 55号住居址出土ミニチュア土器 | 図版46 (5) J-9出土土器 |
| 図版39 (4) 56号住居址出土炉体土器 | 図版46 (6) J-14出土土器 |
| 図版39 (5) 63号住居址出土土器 | 図版47 (1) 8トレンチ出土土器 |
| 図版39 (6) 65号住居址出土土器 | 図版47 (2) 鱗状形集石出土土器 |
| 図版40 (1) 66号住居址出土埋甕 | 図版47 (3) 63号住居址出土打製石斧 |
| 図版40 (2) 75号住居址出土土器 (1) | 図版47 (4) 58号住居址出土門石 |
| 図版40 (3) 75号住居址出土土器 (2) | 図版48 (1) 小型磨製石斧 |
| 図版40 (4) 76号住居址出土土器 | 図版48 (2) 磨製石斧 |
| 図版40 (5) 81号住居址出土炉体土器 (1) | 図版48 (3) 大型粗製石器 |
| 図版40 (6) 81号住居址出土炉体土器 (2) | 図版49 (1) 石匙 |
| 図版41 (1) 84号住居址出土土器 (1) | 図版49 (2) 12号住居址出土石鍬 |
| 図版41 (2) 84号住居址出土土器 (2) | 図版49 (3) 64号住居址出土石鍬 |
| 図版41 (3) 84号住居址出土土器 (3) | 図版50 (1) ヒスイ製車軸 |

- 図版50 (2) ヒスイ製垂飾（裏面）
- 図版50 (3) 1号住居址出土土偶頭部
- 図版50 (4) 1号住居址出土顔面把手
- 図版50 (5) 30号住居址出土土偶頭部
- 図版50 (6) 6号住居址出土土偶脚部
- 図版51 (1) 20号住居址内土坑出土人体付土器
- 図版51 (2) 4号住居址出土土製品
- 図版51 (3) 8号住居址
- 図版51 (4) 9号住居址
- 図版52 (1) 18号住居址(1)
- 図版52 (2) 18号住居址(2)
- 図版52 (3) 18号住居址カマド
- 図版53 (1) 18号住居址遺物出土状態(1)
- 図版53 (2) 18号住居址遺物出土状態(2)
- 図版53 (3) 18号住居址遺物出土状態(3)
- 図版54 (1) 18号住居址遺物出土状態(4)
- 図版54 (2) 19・49号住居址
- 図版54 (3) 19号住居址遺物出土状態
- 図版55 (1) 20号住居址
- 図版55 (2) 20号住居址カマド
- 図版55 (3) 21号住居址
- 図版56 (1) 22号住居址
- 図版56 (2) 22号住居址カマド
- 図版56 (3) 23号住居址(1)
- 図版57 (1) 23号住居址(2)
- 図版57 (2) 23号住居址カマド
- 図版57 (3) 29号住居址
- 図版58 (1) 53・54号住居址(1)
- 図版58 (2) 53・54号住居址(2)
- 図版58 (3) 53・54号住居址遺物出土状態
- 図版59 (1) 53・54号住居址炭化米出土状態
- 図版59 (2) 53・54号住居址カマド
- 図版59 (3) 鉄製品

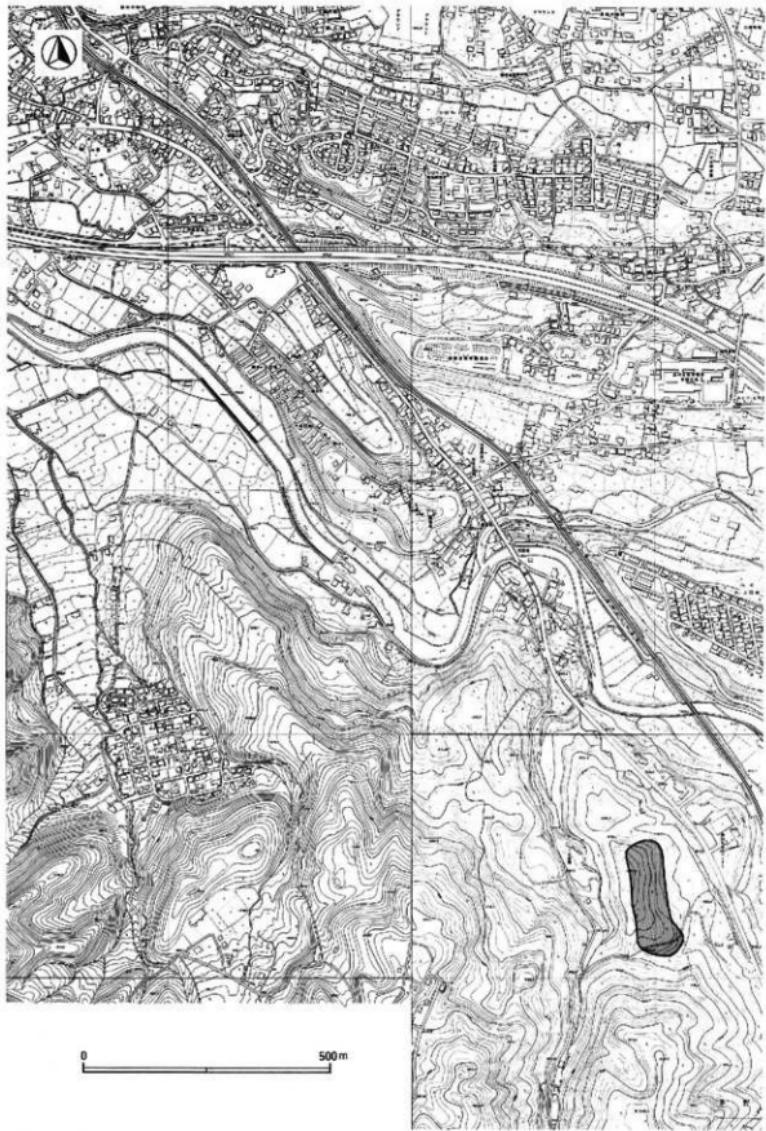
第Ⅰ章 遺跡の位置と環境

勝山遺跡（茅野市遺跡番号183）は、茅野市宮川地籍に所在する。JR茅野駅からは約3km南東にあり、諏訪湖へ向かって北上する宮川の左岸に位置する。宮川に沿って建設されている国道20号線から、諏訪湖方面へ上ってすぐの鳴沢川沿いにある。この辺りは、守屋山系の山脚の中では、最も東に張り出している尾根で、その先端部は、宮川の谷に沿って、坂室の南にまで延びている。勝山遺跡のあるところは、山脚が一度跡切れ、再び盛り上がった感じとなっており、さらにこれより北にも括れた箇所が認められ、ちょうどフタコブラクダの背のようになっている。遺跡はその山頂から東斜面にかけて広がっている。遺跡の標高は、最も高いところで886mである。西側は頂部から急傾斜で鳴沢川に落ちるが、東側は傾斜を弛め、平坦面をつくった後、谷地形となる。この谷を挟んで、平坦面は南側を回るように続いている。遺跡は頂部から平坦面、さらに谷を挟んで東側にまで続いていることが試掘調査によって確認されている。この地形に見られる括れと段差は、造成時に調整池を掘った際、下層が断層地帯に見られる青色粘土層となっていたことから、その成因が糸魚川一静岡構造線によるのではないかと推測される。

本遺跡と宮川を挟んで北東方向に望む八ヶ岳山麓のなだらかな平坦面や台地の先端には、多くの遺跡の存在が知られている。その中でも原村にある国史跡の阿久遺跡をはじめ、柏木南遺跡、居沢尾根遺跡、大石遺跡、上前尾根遺跡などは阿久遺跡群を形成しており、その幾つかは中央自動車道西ノ宮線の建設に伴って調査されている。また、平成2・3年度に県営金沢工業団地造成に先立って調査が行われた茅野市阿久尾遺跡は本遺跡よりさらに1.5km程南東にあるが、これも…連のものである。

これに対し、本遺跡の位置する赤石山脈に連なる守屋山系の諏訪側は、伊那方面への傾斜と比較するとかなり急で、道路沿いを車で移動しているだけでは平坦な場所を見つけるのは難しい。また、宮川へ合流する河川による扇状地の発達もあまり見られない。この様な地形により、今まで大きな遺跡の存在はあまり知られていないかったが、中央道西宮線の建設に伴う発掘調査でいわゆる西山にも大きな遺跡の存在が知られるようになった。また、昨年度行なわれた茅野市金沢犬狗山遺跡の発掘調査においても、縄文時代から弥生時代・平安時代の遺構が多数検出・調査された。これも発掘調査が行われる以前は、短期間に営まれた小規模の遺跡と考えられていた。

その中にあって、勝山遺跡は、戦時に一時開墾され、その際にかなりの遺物が出土したこと、宮川在住の武居幸重氏により採集され、考古館に寄贈された石刀形の石器の存在などから、かなりの規模の集落遺跡であろうことが推測されていた。



第1図 勝山遺跡の位置 (1/10,000)

第Ⅱ章 調査経緯

第1節 調査に至るまでの経過

勝山遺跡の立地する地盤は、茅野林野利用協同組合の所有・管理する山林であるが、株式会社アイシー企画によりゴルフ練習場「グリーンプラザ茅野」(仮称)の建設が計画された。

茅野市教育委員会では、この地が遺跡地となっていることから、長野県教育委員会とも保護協議を進め、市教育委員会によって試掘調査を行い、遺跡の性格や規模を明らかにした後、再度協議を行うこととした。

試掘調査は平成4年11月24日から12月5日まで行った。試掘調査は重機によってトレーニングを開けていく方法を取った。

トレーニングは10本開けた(第2回1T~10T)。当初遺構の分布と密度を見るため、細かくトレーニングを開けていく予定であったが、トレーニングを数本開けた段階で遺構が非常に濃厚で、遺物の出土も多かった。そのため、狭いトレーニングでの試掘調査がかえって遺構の破壊を招くと考え、トレーニングの間隔を次第に広げながら、遺跡の広がりを見るための調査に切り換えた。

試掘調査の結果、遺跡の面積は約8,700m²に及んでおり、しかも、遺構の分布も非常に密であることが確認された。

当初の計画によれば、この内の約5,000m²が削平され、他を盛土する計画であったが、この試掘調査の結果を踏まえた保護協議では、できるだけ削平部分を少なくし、盛土によって造成を行うように業者に要望を行った。

再度行われた保護協議において、業者から設計変更により削平部分を減らし、約3,000m²を調査し、他を盛土したいとの解答が得られた。

そこで、平成5年6月議会へ勝山遺跡の発掘調査に係る補正予算案を計上し、議決をまって着工した。

第2節 調査の経過

勝山遺跡は、戦後畠地として利用された時期もあったが、その後カラマツの植林が行われ、現在に至っている。そこで、発掘調査を行うにあたってのカラマツの伐採と抜根を平成5年7月12日から行った。

7月19日(月)からは、伐採・抜根と並行して、重機による表土剥ぎを実施した。表土剥ぎは遺跡の南北部分から行うが、大礫が多数出土する。また、遺構らしい落込みも幾つか確認される。

7月21日(水)からは、機材の搬入も併せて行い、7月26日(月)からは、表土剥ぎを継続して行う一方、作業員を導入し、遺構の検出に入る。

試掘調査では縄文時代中期中葉のものが多くなったが、遺構確認の段階では縄文時代後期と平安時代の遺物が多く出土し始めた。

表土剥ぎは7月27日(火)で終了となる。遺構の検出も全面を一通り終わり、翌日からは遺構の掘り下げに入った。

遺構の掘り下げは、調査区の東側の平安時代の住居址から行っていった。また、8月5日(木)には、掘

り下げと並行して、傾斜が急で試掘調査を行うことができなかつた西側の頂部にまで遺構の分布が広がっていることが確認されたため、約400m²にわたって頂部付近を拡張して表土剥ぎを行つた。

今回の調査区の東側については、埋め土による保存が行われることになつてゐたが、その部分について、遺構の分布と遺跡の広がりを確認するため、試掘のトレーナーを入れる。

8月の半ばからは、ようやく振り下げた住居址に番号を付け始める。また、土層断面図の作成を行い始めたのは、8月の後半になってからである。

また、調査区内の杭打ち及びBM設置作業がようやく終了し、遺跡全体の見取図作成にはいる。

遺構の発掘状態の写真撮影を開始したのは9月になってからである。また、住居址の平面実測図の作成も併せて行った。

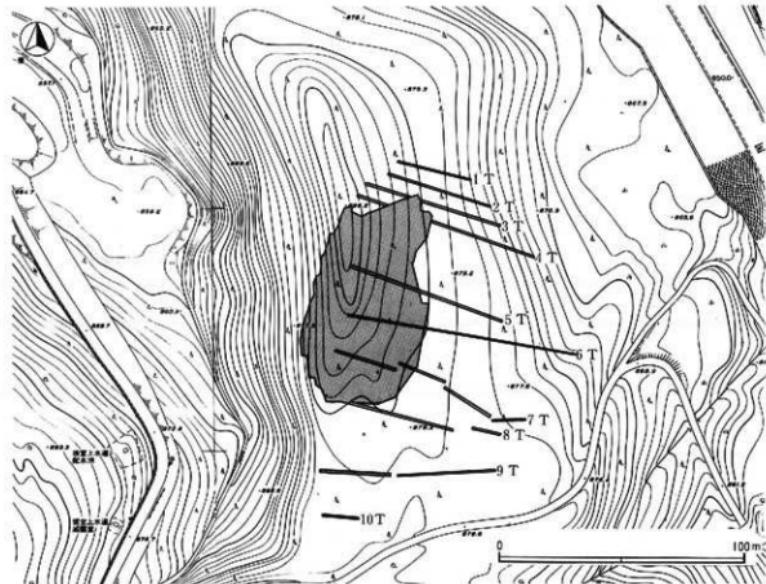
その後、11月の半ば頃まで、遺構の検出・写真撮影・平面図の作成を行い、11月15日（月）にはヘリコプターによる航空測量を実施する。

空撮の終わった後、配石を取り除き、その下の遺構の検出と振り下げに入る。

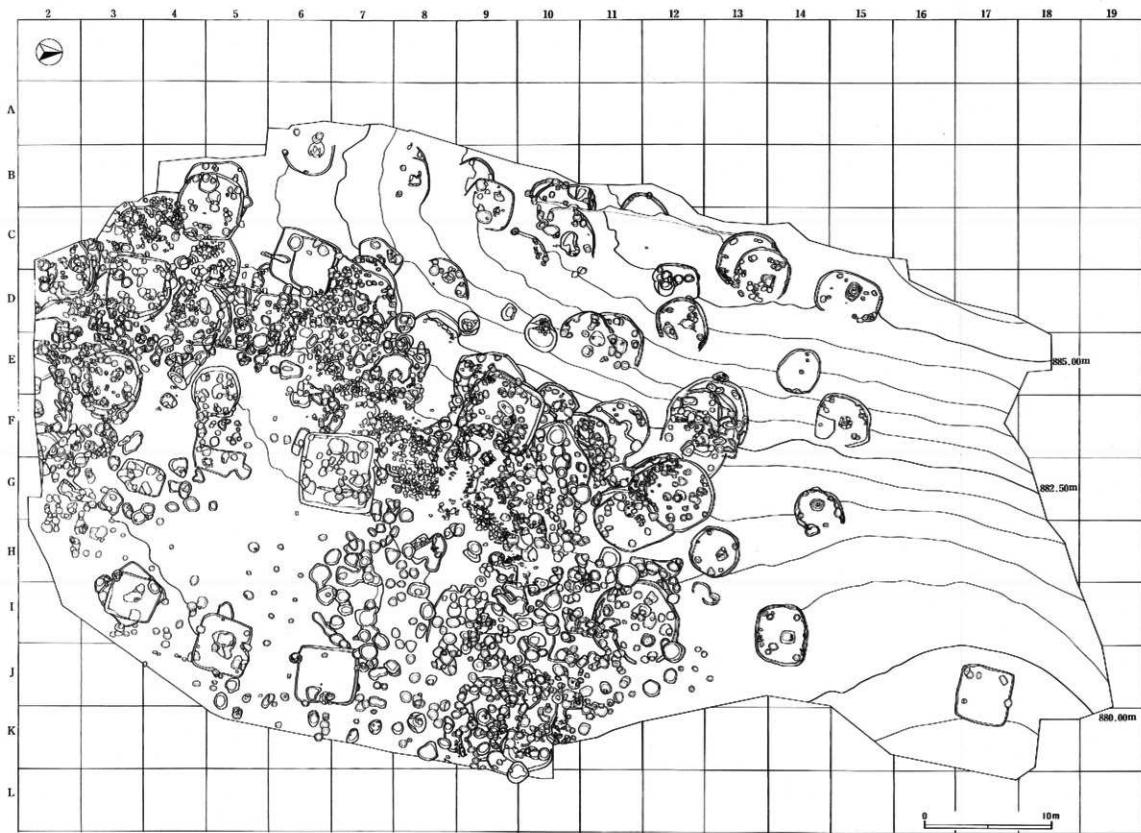
11月24日（水）には、ラジコン・ヘリコプターによる2回目の航空測量を行う。午後からは機材の搬出作業を行ふ傍ら、平面実測などの作業を引き続行う。

最終的に、機材搬出を終わったのは12月1日であった。

当初、調査予定面積3,000m²で始めた調査であったが、西側頂部を若干拡張したため、最終調査面積は3,400m²となった。検出された遺構は、住居址が95軒、土坑は1,400基を超える調査となつたが、前半雨に祟られたがらも、調査期間ほぼ4ヶ月と、予定通りに調査を終了することができた。



第2図 地形と発掘区 (1/2,000)



第3図 滲水分布図 (1/300)

第III章 遺構と遺物

本遺跡からは縄文時代中期前半から後期、平安時代の住居址と土坑が多数検出された。調査の終了までに番号を付した住居址は95軒と、近年の茅野市の発掘では昭和61年に調査を行った米沢の棚畠遺跡以来の数であった。本遺跡は調査前の試掘調査で約8,700m²の範囲を遺跡として確認したが、県教育委員会文化課と開発業者を交えた保護協議の結果、約5,300m²については盛土により保存を行っているので、住居址数はさらに多いのではないかと考えられる。

住居址の命名にあたっては、住居址プランが明確なもの、壁や床面はなくなってしまっても、炉があり、柱穴が回っているものについてだけ番号を付した。調査中、あるいは整理作業の過程で柱穴が回るのではないかと考えられるものも数多く見受けられたが、住居番号を付してない。

第1節 縄文時代

(1) 住居址

縄文時代と考えられる住居址は、83軒が検出された。その内縄文時代後期の住居址が13軒あり、その他はすべて中期に属するものになると考えられる。

1号住居址（第4図、図版1-1）

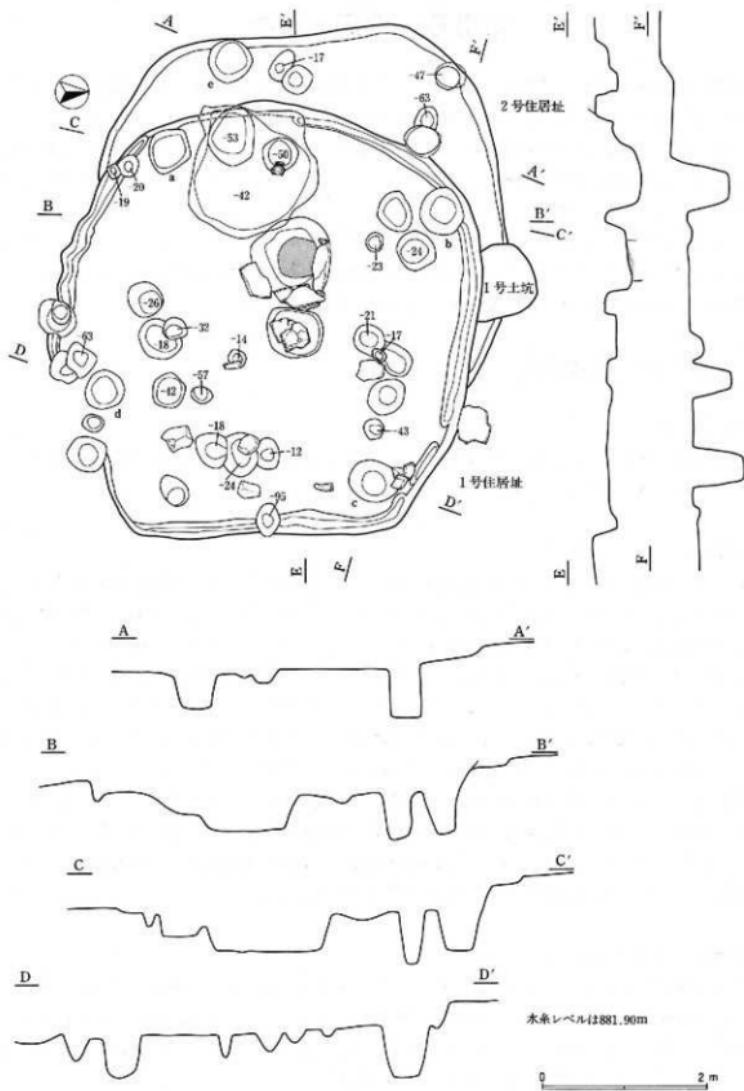
B-C-4・5で検出された。2号住居址と重複、1号住居址が新。平面形態は、東壁は攪乱が入り直線気味となっているが、ほぼ円形を呈するのではないかと考えられる。規模は、長径533cm、短径517cm、壁高35cmを測る。長軸方向は、N-83°-Wを指す。南壁の東側が切れている。2号住居址と重複しているため、柱穴は多数あり本址のものを特定できないが、a-dが主柱穴になるものと考えられる。a=39cm、b=49cm、c=65cm、d=52cm。炉は石囲炉であったと思われるが、礫の多くは抜き取られている。中央よりやや西側に寄っている。覆土は、2号住居址とあわせ、計11層に細分された。①黒褐色土、②黄褐色土、③黄褐色土、④黒褐色土、⑤暗褐色土、⑥暗褐色土、⑦暗黄褐色土、⑧黄褐色土、⑨暗黄褐色土、⑩黄褐色土、⑪暗褐色土。

遺物は、一括となる土器が炉の東、床面から20cm以上浮いて出土している（図版31-3）。他に炉の西側の柱穴上、床面とほぼ同レベルでも出土があった。土偶頭部（第53図3、図版50-3）・顔面把手（第53図1、図版50-4）が出土している。石器は、磨石、凹石、横刃形石器、打製石斧、磨製石斧、小型磨製石斧、石錐などが出土している。本住居址の時期は、曾利V期になるものと考えられる。

2号住居址（第4図、図版1-1）

B-4・5で検出された。平面形態は、遺存率が少なく不明。規模は、長径・短径とも推定ではあるが、長径520cm、短径495cmになると思われる。壁高は15cmを測る。壁や床面は、1号住居址と重複している他、掘り込みが浅く、確認できない箇所も多い。南西隅の掘り込みeが柱穴になるのではないかと思われるが、他は不明。e=46cm。炉址は、1号住居址に切られており、検出出来なかった。

検出された面積が狭く、本住居址に伴うと考えられる一括土器の出土はなかったが、石器は打製石斧が出土している。



第4図 1・2号住居址 (1/60)

本住居址の時期は、不明とせざるを得ない。

1号土坑と重複しており、1号土坑が新しい。

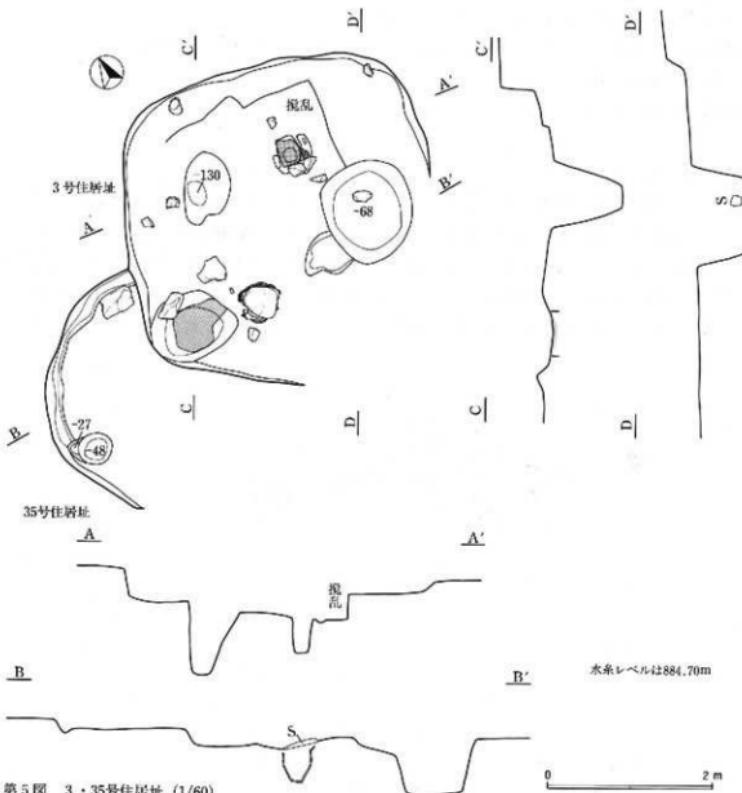
3号住居址（第5図、図版1-2）

B-C-9で検出された。平面形態は、隅丸方形から入口部が張り出した隅丸の五角形を呈する。規模は、長径403cm、短径380cm、壁高37cmを測る。全体の形態は分っていないが、炉と埋甕を結んだ軸線方向はN-38°-Eを指す。重機による抜根のため、床面は荒れている。周溝は検出されなかった。柱穴らしい掘り込みは認められない。炉は中央より奥である北壁側に寄っている。石團炉であったと思われるが、重機によって炉の部分を搅乱され、掘り込みの底の部分が残るだけとなってしまった。礫の下に埋甕があった（図版1-3, 31-4）。

埋甕の他に本住居址から一括土器の出土はなかったが、石器は打製石斧が出土している。

本住居址の時期は、曾利二期になるものと思われる。

35号住居址と重複しており、本住居址の方が新しいと思われる。



第5図 3・35号住居址 (1/60)

35号住居址（第5図、図版1-2）

3号住居址内の南西隅に炉が検出されたことにより、調査範囲を拡張して検出した。B-9に位置する。遺存率が少なく北西隅が遺存しているに過ぎない。そのため、平面形・規模とも不明といわざるを得ない。遺存する壁の高さは、14cmを測る。壁と床のほとんどを流失しているが、周溝は全周していたのではないかと考えられる。深さ約4cm。柱穴は1本が検出されているだけである。深さ48cm。炉は北側によっている。石窯炉であったと思われるが、ほとんどの礫は抜き取られている。

4号住居址（第6図、図版2-1）

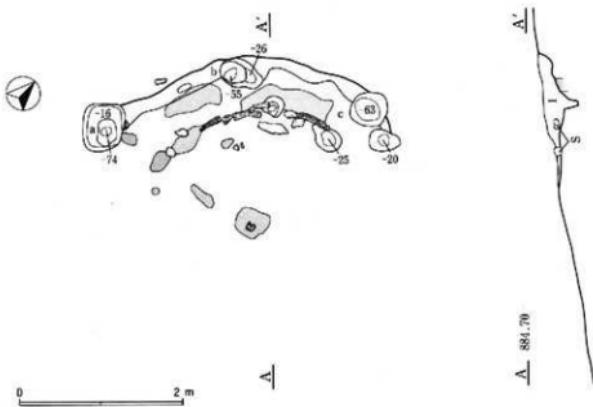
C-10で検出された。平面形・規模とも、遺存率が少なく不明といわざるを得ない。斜面上方で北西壁が一部検出されている。壁高は15cmを測る。床面が所々焼けている他、覆土にも炭化材・炭化物を多く含む。焼土塊が床面に広がっており、焼失住居と考えられる。また、床面にある礫から、部分的な敷石があったものと考えられる。周溝は検出されなかった。柱穴は、壁際に見受けられる。a=74cm, b=55cm, c=63cm。炉は、埋廐炉で、ほぼ中央にあったのではないかと思われる。

遺物は、一括土器の出土はなかったが、土製鉢・土鍤状土器製品（図版51-2）が出土している。石器は、磨石、凹石、横刃形石器が出土している。

本住居址の時期は、後期に属するものと考えられる。

5号住居址（第7図、図版2-2）

C-D-13で検出された。平面形態は、ほぼ円形を呈する。規模は、長径497cm、壁高38cmを測る。長軸方向は、N-19°-Eを指す。床や壁は、6号住居址との重複により、北東の1/3は検出されなかった。周溝は、重複により一部なくなっているが、全周していたものと思われる。周溝の深さは、5~20cmを測る。柱穴は、eとfの2本が本住居址のものと考えられる。また、6号住居址内のdも5号住居址の柱穴となる可能性がある。炉は検出できなかったが、6号住居址によって壊されたものと思われる。覆土は2層に分層が可能であ

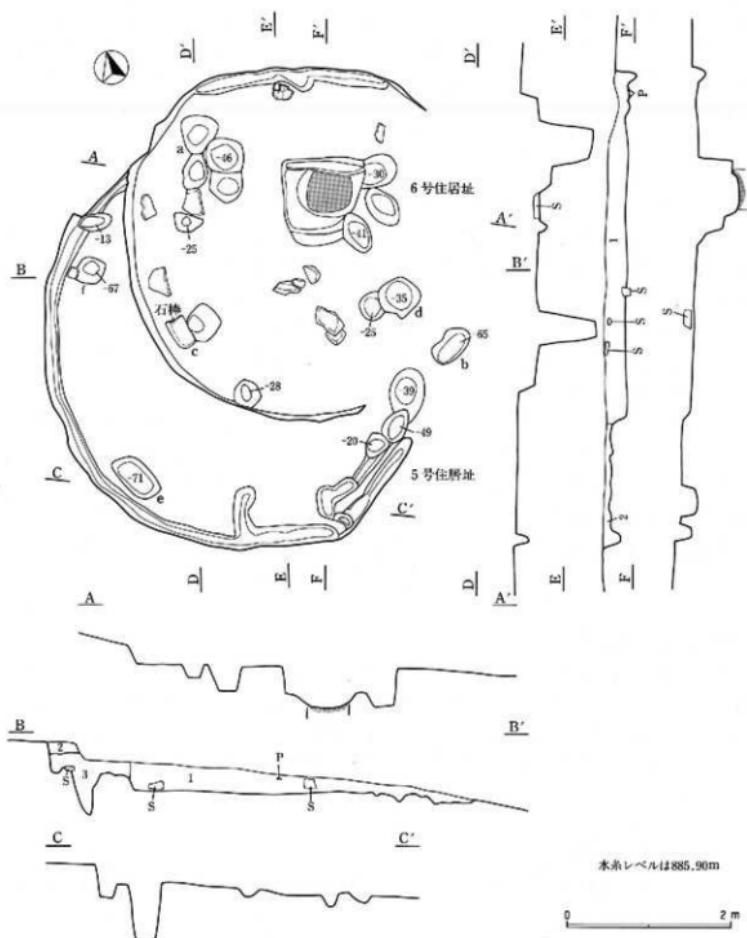


第6図 4号住居址 (1/60)

る。①黒褐色土。粒子は細かく、よく縮っているが、粘性はない。5~10mmのロームブロックが混入する。
②暗褐色土。粒子は細かく、よく縮っているが、粘性はない。

本住居址からは、時期を特定できるような一括土器の出土はなかったが、石器は、凹石、横刃形石器、小型磨製石斧、石錐が出土している。

6号住居址と重複しており、6号住居址が新しい。



第7図 5・6号住居址 (1/60)

6号住居址（第7図、図版2-2）

C-D-13・14で検出された。平面形態は、ほぼ円形を呈するものと思われる。規模は、長径434cm、壁高32cmを測る。長軸方向は、N-13°-Eを指す。床と壁は、斜面下方の東側が約1/3ほど流失している。周溝は、北壁際に検出された。深さ約11cm。柱穴は、北東隅は不明であるが、4本柱であったと考えられる。かは、中央より奥である北側に寄っている。石圓炉であったと考えられるが、礫は抜き取られている。覆土は、暗褐色土の單一層で、全体にローム粒子が入る。炉の覆土は暗褐色土で、粒子は細かく、よく縮っているが、粘性はない。10~40mmのロームブロックを少量含む。炭化物粒子、10mm以下のロームブロックを稀に含む。

遺物は、一括土器が北壁際に1個体あったが、完形とはならない。床面に無頭石棒が倒れた状態で出土している。柱穴d内から土偶の脚部が2片に折れて出土している（図版50-6）が、5号住居址のもの可能性もある。その他の石器には、横刃形石器、小型磨製石斧、石錐がある。

7号住居址（第8図、図版2-3）

D-14・15で検出された。平面形態は、南北に長い隅丸長方形を呈する。主軸が東西になると思われる所以、奥行よりも幅の方が広いことになる。規模は、長径527cm、短径347cm、壁高34cmを測る。長軸方向は、N-22°-E、主軸方向はN-68°-Wを指す。床面は、凹凸は少ないが、斜面の下側である東側に傾斜している。かは、斜面の下である東壁側が流失している。周溝は、北壁の一部に見られる。深さ20cm。柱穴は、4本と考えられる。a=27cm、b=41cm、c=38cm、d=40cm。北西のb及び南東のdの内側にそれぞれeとfがある。e=15cm、f=17cm。かは、中央より奥である西側に寄っている。石圓炉であるが、礫は抜き取られ、詰めてあつた小礫が残るだけである。覆土は、2層に分層できる。①暗褐色土。粒子は細かく、よく縮っているが、粘性はない。1~5mmのローム粒子を多く含む。黒色土が所々に斑状に入り、やや黒みを帯びる。②暗褐色土。粒子は細かく、よく縮っているが、粘性はない。5~20mmのロームブロックを多く含む。ローム粒子の混入が多く、明るい感じがする。炭化物を稀に含む。炉の覆土は暗褐色土で、粒子は細かく、よく縮っているが、粘性はない。30mmほどのロームブロックが入る。炭化物・焼土ブロックの混入も認められる。

遺物は、炉の掘り込みに掛かるように、一括土器が2個体あったが、完形とはならない（図版32-1）。石器は、凹石、横刃形石器、磨製石斧が出土している。凹石は、かに詰めた小礫に混じって出土。

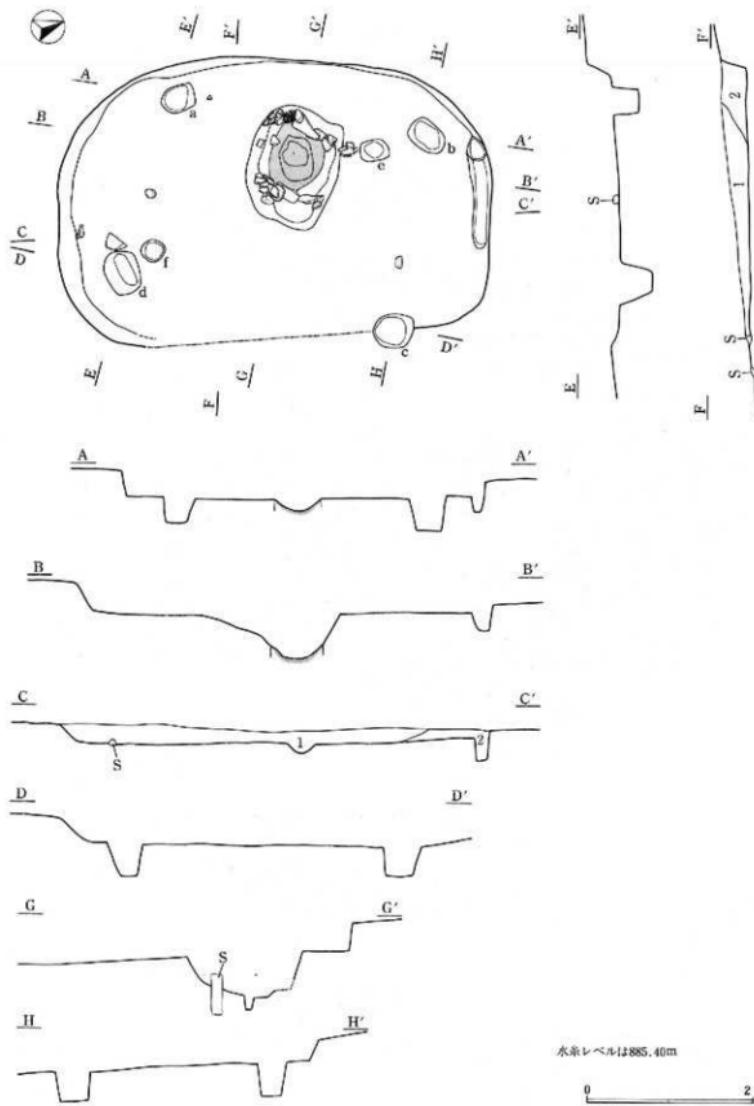
10号住居址（第9図、図版3-1・2）

C-D-7・8で検出された。遺存率が少なく、平面形、規模は不明。壁高は、65cmを測る。11号住居址と重複しているため、床面・壁とも東半分は破壊されている。周溝は認められない。柱穴は幾つか検出されているが、配置は不規則である。炉は、11号住居址に切られており、検出できなかった。

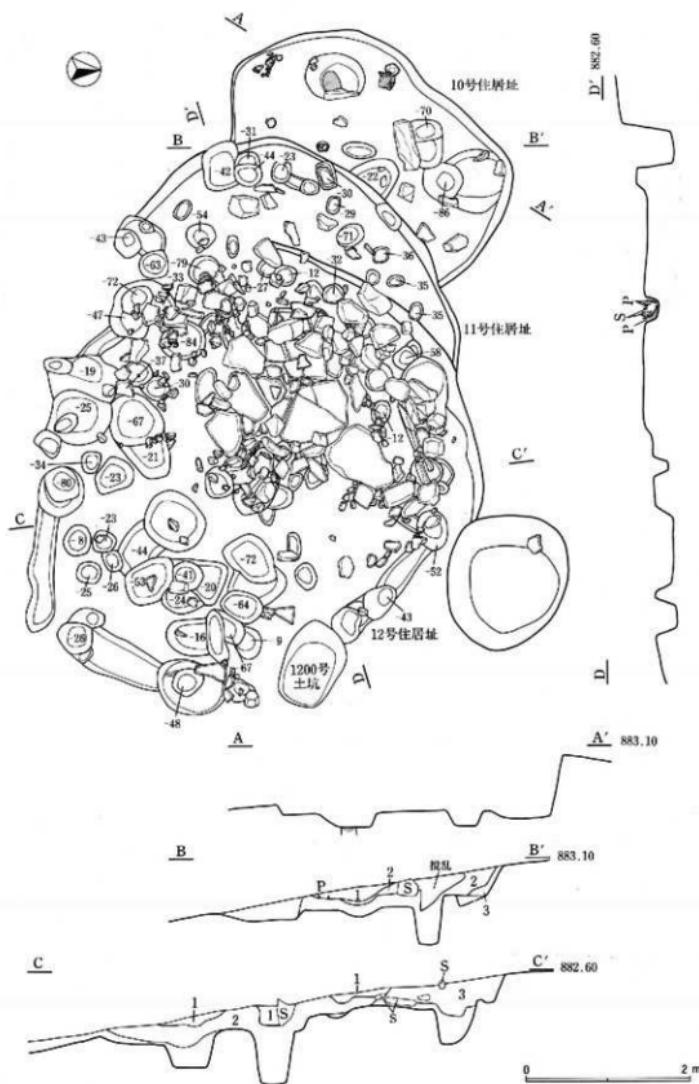
遺物は、一括土器が3個体出土している（図版32-2~4）。石器は、凹石、打製石斧、大型粗製石匙、石錐が出土している。

11号住居址（第6図、図版3-1・2）

C-D-7・8で検出された。遺存率が少なく、平面形、規模は不明。壁高は、30cmを測る。12号住居址と重複しているため、床面・壁とも東半分は破壊されている。周溝は、検出されなかった。炉は、埋甕炉が12号住居址の敷石下で検出された。10号住居址、12号住居址と重複している。10号住居址との新旧関係は不明であるが、12号住居址の敷石下から本住居址のものと考えられる埋甕炉が検出されており（図版32-5）、12号住居址



第8図 7号住居址 (1/60)



第9図 10・11・12号住居址 (1/60)

の方が新しいことが確認された。

本住居址の時期を特定できるような一括土器の出土はなかった。

12号住居址（第9図、図版3-1～3）

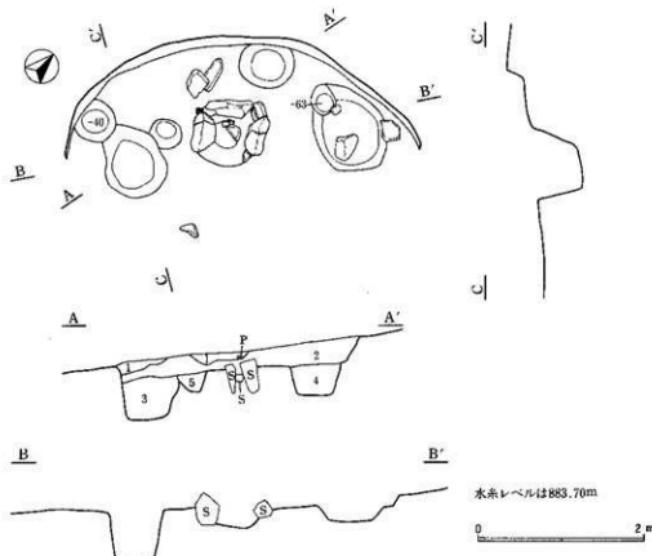
C-D-7で検出された。平面形態は、ほぼ長円形を呈する。規模は、長径570cm、短径525cm、壁高35cmを測る。長軸方向は、N-47°-Wを指す。敷石住居で、掘り方より10cm程浮かして平石を敷き詰めている。斜面の下方にあたる東側には平石は認められないが、流失したのか部分的な敷石だったのかは不明である。周溝は、部分的にしか検出できていないが、ほぼ全周していたものと思われる。主柱穴は不明であるが、壁面に沿って幾つもの柱穴が回って検出されている。炉は石囲炉で、中央にある。礎は熱を受けて細かく割れている。

遺物は、一括土器（図版32-6）の他ミニチュア土器2個が出土している（第52図4・7、図版33-1・2）。石器は、石皿、磨石、凹石、横刃形石器、打製石斧、磨製石斧、小型磨製石斧、石錐（図版49-2）、石棒が出土している。

本住居址の時期は、後期に属するものと思われる。

13号住居址（第10図、図版4-1）

C-D-8-9で検出された。遺存率が少なく平面形、規模とも不明。壁高は、33cmを測る。壁は、斜面上方の北西壁が検出されただけである。周溝は、検出されなかった。炉は西壁近くに寄っている。石囲炉で、東側の礎は抜き取られ、西側に散乱している。



第10図 13号住居址 (1/60)

遺物は、時期を特定できるような一括土器の出土はなかったが、石器は横刃形石器と打製石斧が出土している。

14号住居址（第11図、図版4-1）

D-E 8・9で検出された。遺存率が少なく平面形、規模とも不明。壁高は、23cmを測る。床面には、壁から30~60cm内側に礫が並べられていた。部分的に平石を敷いた敷石住居であったのではないかと思われる。壁は、斜面上方の北西壁が検出されただけである。周溝は、検出されていない。柱穴も、検出されなかった。がは、流失している。

遺物は、復元はできなかったが、注口上器破片が出土している。

本住居址の時期は、後期に属するものと思われる。

15号住居址（第12図、図版2-1）

C 10・11で検出された。遺存率が少なく平面形、規模とも不明。壁高は、37cmを測る。壁は、斜面上方の北壁から西壁にかけてが検出された。周溝は、検出できた北壁に沿って検出されている他、西壁側では壁から50cm程内側で確認された。深さ10~14cm。柱穴は幾つか検出されているが、規則的な配置はされていない。がは、石圍炉であったと考えられるが、礫を抜き取られている。

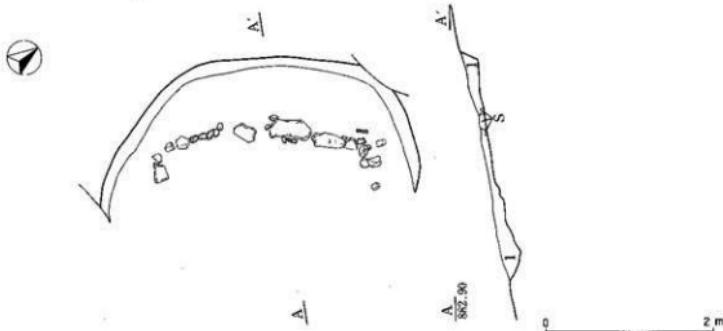
遺物は、時期を特定できるような一括土器の出土はなかったが、石器は磨石が出土している。

83号住居址と重複している。

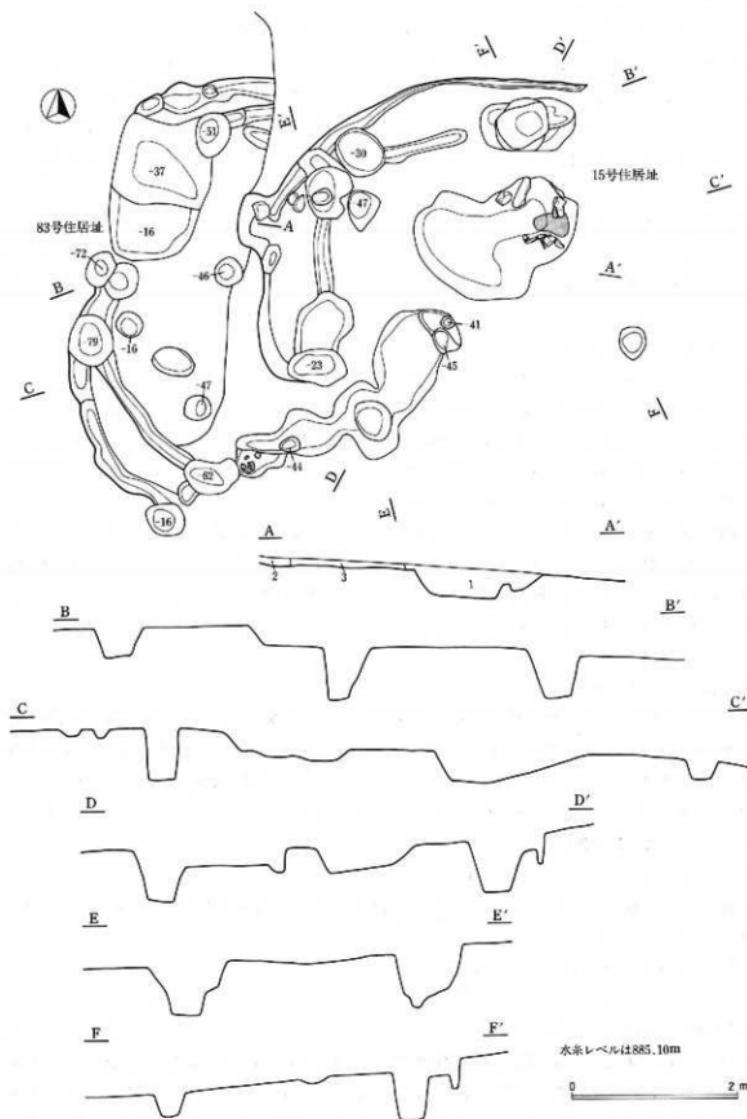
83号住居址（第12図）

B-C 10-11で検出された。遺存率が少なく、平面形、規模とも不明。北側と南西側に深さ9cmほどの周溝が検出されている。周溝は重なり合っていることから、2軒の重複と考えられる。柱穴は、幾つか検出されているが、主柱穴を特定できない。

遺物は、時期を特定できるような一括土器の出土はなかったが、石器は凹石、横刃形石器、打製石斧、磨製石斧、小型磨製石斧などが出土している。



第11図 14号住居址 (1/60)



第12図 15・83号住居址 (1/60)

16号住居址（第13図、図版4-2-3）

D-E-11で検出された。平面形態は、奥行よりも幅の方が広い長円形を呈するのではないかと思われる。規模は不明であるが、壁高70cmを測る。壁は、17号住居址と重複している他、斜面下部の流失で北～西壁だけが検出されている。周溝は、ほぼ全周していたものと思われる。深さ9cm。それぞれの柱穴の深さは、d=62cm、e=42cm、P=43cm、i=72cm、j=69cm、k=47cm、l=70cm、m=56cm、n=60cm、o=46cmを測る。炉は、中央よりやや北に寄っている。石圓炉であったと思われるが、大きな礫は抜き取られている。

遺物は、一括土器の他、石器は凹石、打製石斧などが出土している。

本住居址の時期は、曾利II～III期になるとと思われる。

17号住居址と重複している。当初1軒の住居址と考えて掘り下げを開始したため、一括で出土したもの以外は2軒の住居址の遺物をまとめてしまった。

17号住居址（第13図、図版5-1-2）

D-E-10-11で検出された。平面形態は、奥行よりも幅の方が広い長円形を呈するのではないかと思われる。規模は不明であるが、壁高64cmを測る。床と壁は、斜面下方の東側半分では検出されていない。周溝は、ほぼ全周していたものと思われる。柱穴は、南東隅を欠くが、4本柱になるのではないかと考えられる。a=46cm、b=65cm、c=66cm、f=46cm、g=56cm、h=63cm。炉は、中央よりやや北に寄っている。石圓炉であったと思われるが、大きな礫は抜き取られている。

遺物は、床面直上から底部を欠く一括土器が出土している。また、16号住居址の柱穴になると思われるPの上から一括土器が出土している。このことから、住居址の時期はほぼ同じながら、本住居址の方が新しいと考えられる。石器は、凹石、横刃形石器、打製石斧、磨製石斧、石錐が出土している。

本住居址の時期は、曾利II～III期になるとと思われる。

24号住居址（第14図、図版5-3）

B-6-7で検出された。遺存率が少ないため、平面形は不明である。規模も不明であるが、推定長径410cm、壁高36cmを測る。埋甕と焼土を結ぶ軸線は、N-67°-Eを指し、埋甕と炉の可能性のある掘り込みとを結ぶ軸線はN-50°-Eを指す。床や壁は、西半分は流失により検出されていない。周溝も検出されていない。柱穴は、a～dの4本柱になるものと思われる。炉は、石圓炉であったと思われるが、炉石と考えられる礫は、焼土の検出された位置と離れて出土した。

甕の下から埋甕が出土した（図版6-1,34-3）。

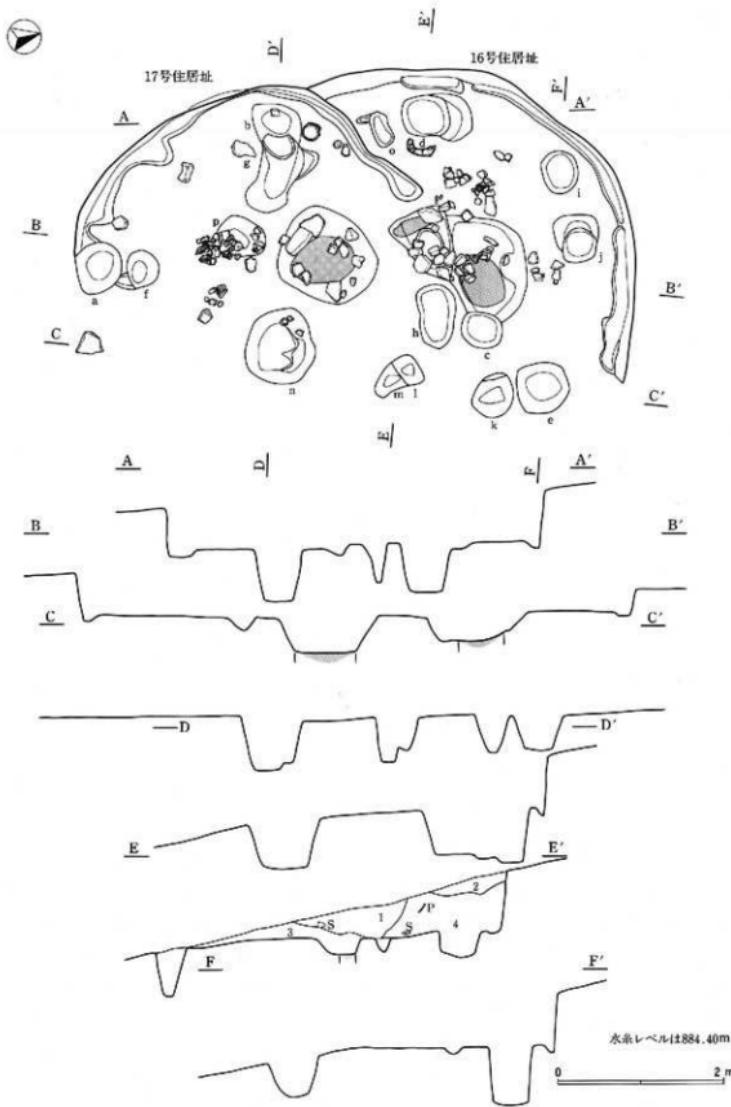
遺物は、埋甕の他、一括土器が2点出土している（図版34-1-2）。石器は、凹石、横刃形石器、打製石斧、石錐などが出土している。

本住居址の時期は、曾利III～IVになるものと思われる。

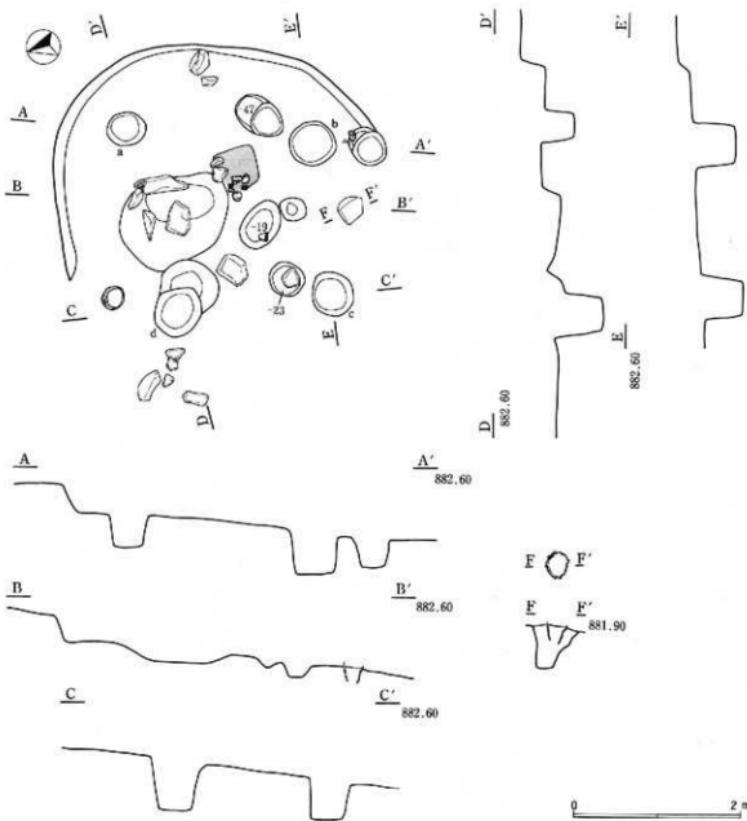
26号住居址（第15図、図版6-3）

C-D-12で検出された。平面形態は、遺存率は少ないが、隅丸方形になるのではないかと思われる。規模は、長径400cm、壁高25cmを測る。壁は、北壁と西壁の一部を残しているだけである。周溝は、西壁で一部検出されている。深さ8cm。主柱穴は、はっきりしない。焼土が南西側にあるが、炉になるかどうかは不明。

遺物は、時期を特定できるような一括土器の出土はなかったが、石器は凹石、石錐が出土している。



第13図 16・17号住居址 (1/60)



第14図 24号住居址 (1/60)

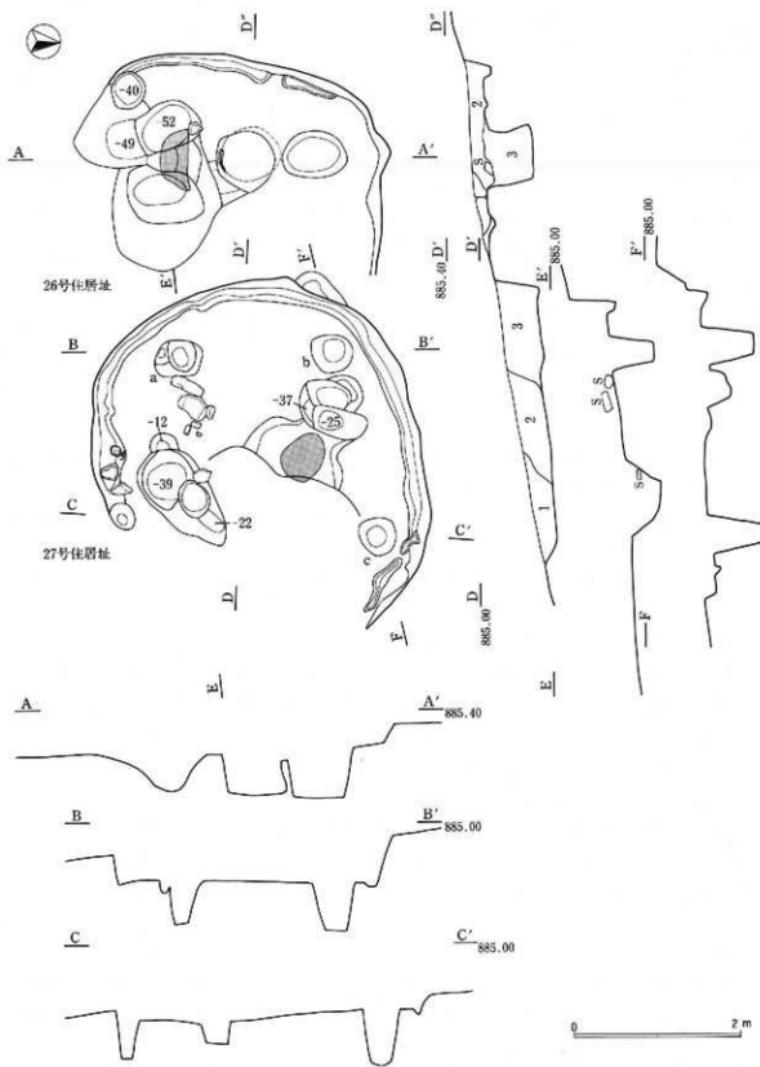
27号住居址 (第15図、図版6-3)

D-E-12で検出された。平面形態は、奥行よりも幅の方が広い長円形になると思われる。規模は、長径460cm、短径389cm、壁高58cmを測る。長軸方向はN-65°-Eを指し、主軸方向はN-36°-Wを指す。壁は、斜面の下側になる南東壁が流失している。深さ4~12cmの周溝がほぼ全周する。柱穴は、4本柱になると想えられるが、南東隅は抜根による擾乱もあり、未検出である。a=53cm、b=62cm、c=71cm。扉は、石門扉であったと考えられるが、礫は抜き取られている。

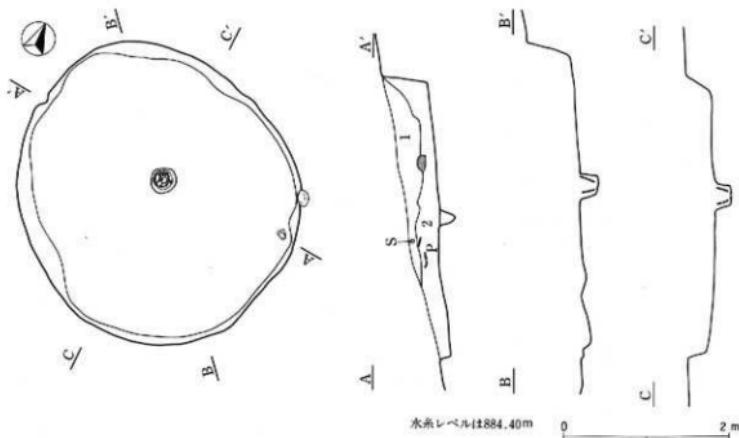
遺物は、時期を特定できるような一括土器の出土はなかったが、石器は磨製石斧、石棒が出土している。

28号住居址 (第16図、図版7-1)

E-14で検出された。平面形態は、不整長円形を呈する。規模は、長径376cm、短径321cm、壁高51cmを測



第15図 26・27号住居址 (1/60)



第16図 28号住居址 (1/60)

る。長軸方向は、N-23°Wを指す。床は、やや東に傾斜しているものの、ほぼ水平である。周溝や柱穴は、検出されなかった。炉は埋蔵炉で、ほぼ中央にある。

遺物は、埋蔵炉に用いられた炉体土器以外に一括土器の出土はなかったが、石器は凹石、打製石斧が出土している。

本住居址の時期は、炉体土器（第51図1、図版34-4）から、新道になると思われる。

30号住居址（第17図、図版7-2-3,8-1）

G-H-12-13で検出された。平面形態は、ほぼ円形を呈する。規模は、長径570cm、短径545cm、壁高66cmを測る。幾つもの住居址と重複しており、壁の検出は難しかった。周溝は、検出されなかった。柱穴は、70号住居址と重複しており、特定は難しい。炉は、円形の石圓炉で（図版8-2）、ほぼ中央にある。

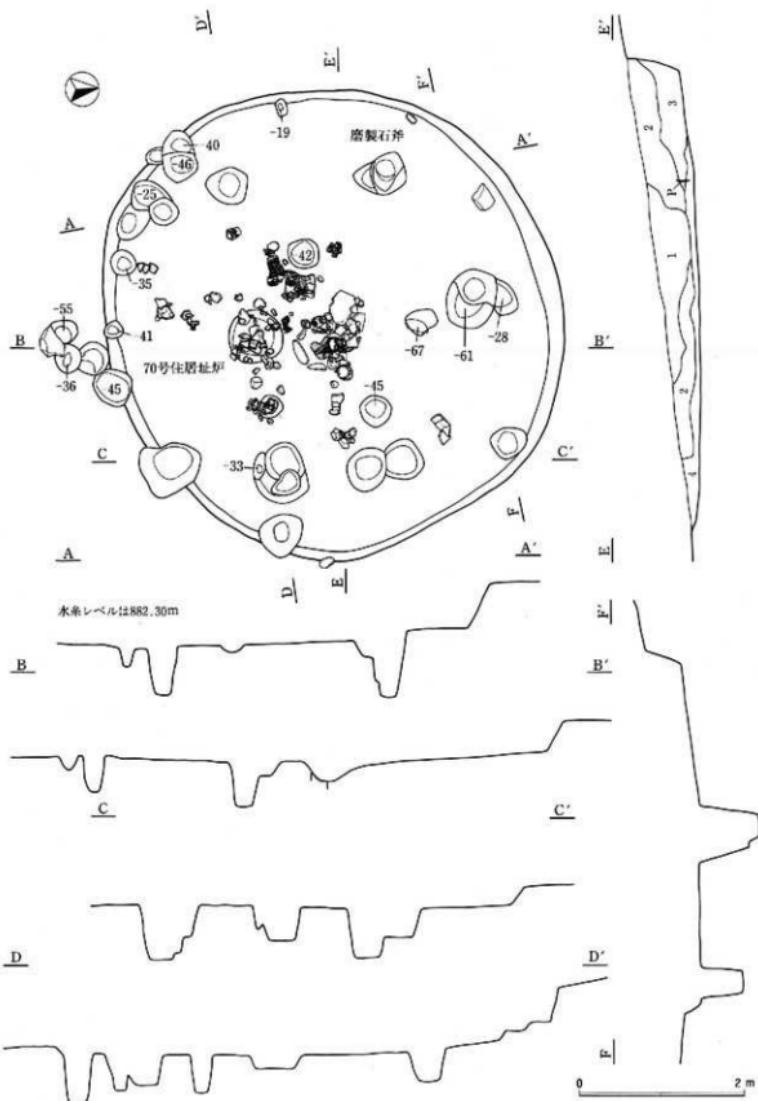
遺物の出土は多いが、床面よりかなり高い覆土内に集中する。一括土器が多数出土している（第51図2～8、図版34-6～36-5）。また、土偶頭部の出土もあった（第53図2、図版50-5）。石器の出土も多く、石皿、磨石、凹石、横刃形石器、打製石斧、磨製石斧、大型粗製石匙、石匙、石錐、石鏃、石錐、スクレイバーなどが出土している。特に、凹石の13点、横刃形石器の24点、打製石斧の31点は特筆される。

本住居址の時期は、覆土に投込まれた土器から、藤内II-井戸尻I・IIにかけてのものと考えられる。

70号住居址（第17図）

G-H-12に位置する。30号住居址の炉の南側に別の炉が検出されたことにより命名した。床面レベルも同じであり、平面形や規模は不明であるが、30号住居址より一回り規模が小さくなると思われる。炉は、石圓炉であったと考えられるが、礫は抜き取られている。

遺物は、時期を特定できるような一括土器の出土はなかったが、石器は横刃形石器、小型磨製石斧が出土している。

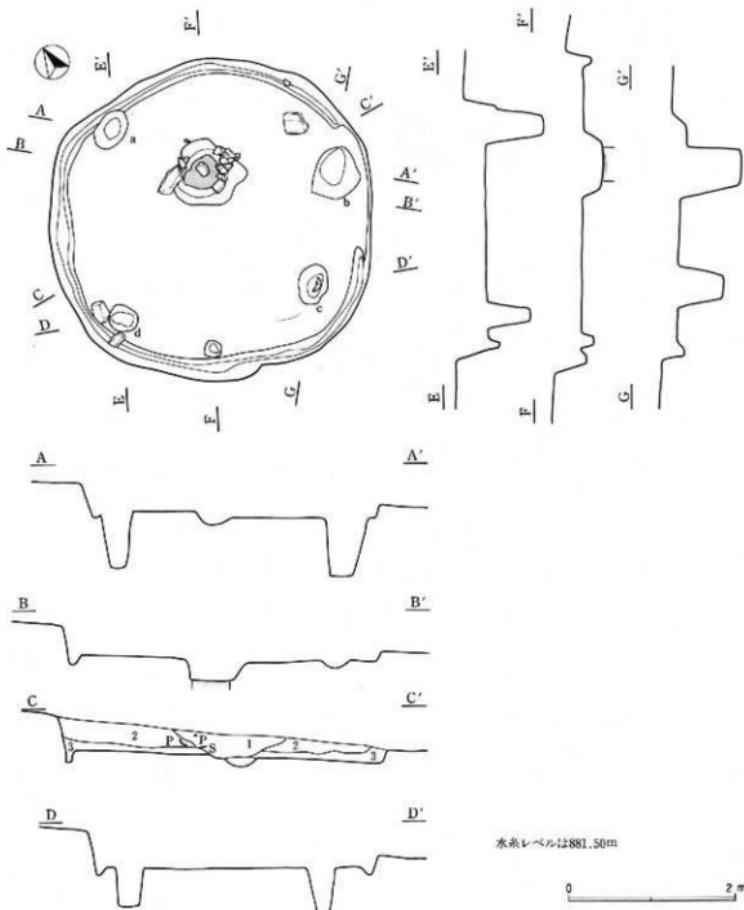


第17図 30・70号住居址 (1/60)

31号住居址 (第18図、図版8-3)

H-12-13で検出された。平面形態は、円形を呈する。規模は、長径394cm、短径391cm、壁高40cmを測る。長軸方向は、N-30°-Eを指す。床面は、多少の起伏は認められるものの、ほぼ平坦で水平である。周溝は、斜面下方の南東の一部を除いて、ほぼ全周している。柱穴は、壁際にある4本が主柱穴になるとと思われる。a = 72 cm、b = 74 cm、c = 57 cm、d = 53 cm。入口と考えられる南西側に、径20cm、深さ15cmの小ビットがある。炉は、ほぼ中央、やや北東寄りにある。石圓炉であったと考えられるが、礫は抜き取られている。

遺物は、炉に掛かるようにして、一括土器が出土している (図版36-6)。石器は、磨石、凹石、横刃形石



第18図 31号住居址 (1/60)

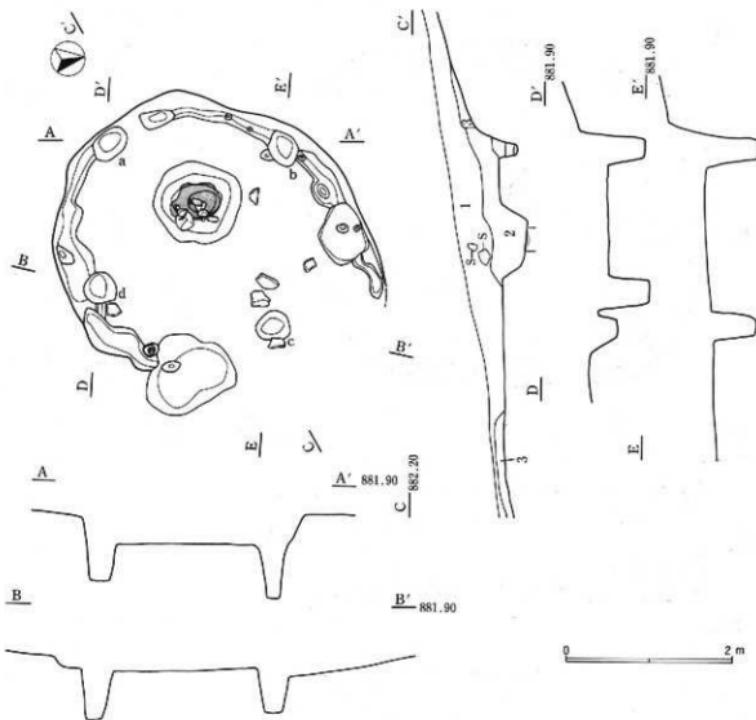
器、打製石斧が出土している。

33号住居址（第19図、図版9-2）

G-H-14-15で検出された。平面形態は不明瞭ながら、径350cm前後の円形を呈すると思われる。壁高は、35cmを測る。長軸方向は、N-82°-Wを指す。床は、やや東に傾斜しているものの、ほぼ平坦である。壁は、斜面の下側である東壁側を流失している。北壁側は、炉と主柱穴の位置関係から、掘りすぎの可能性もある。周溝は、全周していたと思われる。柱穴は、4本であったと考えられる。a = 49cm, b = 64cm, c = 55cm, d = 61cm。かは、奥である西側に寄っている。石圓炉であったと考えられるが、礫は抜き取られている。

遺物は、南東隅で一括土器が出土している（図版37-1）。石器は、磨石、横刃形石器、打製石斧、磨製石斧、石錐、石鐵が出土している。

本住居址の時期は、曾利III期になると思われる。



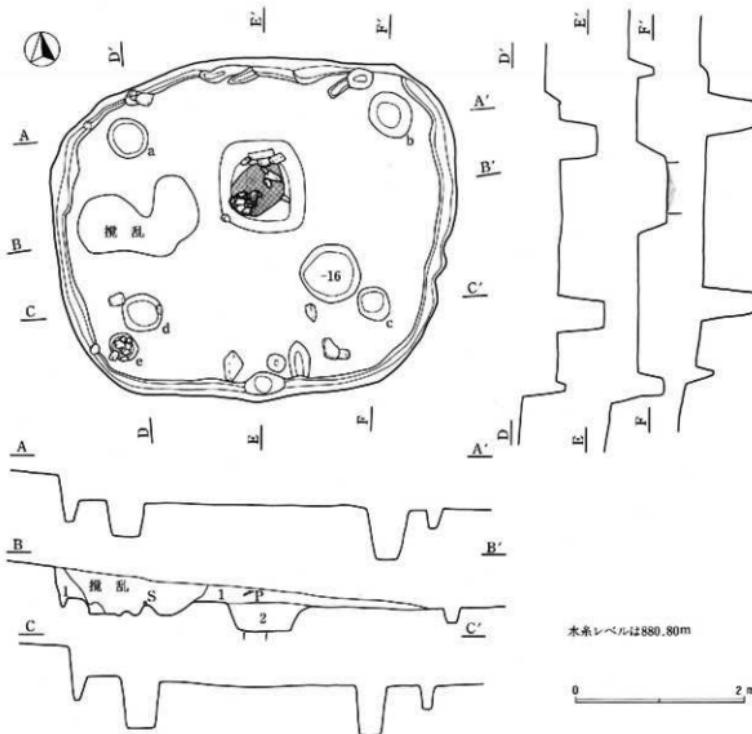
第19図 33号住居址 (1/60)

34号住居址（第20図、図版9-3）

I-J-13-14で検出された。平面形態は、東西に長い隅丸長方形を呈する。奥行よりも幅の方が広い。規模は、長径490cm、短径416cm、壁高36cmを測る。長軸方向はN-90°-Eを指し、主軸方向はN-5°-Eを指す。斜面の下にあたる東壁側は、周溝が残るのみである。周溝は、全周している。柱穴は、4本柱になると思われる。南西隅には2本あるが、立替えたものか。a = 49cm、b = 61cm、c = 61cm、d = 61cm、e = 40cm。入口になると思われる南壁中央に、深さ30cmのピットがある。がは、中央よりやや北側に寄る。石圓炉であったと思われるが、大きな礫は抜かれてしまい、下に詰めた石だけが残る。

一括となる土器は炉の上にある土器だけであるが（図版37-2）、これも床面からは20cmほど浮いて出土している。石器は、石皿、凹石、打製石斧が出土している。また、水晶や砥石も出土している。

本住居址の時期は、曾利Ⅱ期になるとと思われる。



第20図 34号住居址 (1/60)

36号住居址（第21・22図、図版10-1）

F-11で検出された。37・42・48・50号住居址と重複しており、平面形・規模は、明らかでない。敷石住居であるが、斜面の下である東側には礫はない。流失したものか。壁は、他住居と重複しているため、北西壁が一部検出されただけである。周溝は、検出されていない。柱穴も特定できない。炉は、ほぼ中央にあったと考えられる。埋甕炉で、2個体が使用されていた（図版10-2）。覆土は、黒褐色土で、粒子は細かく、よく縮っているが、粘性はない。

遺物は、一括土器の出土はないが、埋甕が用いられた炉体土器は残りが良い。（第52図18、図版37-3・4）。石器は、凹石、横刃形石器、打製石斧が出土している。

本住居址の時期は、後期に属すると考えられる。

37号住居址（第21・22図、図版10-3）

F-G-10-11で検出された。平面形・規模とも不明瞭である。敷石が部分的に残っており、住居址とした。重複が激しく、全容は不明であるが、周溝が南壁側で約1mの長さで検出された。柱穴も特定できない。炉も検出できなかった。覆土は黒褐色土で、粒子は細かく、よく縮っているが、粘性はない。

出土した遺物に、ミニチュア土器・蓋がある（第52図5・6、図版37-5）。石器は、凹石、横刃形石器、打製石斧、小型磨製石斧、大型粗製石匙、石鎌がある。

本住居址の時期は、後期に属すると考えられる。

42号住居址（第21図、図版11-3）

E-F-10で検出された。平面形は不明。規模は、長径は不明であるが、短径320cm、壁高27cmを測る。壁は、斜面下方の南東側は半分以上が流失している。周溝は、壁の残る北西側で検出された。ほぼ全周していたと思われる。深さ7~20cm。柱穴は、西側で2ヵ所検出された。a=58cm、b=47cm。炉は、石圓炉である。

遺物は、時期を明らかにできる一括土器の出土はなかったが、凹石、打製石斧の出土があった。

本住居址の時期は、曾利Ⅰ期になると思われる。

18・37・47・50・51号住居址と重複している。

47号住居址（第21図）

F-G-10-11で検出された。平面形態は、長円形を呈する。規模は長径・短径とも推定ながら、長径610cm、短径390cm、壁高67cmを測る。長軸方向は、N 60°-Eを指す。壁は、斜面下側の南東壁は流失している。周溝は、検出されなかった。柱穴は多数検出されているが、本住居址の柱穴を特定できない。南東側によつたところに石圓があるが、礫は抜き取られている。また、南東隅にも焼土がある。

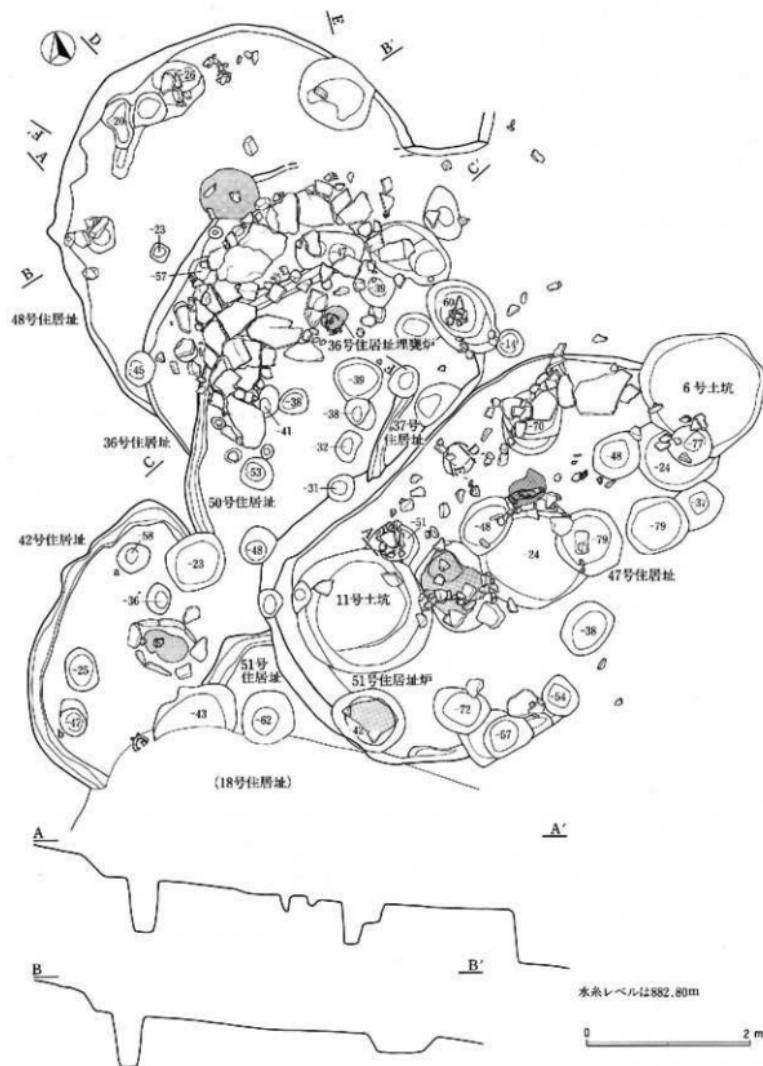
遺物は、時期を明らかにできる一括土器（図版38-6）が出土している他、横刃形石器が出土している。

本住居址の時期は、曾利Ⅰ~Ⅱ期になると思われる。

6・11号土坑と重複している。

48号住居址（第21・22図）

F-11-12で検出された。平面形態は、ほぼ円形を呈する。規模は、長径は不明であるが、短径460cm、壁高40cmを測る。壁の南側は、他住居との重複で検出されなかった。周溝も、検出されなかった。柱穴は不明で



第21図 36・37・42・47・48・50・51号住居址(1/60)

ある。炉は地床炉である。36号住居址の敷石下で検出していることから、本住居址の方が古いと考えられる。遺物は、時期を明らかにできる一括土器の出土はなかったが、凹石、打製石斧の出土があった。

50号住居址（第21・22図）

F-10・11で検出された。36号住居址の敷石下から周溝を検出し、命名した。他住居との重複で、半分程度しか遺存していない。平面形・規模は、遺存率が少なく不明。他住居と重複しており、周溝の一部が検出されたのみで、壁らしき掘り込みは検出されなかった。周溝は、北西側で約1/4周検出された。

遺物は、時期を明らかにできる一括土器の出土はなかったが、石匙が出土している。

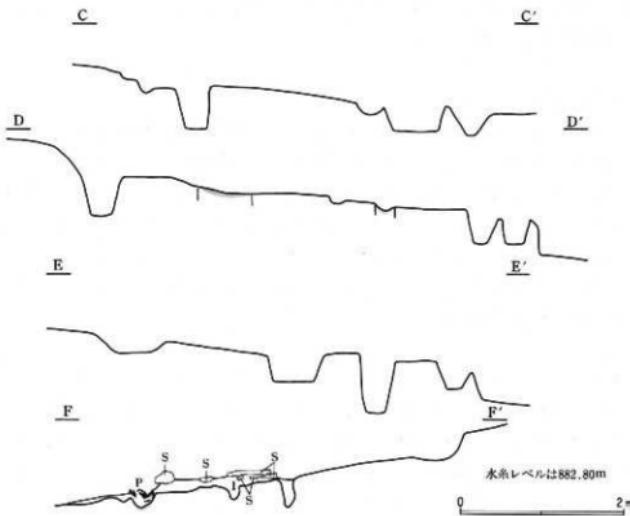
51号住居址（第21図）

F-10に位置する。18号住居址と47号住居址に挟まれた狭い範囲で検出された。周溝と床が僅かに残る他、47号住居址内に炉が検出されたことにより命名する。平面形・規模とも不明。周溝は、北側部分で約1mにわたって検出された。石開炉の礫は、ほとんどが抜き取られている。

遺物は、本住居址のものを特定できない。

38号住居址（第23図、図版II-1）

I-J-11・12で検出された。当初大型の住居址として掘り下げを開始したが、がが3ヵ所で検出され、3軒の重複であることが確認された。平面形態は、他住居との重複で定かでないが、残された周溝からほぼ円形であったと考えられる。規模は、長径540cm、短径520cmを測る。周溝は、北側で一部検出されている。重複しているため、全周していたかは不明。柱穴は、4本柱になるものと思われる。北西側のaは39号住居址の柱



第22図 36・37・48・50号住居址断面図 (1/60)

穴と重複すると思われるが、新旧関係は不明。 $a = 62\text{cm}$ 、 $b = 67\text{cm}$ 、 $c = 60\text{cm}$ 、 $d = 67\text{cm}$ 。炉は石圓炉であったと考えられるが、礫は抜き取られている。覆土は暗褐色土で、粒子は細かく、よく縮っているが、粘性はない。覆土から住居址の新旧関係を明らかにすることは出来ない。

遺物は、本住居址の遺物を特定できないが、一括土器がいくつか出土している（図版37-6,38-1）。また、凹石、打製石斧、石錐、石鎌の出土があった。

39号住居址（第23図、図版11-1）

I-J-11-12で検出された。平面形態は、他住居との重複で定かでないが、残された西半分の壁から長円形であったと推定される。規模は、長径560cm、短径490cm、壁高16cmを測る。周溝は、壁が確認できた西半分で検出された。ほぼ全周していたものと考えられる。深さ12~19cm。柱穴は、4本柱になるものと思われる。北側のaは39号住居址の柱穴と重複するとと思われるが、新旧関係は不明。 $a = 62\text{cm}$ 、 $e = 57\text{cm}$ 、 $f = 62\text{cm}$ 、 $g = 51\text{cm}$ 。炉は、石圓炉であったと考えられるが、礫は抜き取られている。覆土は暗褐色土で、粒子は細かく、よく縮っているが、粘性はない。覆土から住居址の新旧関係を明らかにすることは出来ない。

遺物は、本住居址のものを特定できない。

40号住居址（第23図、図版11-1）

I-J-11-12で検出された。平面形態は、他住居との重複で定かでないが、残された東半分の壁からほぼ円形であったと推定される。規模は、長径470cm、短径450cmを測る。周溝は、南東側で一部検出された。深さ9~16cm。柱穴は、4本柱になるものと思われる。 $h = 68\text{cm}$ 、 $i = 60\text{cm}$ 、 $j = 42\text{cm}$ 、 $k = 38\text{cm}$ 。炉は、石圓炉であったと考えられるが、礫は抜き取られている。覆土は暗褐色土で、粒子は細かく、よく縮っているが、粘性はない。覆土から住居址の新旧関係を明らかにすることは出来ない。

遺物は、本住居址のものを特定できない。

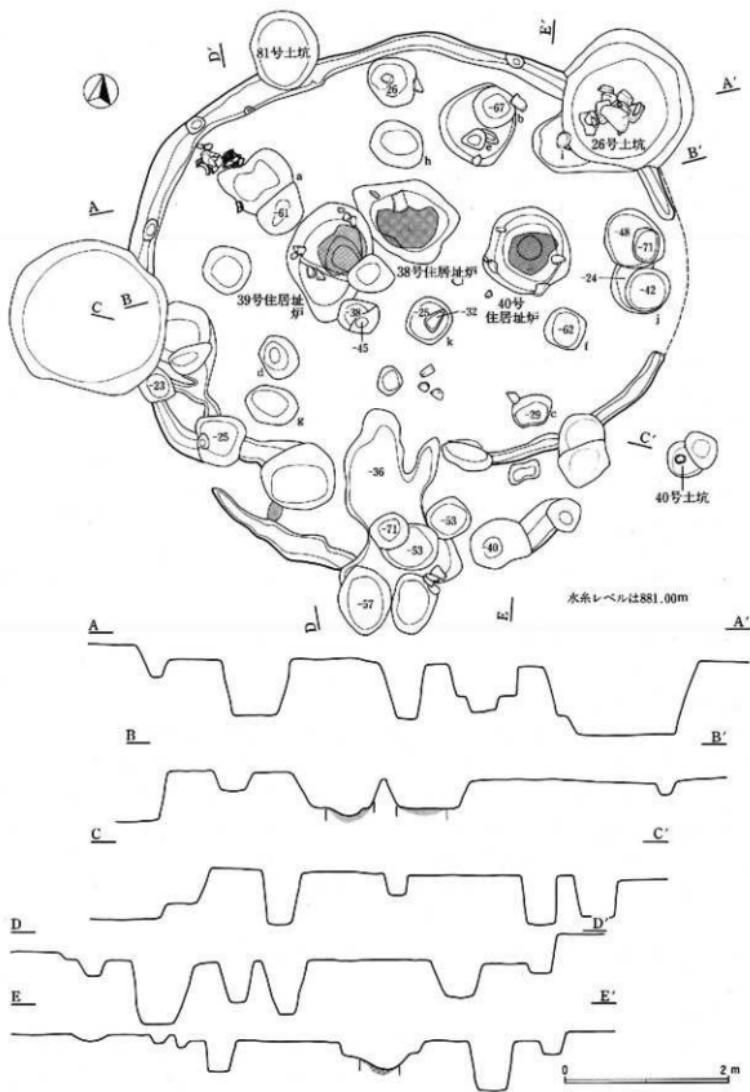
41号住居址（第24-25図、図版11-2）

E-9で検出された。後期の15号土坑が掘り込まれており、掘り下げ時には後期の住居址かと思われるほどであった。平安時代の18号住居址によって荒らされているため、全体像は不明。平面形態は、遺存率は少ないが、ほぼ円形になるのではないかと思われる。規模は、長径530cm、壁高70cmを測る。壁は、掘り込みが深いため、西側は残りは良い。南側に約1.5mにわたって周溝らしき掘り込みが検出されている。深さ約12cm。柱穴は幾つか認められるものの、主柱穴を特定するまでに至っていない。炉は埋甕炉である。

遺物の出土は少ないが、埋甕炉に用いられた土器（図版38-2）から、中期後半になるものと思われる。石器は、石皿、凹石、打製石斧が出土している。

44号住居址（第24-25図、図版12-3~13-2）

F-G-9で検出された。調査区内を南西から北東に続く配石があるが、この住居址の南東側だけ礫の平な面を上にするようになっていた。柄鏡形の住居址の柄の部分にだけ敷石を施してあったのではないかと思われる。柄部まで含めた長径は510cm、短径480cmを測る。長軸方向は、N-35°-Wを指す。敷石があったのは、柄部だけである。壁は、掘り込みの深さはあるものの、他住居の柱穴などによって荒されている。周溝は認められない。柱穴は、壁際を回っているものの幾つかが、本住居址のものになるのではないかと思われるが、特定



第23図 第38~40号住居址 (1/60)

できない。炉は、二重に礫を置いた石囲炉で、内側が熱を受け、細かく割れている。

出土した遺物には、ミニチュア土器（第52図1、図版38-4）と土製耳飾（第53図4）がある。また、炉石に石棒を転用している。その他、石皿、磨石、凹石、打製石斧、石錐、砥石、右鎌が出土している。

本住居址の時期は、後期に属すると思われる。

55号住居址（第24・25図、図版14-2・3）

F-9で検出された。平面形態・規模は、他住居と重複しており、不明。壁と床は、18号住居址によってすでになくなっている他、先に確認し掘り下げを行っていた44号住居址の調査でも床面を掘り込んでしまった。

埋甕炉の底になると思われる部分が44号住居址の床面から検出された他、18号住居址の床面でもこれを中心に回りそうな柱穴が幾つか認められたため、住居址番号を付した。

遺物は、埋甕炉に用いられた炉体土器（図版39-4）以外に、確実に本住居址に伴うと考えられる遺物は出土していない。

本住居址の時期は、後期に属すると思われる。

18（平安）・44（後期）・90号住居址と重複する。18・44号住居址より古いのは明らかであるが、90号住居址との新旧関係は不明である。

90号住居址（第24・25図）

E・F-9・10に位置する。18号住居址床面に地床がらしい痕跡があったため精査したところ、56号住居址のもとのと考えられる柱穴のさらに外側に柱穴が幾つか検出され命名した。平面形や規模は、不明である。おそらく、18号住居址によって、すでになくなってしまっているものと思われる。柱穴も特定できない。炉は地床炉である。

遺物は、本住居址のものを特定することはできなかった。

43号住居址（第26・27図、図版12-1）

E・F-12・13で検出された。平面形態は、ほぼ円形を呈する。規模は、長径640cm、短径610cmを測る。壁や床は、他住居との重複により、東半分は未検出である。壁が検出された部分については周溝も確認されている。柱穴は、4本柱になると考えられる。 $a = 68\text{cm}$ 、 $b = 70\text{cm}$ 、 $c = 52\text{cm}$ 、 $d = 69\text{cm}$ 。炉は消滅している。

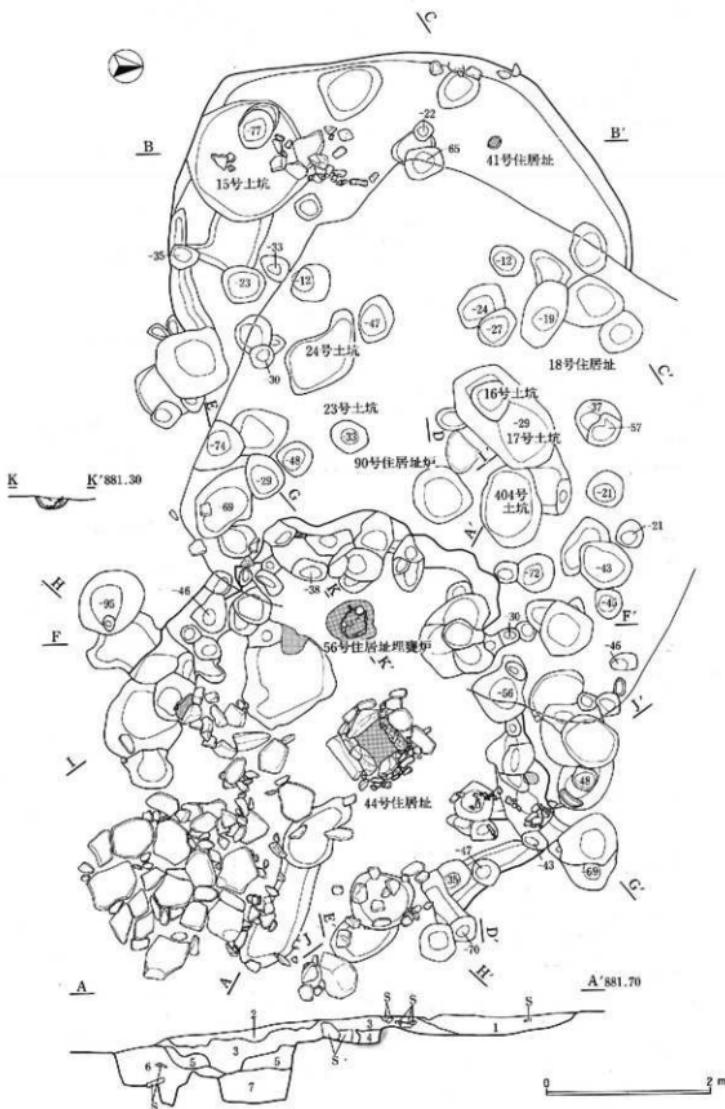
遺物は、かなり浮いた状態で、一括土器が多数出土している（図版12-2,38-3）。57号住居址の範囲とも重なっているが、土層の観察から本住居址の覆土内と考えられる。埋没過程の中で、投込まれたものと解してよいと思われる。石器は、磨石、凹石、横刃形石器、磨製石斧、大型粗製石匙などが出土している。

本住居址の時期は、曾利II期になるものと思われる。

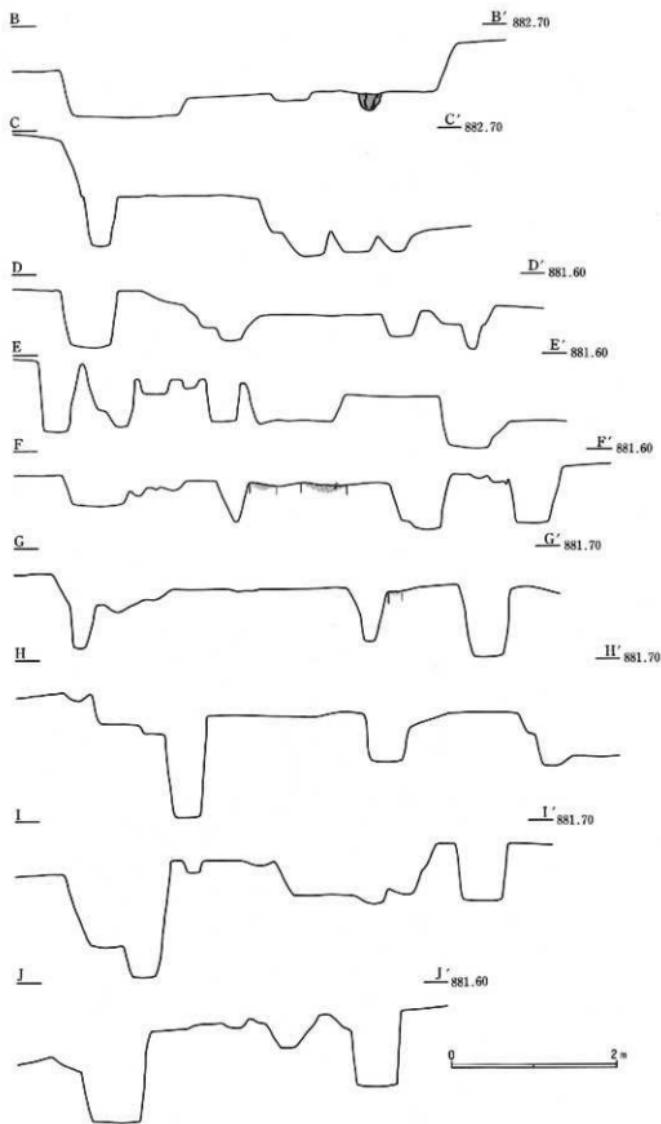
29・45・57号住居址・2号土坑と重複する。

45号住居址（第26・27図、図版12-1）

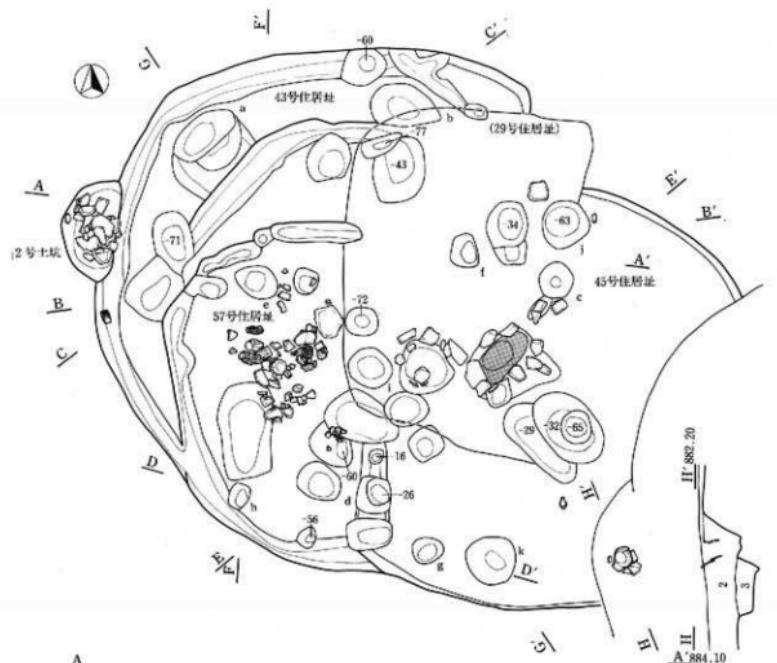
F 12で検出された。平面形は、ほぼ円形を呈するものと考えられる。規模は、径540cm、壁高30cmを測る。壁は、他住居址との重複により、北西側・南東側半分は未検出である。周溝は、検出されていない。柱穴は4本柱になるとされるが、北西部のものは未検出である。 $i = 61\text{cm}$ 、 $j = 63\text{cm}$ 、 $k = 55\text{cm}$ 。炉は石囲炉で、ほぼ中央にある。埋甕が46号住居址覆土内で検出されている（図版13-3,14-1,38-5）。土層の観察をした箇所



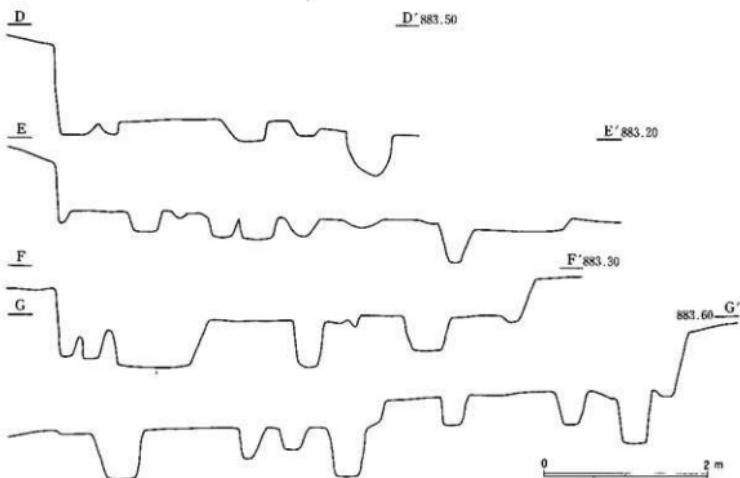
第24図 41・44・56・90号住居址 (1/60)



第25図 41・44・56・90号住居址断面図 (1/60)



第26図 43・45・57号住居址 (1/60)



第27図 43・45・57号住居址断面図 (1/60)

は、ほとんどが29号住居址の覆土となっており、図中5層としたものが、本住居址の覆土である。

遺物は、埋甕以外に、確実に本住居に伴うと考えられる一括土器は、出土していない。石器は、凹石が出士している。

本住居址の時期は、曾利Ⅰ期になるものと思われる。

57号住居址（第26-27図、図版12-1）

F-12-13に位置する。43号住居址内に、別の周溝が検出されたことにより命名した。平面形・規模はほとんど不明である。短径440cm程にならうか。壁は、他住居址との重複により、東側半分は未検出である。柱穴は、4本柱と考えられる。e=58cm、f=27cm、g=14cm、h=18cm。炉も検出されていない。

遺物は、本住居址のものを特定できない。

29（平安）・43（曾利II）・45（曾利I）号住居址と重複する。

46号住居址（第28図）

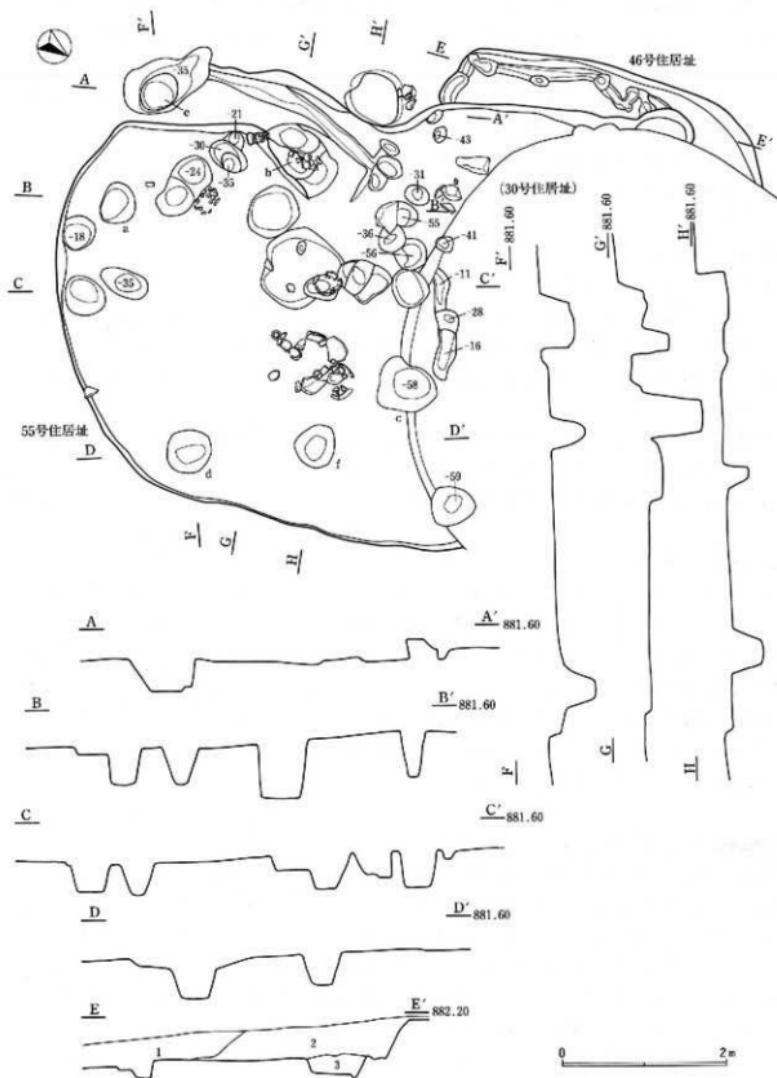
F-G-11-12で検出された。西側の一部が検出されただけで、詳細は不明である。壁高45cmを測る。覆土内で45号住居址の埋甕が出土しているが、土層観察で掘り込みを確認できていない。

45号住居址より古いことは確実であるが、本住居址の時期を特定できる遺物の出土はなかった。

30-45-55-70号住居址と重複。

55号住居址（第28図）

G-H-11-12で検出された。壁高13cmを測る。北壁は30号住居址との重複のため検出されず、南側も傾斜地のため流失したのか、5~13cm程度のごく浅い掘り込みしか検出されなかった。東壁は掘りすぎている可能



第28図 46・55号住居址 (1/60)

性が高い。住居西側に周溝になるかと思われる掘り込みがある。深さ3~5cm。柱穴は、4本柱になると考えられる。a=41cm, b=33cm, c=58cm, d=32cm。また、左右に2本柱穴がある。e=40cm, f=32cm。中央のピットが石囲炉になるものと思われるが、礫は抜き取られ、焼土も検出されていない。

出土遺物には、ミニチュア土器（第52図2、図版39-3）の他、一括土器2点がある（図版39-1・2）。石器は、石皿、磨石、凹石、横刃形石器、打製石斧、大型粗製石匙、石鎌が出土している。

本住居址の時期は、曾利II期になるものと考えられる。

30・70号住居址と重複している。

63号住居址（第29図）

D-E-4-5で検出された。平面形は、ほぼ円形を呈していたのではないかと思われる。規模は、長径510cm、短径480cm、壁高27cmを測る。周溝は、ほぼ全周している。二重となっている箇所もあり、重複または拡張のあった可能性もある。柱穴は多数あり、特定できない。炉址は検出されていない。覆土は暗褐色土で、粒子は細かく、よく縮っているが、粘性はない。64号住居址と重複するが、覆土による新旧関係の把握は不可能である。

遺物は、1個体が復元できた（図版39-5）他、石器として、凹石、横刃形石器、打製石斧、磨製石斧、スクレイバーが出土している。特に、打製石斧は10点の出土があった。

64（後期）・92（曾利I）号住居址と重複している。

64号住居址（第29図）

D-E-5で検出された。平面形態は、大半が63号住居址と重複しており、はっきりしないが、確認された北壁の様子から、隅丸方形ないし、隅丸長方形になるのではないかと思われる。規模は、長径502cm、壁高37cmを測る。覆土は暗褐色土で、粒子は細かく、よく縮っているが、粘性はない。63号住居址と重複するが、覆土による新旧関係の把握は不可能であった。

遺物は、時期を特定できるような一括土器の出土はなかったが、凹石、横刃形石器、打製石斧、小型磨製石斧、石錐などが出土している。特に、石錐は、8個が北東隅からまとめて出土している。

本住居址の時期は、後期に属するものと思われる。

65号住居址（第30図、図版15-3）

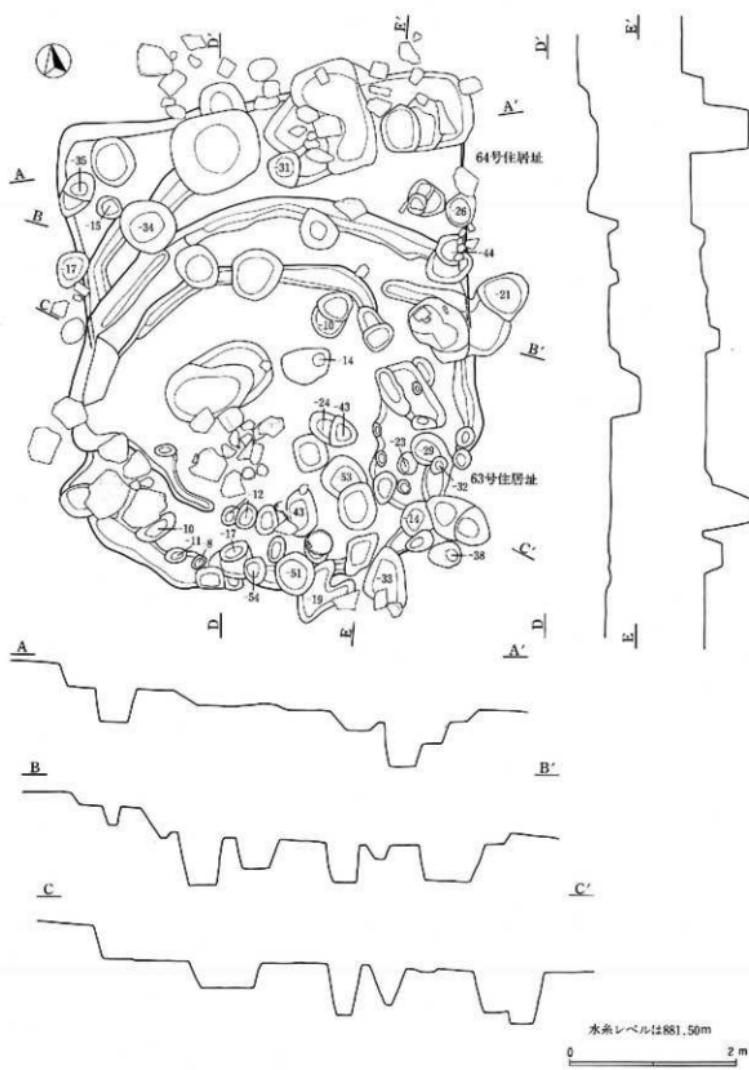
E-F-3で検出された。平面形態は、長円形を呈する。規模は、長径551cm、壁高17cmを測る。南壁は67号住居址との重複により、未検出である。周溝は、ほぼ全周している。柱穴は多数あり、特定できない。炉は石囲炉で、奥である北側に寄っている。覆土は暗褐色土で、粒子は細かく、よく縮っているが、粘性はない。

遺物は、同一個体の深鉢の破片が炉内を含めた中央南側に散乱して出土していた（図版39-6）。出土位置は床面直上からやや浮いたものまであった。石器は、石皿、凹石、横刃形石器、打製石斧が出土している。

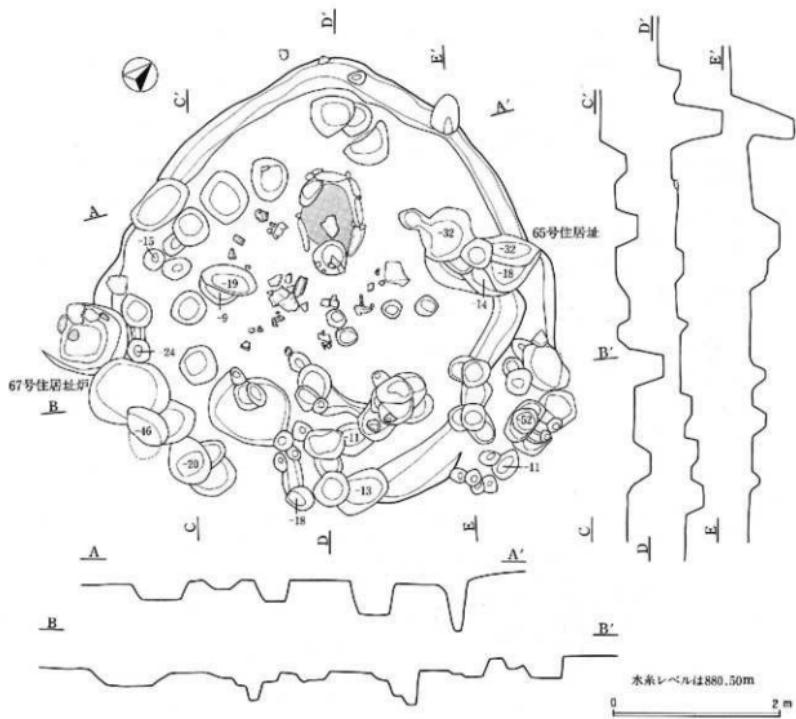
本住居址の時期は、曾利II期になるものと思われる。

66号住居址（第31図、図版16-1）

E-F-4-5で検出された。平面形態は、奥行よりもやや幅が広い円形を呈する。規模は、幅が400cm、奥行が380cm、壁高34cmを測る。主軸方向は、N-4'-Wを指す。周溝は、ほぼ全周している。柱穴は、4本柱であつ



第29図 63・64号住居址 (1/60)



第30図 65号住居址 (1/60)

たと考えられる。a = 50cm、b = 63cm、c = 78cm、d = 75cm。炉は、奥である北側に寄っている。方形の石圓炉で、南辺の礫を抜き取られている。礫の下から埋甕が出土している（図版16-2-3, 40-1）。覆土は暗褐色土で、粒子は細かく、よく縮っているが、粘性はない。

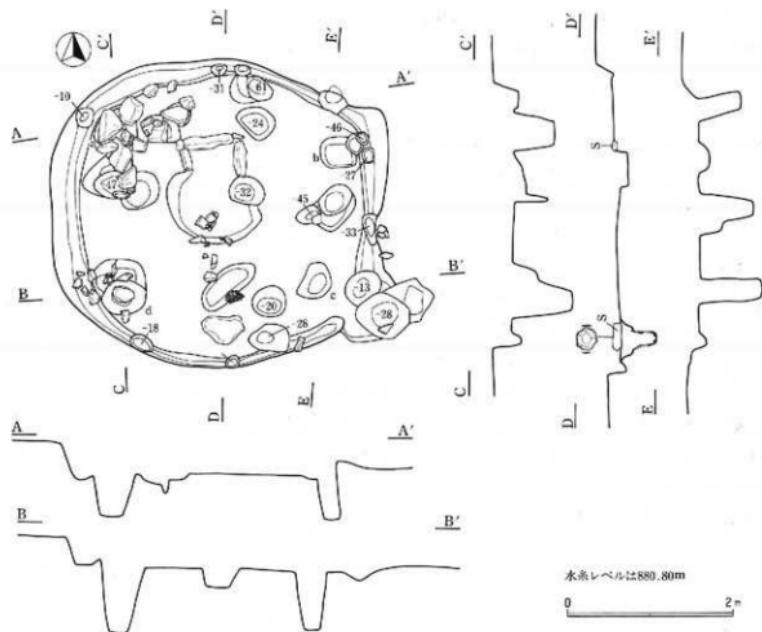
遺物は、埋甕以外に一括土器の出土はなかったが、石器は、磨石、凹石、横刃形石器、打製石斧、磨製石斧、石錐が出土している。

本住居址の時期は、中期の後半に属していると思われる。

69号住居址 (第32図、図版18-1)

J-12-13で検出された。平面形・規模は、壁が検出されず不明である。壁は検出出来なかったが、埋甕炉とそれを取り巻く柱穴により命名した。周溝も検出されていない。柱穴は、4本柱であると思われるが、西側の柱は立て替えられたものか2本ある。周辺に他の遺構がないことから、本住居址に伴うと考えてよいと思われる。柱穴の深さは、a = 94cm、b = 106cm、c = 90cm、d = 101cm、e = 105cmとどれも深い。

遺物は、埋甕炉に用いられた炉体土器以外に、確実に本住居址に伴うと考えられる遺物はない。



第31図 66号住居址(1/60)

74号住居址（第33図、図版19-2）

J-K-9で検出された。壁の掘り込みがなく、平面形・規模とも不明。周溝も検出されていない。柱穴は多数あり、特定できない。炉は地床炉である。

遺物は、時期を明らかにできる一括土器の出土はなかったが、磨石と凹石が出土している。

75号住居址（第34図、図版19-3）

K-9-10で検出された。掘り込みが浅く、平面形・規模とも不明。壁高は、12cmを測る。柱穴は住居址の範囲内に多数あり、特定できない。炉は石圓炉であったと思われるが、炉石はほとんど抜き取られている。

遺物は、一括土器が3個体出土している（図版40-2-3）。石器は、凹石、打製石斧、磨製石斧、石棒が出土している。

本住居址の時期は、曾利V期の中でも新しい方に位置すると思われる。

76号住居址（第34図、図版20-1）

J-K-9-10で検出された。掘り込みが浅く、平面形・規模とも不明。炉の北側に、壁と思われる段差が確認されている。壁高は17cmを測る。柱穴は、他造構と重複が激しく、確実とは言えないが、次の4本が推定される。a = 57cm、b = 58cm、c = 57cm、d = 43cm。炉は地床炉である。

遺物は、一括土器が2個体出土している(図版40-4)。

本住居址の時期は、曾利Ⅳ期の中でも古い方に位置すると思われる。

81号住居址(第35図)

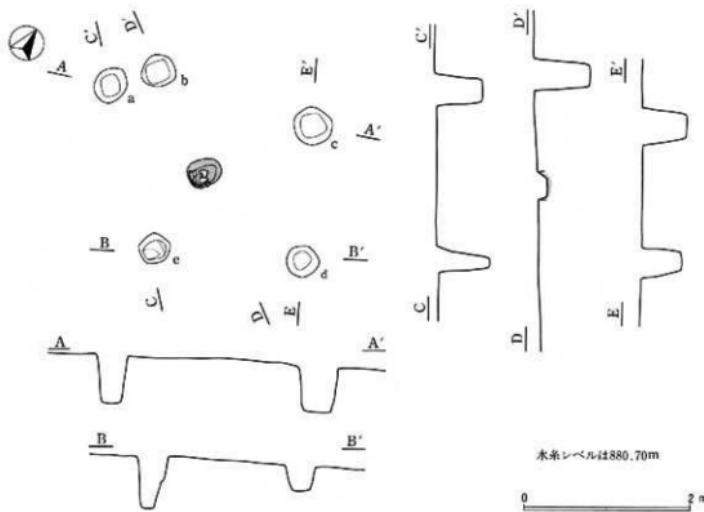
I-10・11に位置する。埋甕炉が3つ並んで検出したことにより、命名した(図版21-1, 40-5・6)。壁は、掘り込みがなく、平面形・規模とも不明。東側で所々周溝らしき掘り込みもみられるが、はっきりしない。柱穴も多数あり、特定できない。

84号住居址(第36図、図版21-3)

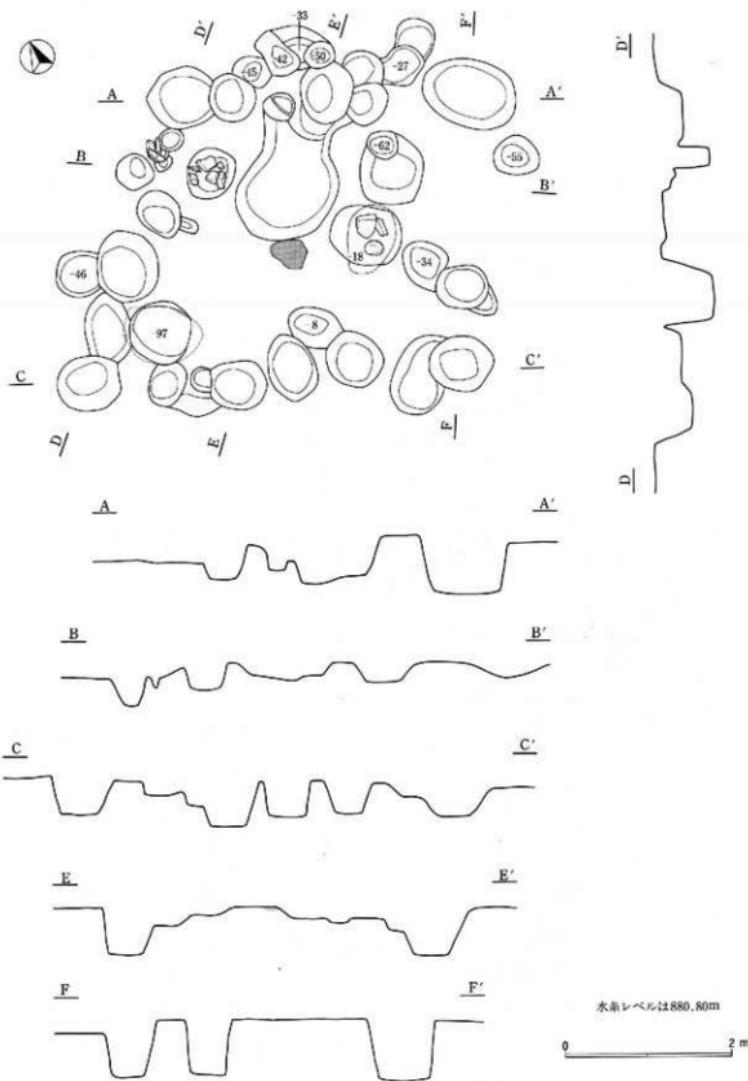
C-D-2-3で検出された。住居址の南西側が調査区外で未掘であるため、平面形・規模は不明。壁高は31cmを測る。主軸方向は、N-4°-Wを指す。北～東側に二重の周溝を検出している。柱穴の全容は不明であるが、東側の2ヵ所は確定であろう。a = 36cm, b = 52cm。炉は、奥である北側によっている。石圓炉であったと考えられるが、礫は抜き取られている。埋甕が住居址南側で検出された(図版22-2, 41-4)。

遺物は、ピット内に小型土器を逆位に埋設してあった(図版22-1, 41-1)他、土器片は多数出土している(図版41-2・3)。石器は、凹石、打製石斧、小型磨製石斧、石棒が出土している。また、北東隅の柱穴a内から割れた石皿が出土。

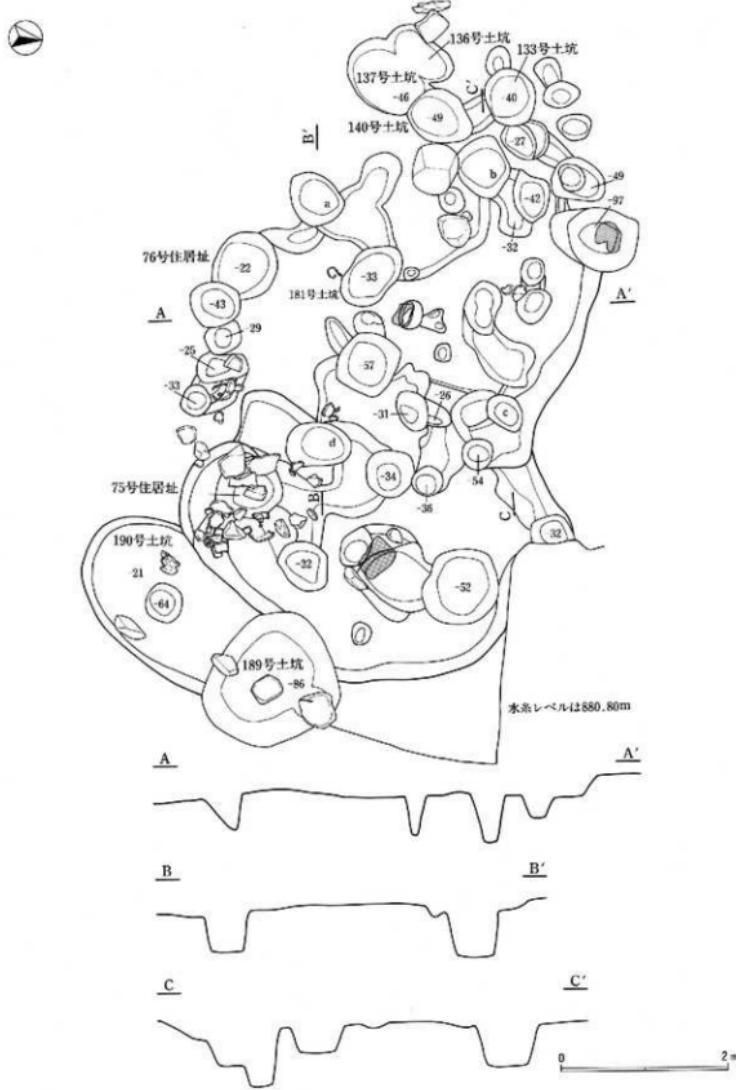
本住居址の時期は、曾利Ⅲ期になるものと思われる。



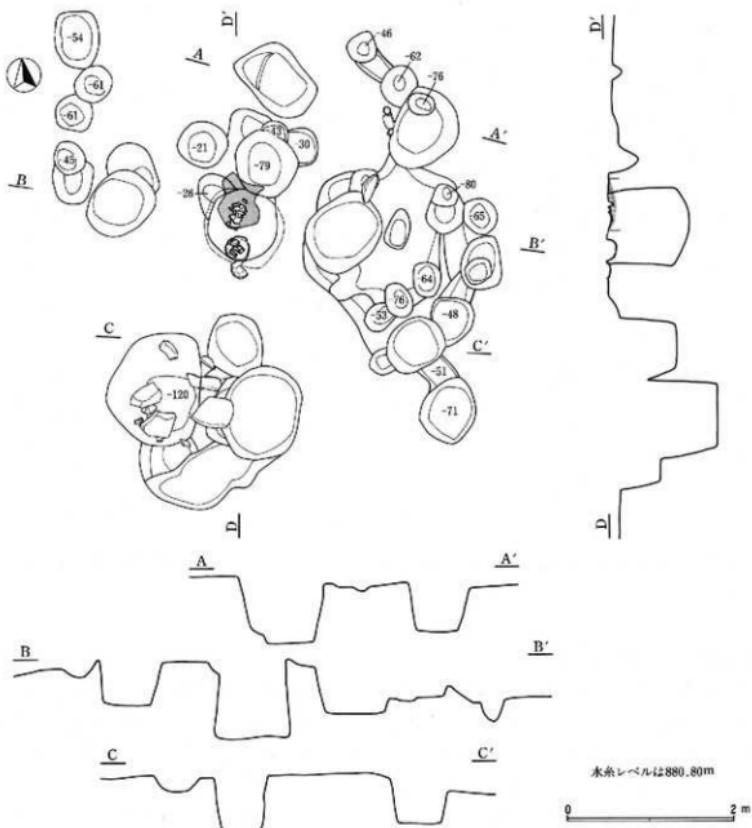
第32図 69号住居址(1/60)



第33図 74号住居址 (1/60)



第34図 75・76号住居址 (1/60)



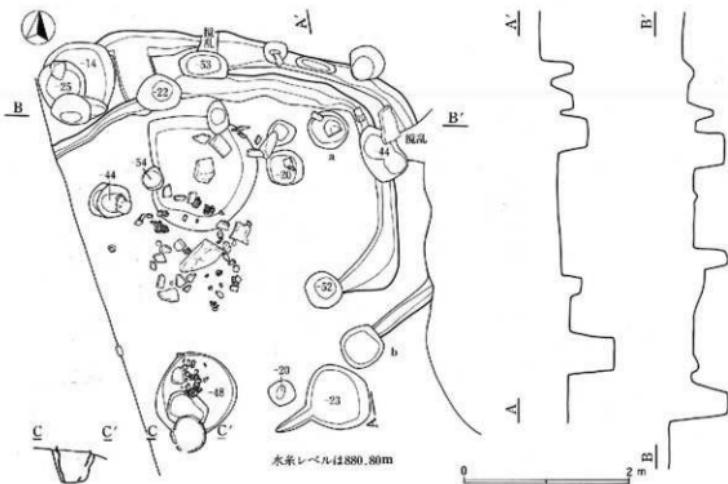
第35図 81号住居址 (1/60)

87号住居址 (第37図、図版23-3)

F-G-7-8で検出された。平面形態は、隅丸方形を呈する。規模は、長径418cm、短径398cm、壁高36cmを測る。長軸方向は、N-48°-Wを指す。周溝は、ほぼ全周している。柱穴は、南隅の柱穴が特定できないが、4本柱であったと思われる。a = 51cm、b = 48cm、c = 48cm。炉は、方形の石窯であるが、西辺は礫を抜かれている。炉の北東隅から一括土器が出土している。埋甕が2個、住居址南東から検出されている（図版24-2, 42-1-2）。

埋甕と炉の北東隅から出土した一括土器以外で、本住居址に伴うと考えられるのは413・414号土坑に挿まれた箇所で出土した土器だけである。石器は、磨石、蜂巣石が出土している。

本住居址の時期は、曾利III期になるものと思われる。



第36図 84号住居址(1/60)

覆土内に網文後期の斐被り葬の墓塚（413・414・415号土坑）がある。また、南隅が53・54号住居址（平安）と重複している。

88号住居址（第38図、図版24-3）

G-9で検出された。平面形は不明。規模は、長径419cm、壁高36cmを測る。長軸方向は、N-18°-Eを指す。周溝は、ほぼ全周している。柱穴は特定できないが、北側の2本は柱穴になると思われる。a=43cm、b=41cm。炉は、方形の石窯炉である。埋甕が2個並んで検出された（図版25-1）。内側である北側の埋甕は二重になっていた（図版25-2）。外側である南側の埋甕には、上に礫を乗せてあった。

埋甕に用いられた土器以外に、一括となる土器はない。石器は、石皿、磨石、凹石が出土している。その他の遺物として、砥石が出土している。

本住居址の時期は、曾利IV期になるものと思われる。

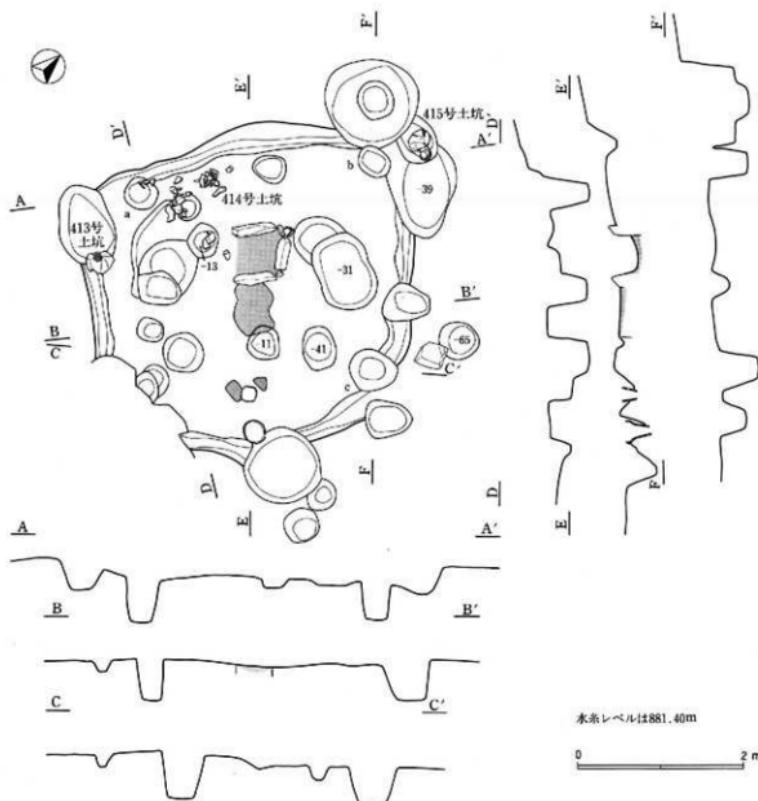
89号住居址と重複している。

89号住居址（第38図）

G-9-10に位置する。88号住居址覆土内に埋甕炉があったことにより確認された（図版25-3）。全容は不明である。規模も長径が420cm程となる他は、はっきりしない。柱穴は、埋甕炉を中心につか見られるが、特定できない。

埋甕炉に用いられた炉体土器（図版42-6）以外に、確実に本住居址に伴うと考えられる遺物はない。石器は、小型磨製石斧が出土している。

本住居址の時期は、後期墾ノ内期になるものと思われる。



第37図 87号住居址、413・414・415号土坑 (1/60)

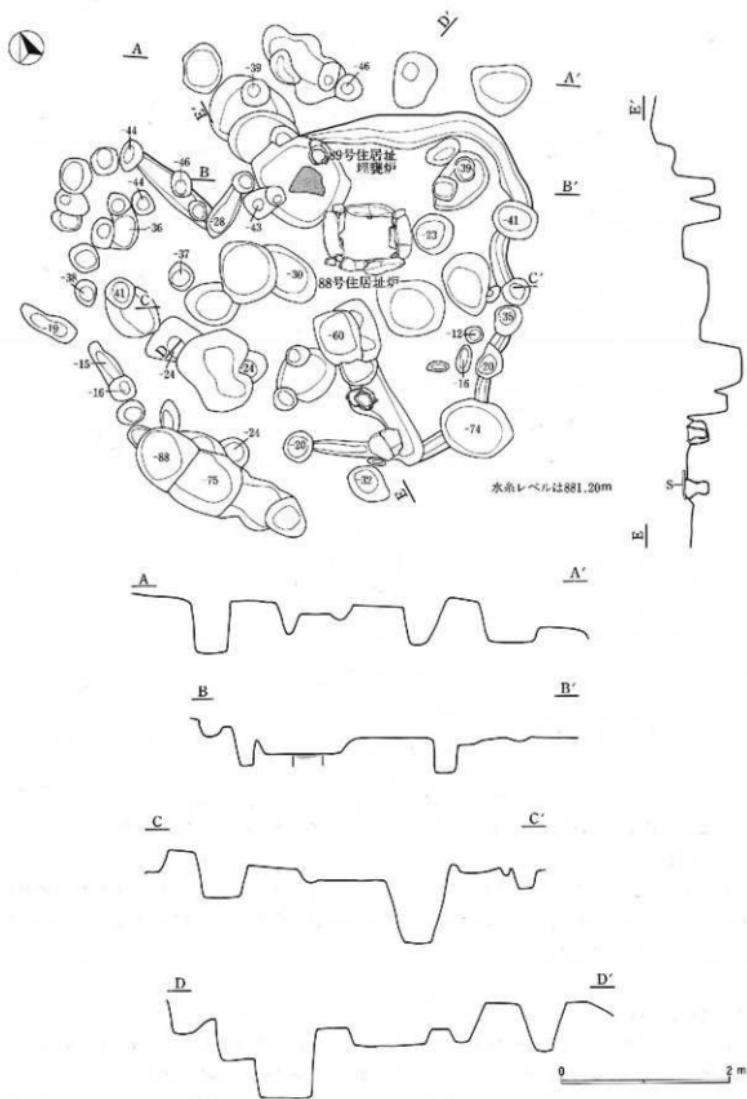
上記の住居址は、比較的の住居址の残りがよく、遺物の出土があったものについて、挿図・写真図版とともに掲載した。

以下は、紙数の関係で、挿図を掲載できなかった住居址であるが、炉や出土遺物などがあり、写真図版を掲載したものである。なお、地床炉が検出されただけで、遺物の出土もなく、柱穴が特定できないものについては、写真図版についても省略した。

25号住居址 (図版6-2)

B-8で検出された。平面形態は、隅丸方形を呈すると考えられる。壁は、斜面上部の北壁が一部検出されただけである。周溝は検出されていない。炉は方形の石開炉で、奥である北壁際に寄る。

遺物は、時期を明らかにできる一括土器の出土はなかったが、石器は小型磨製石斧、石錐が出土している。本住居址の時期は、曾利II～III期になると思われる。



第38図 88・89号住居址 (1/60)

32号住居址（図版9-1）

E・F-14・15で検出された。平面形態は、隅丸方形を呈する。規模は、長径431cm、短径410cm、壁高72cmを測る。壁は、斜面の下側である東壁側を流失している。周溝は、全周していたと思われる。柱穴は、4本であったと考えられるが、南東隅の柱穴は櫛乱により消滅している。炉は石圓炉で、ほぼ中央にある。

遺物は、時期を明らかにできる一括土器の出土はなかったが、石器は磨石、凹石、横刃形石器が出土している。

本住居址の時期は、曾利Ⅱ期になると思われる。

52号住居址

E・F-7・8で検出された。当初より縄文後期の土器が多数出土していたが、抜根による擾乱と考えていた。掘り下げによって、中央に石圓炉が検出されたことにより命名した。規模は、短径450cm、壁高26cmを測る。南東壁は流失している。

遺物は、一括土器の出土はなかったが、石器は石皿、凹石、石錐が出土している。

本住居址の時期は、後期に属するものと思われる。

58号住居址（図版15-2）

C-3・4で検出された。石圓炉であったと思われるが、炉石は抜き取られている。59号住居址と重複している。後期の配石と考えられる礫が、覆土内に多量に認められた（図版15-1）。

遺物は、時期を明らかにできる一括土器の出土はなかったが、磨石、凹石、横刃形石器、打製石斧、小型磨製石斧、石錐、石錨の出土があった。

59号住居址（図版15-1）

C-4で検出された。周溝が西側で一部検出されている。58号住居址との重複、抜根による擾乱のため全容は不明である。炉は、地床炉である。後期の配石と考えられる礫が、覆土内に多量に認められた。

遺物は、時期を特定できるような一括土器の出土はなかったが、石器は凹石、打製石斧、磨製石斧、石錐が出土している。

60号住居址

C・D-4・5で検出された。炉は、石圓炉である。炉石は東辺を除いて抜き取られている。

遺物は、時期を特定できるような一括土器の出土はなかったが、石器は凹石、打製石斧、磨製石斧、石錐が出土している。

後期に属すると思われる。61号住居址と重複し、本住居址が新しい。

61号住居址

C・D-5に位置する。平面形・規模など、詳細は不明である。埋甕炉が検出されたことにより命名した。後期に属すると思われる。60号住居址と重複し、60号住居址が新しい。

62号住居址

C・D 3・4に位置する。平面形・規模など、全容は不明。8号住居址とほぼ重なってしまい、円形の周溝が僅かに検出できただけである。磨石と凹石が出土している。

67号住居址（図版17-1）

E-3で検出された。平面形・規模とも不明。柱穴は、他住居と重複しており、確定はできないが、次の4本が柱穴と推定される。a = 74cm、b = 47cm、c = 57cm、d = 60cm。炉は、柱穴と推定される4本の柱のはば中央にある。石圓炉であったと思われるが、その多くは抜き取られている。炉石には石皿が2個転用されていた。

遺物は、時期を特定できるような一括土器の出土はなかったが、石器は炉石に転用されていた石皿の他、凹石、打製石斧が出土している。

68号住居址（図版17-2）

J-K-10・11で石圓炉（図版17-3）が検出されたことにより、命名した。平面形・規模など、全容は不明である。炉内から歯骨や鹿の角が出土している。本住居址の時期は特定できないが、出土した石器に石皿、凹石、横刃形石器、大型粗製石匙がある。

71号住居址（図版18-2）

J-K-8・9で地床が検出されたことにより、命名した。平面形・規模など、全容は不明である。

72号住居址（図版18-3）

K-8・9で石圓炉が検出されたことにより、命名した。平面形・規模など、全容は不明である。炉石は抜き取られている。

73号住居址（図版19-1）

K-8・9で石圓炉が検出されたことにより、命名した。平面形・規模など、全容は不明である。炉石は抜き取られている。

77号住居址（図版20-2）

J-10で石圓炉が検出されたことにより、命名した。平面形・規模など、全容は不明である。炉石は抜き取られている。

78号住居址

I-J-10・11で石圓炉が検出されたことにより、命名した。平面形・規模など、全容は不明である。炉石は抜き取られている。

79号住居址（図版20-3）

J-K-11で石圓炉が検出されたことにより、命名した。平面形・規模など、全容は不明である。炉石は抜き

取られている。

80号住居址

I-J-9に位置する。地床炉が検出されたため命名した。詳細は明らかでない。

82号住居址（図版21-2）

F-G-2で検出された。住居址の北側を50cm幅程度検出しただけなので、平面形・規模など詳細は不明である。周溝が、発掘された北側部分で確認されている。

85号住居址（図版22-3）

E-F-2で検出された。2/3程が未掘であるため、平面形・規模とも不明とせざるを得ない。周溝は、北東側で約2mにわたって検出された。柱穴については不明。炉も未検出である。土器の下に焼土が見られたが、炉址になるかどうかは疑わしい。

遺物は、2個体が復元できている（図版23-1・2、図版41-5・6）。

本住居址の時期は、後期になると思われる。

67・93号住居址と重複している。

86号住居址

G-7-8で検出された。平面形・規模など詳細は不明である。周溝は、ほぼ全周している。

91号住居址

B-C-11・12で検出された。平面形・規模など詳細は不明である。調査区内に焼土が認められ、拡張したところ柱穴と周溝が検出された。確認されていた焼土は掘り込まれた炉の底面であった。

92号住居址

D-E-3・4で石圓埋甕炉（図版26-1、43-1）が検出されたことにより、命名した。平面形・規模など詳細は不明である。曾利Ⅰ期になるものと思われる。

93号住居址（図版26-2）

D-E-2で検出された。平面形・規模とも不明。炉は石圓炉であったと思われるが、礫は抜き取られている。石皿が出土している。

94号住居址

地床炉がJ-10で検出されたため、命名した。平面形・規模など詳細は不明である。

95号住居址

地床炉がJ-10で検出されたため、命名した。平面形・規模など詳細は不明である。

(2) 土坑

土坑としたものには、墓壙と考えられるもの、貯藏穴と考えられるものなどがある。遺構の検出が予想以上に多く、発掘調査中には遺物を出土したものを中心に土坑番号を付していったが、その数は約500基を数えた。整理作業に入り、遺物を出土しなかった土坑についても引き続き番号を付していったが、その総数は、1,400基を上回った。の中には、住居址の柱穴になるのではないかと考えられるものの、炉址や掘り込みを検出できなかったものもかなり含まれている。また、調査中に番号を付したものの中には、柱穴や右開かの掘り込みなども含まれているが、遺物の洗浄と注記がすでに終わっている段階であったので、そのままとした。整理作業においては、住居址から作業を進めたことによって、土坑はいまだその正確な数さえ把握しきれていない。土坑の多くは、遺物を何も出土しないもので、時期の不明なものが多い。整理期間や紙数の関係もあって、その總てを報告するの不可能であるので、主な遺物を出土したものを抽出し報告する。

1. 中期の土坑

検出された土坑の多くが、中期に属すると考えられるが、遺物を伴っているものは少なく、一括土器を出土した土坑は、僅か6基だけである。土坑から出土した一括土器は、すべて中期後半に属するものである。

2. 後期の土坑

確実に後期に属すると考えられる土坑は、すべて墓壙と考えられるものである。これらは、1号住居址と重複する1号土坑を除けば、すべて集落の内側と考えられる配石の東側に位置している。

この内、233号土坑は配石を伴うもので、掘り込みははっきりしていない(図版27-1)。蓋となる大きな礫の下から一括土器が漬れた状態で出土している(第52図13、図版43-3)。

402号土坑(図版28-3)と1010号土坑(図版29-2)は、どちらも平面形が隅丸長方形となるもので、小型の鉢形土器が竪際に正位に置かれた状態で出土している(第52図10・9、図版45-1,45-5)。

399~401号土坑(図版28-1)と413~415号土坑は、平面形ははっきりしないが、長円形の土坑の一方の端に、浅鉢を伏せた状態に置いている。遺構の重複が激しく、明確な掘り込みを確認できなかったため、土器に対して土坑番号を付している(第52図14、図版44-4~6,45-2~4)。これらは、要被り幕が行われた墓壙と理解される。この他、372号土坑ではミニチュア土器が出土し(第52図3、図版44-2)、15号土坑からは鉢形土器が出土している(第52図17、図版43-2)。

(3) 配石

本遺跡で検出された配石は、調査区の南西隅であるC-4から、調査区東辺のほぼ中央であるI-10にかけて検出された。地形的には西側の頂部からの傾斜がほぼ平坦になる地形変換点のあたりに位置している。その長さは40mにわたっており、ほぼ直線的に延びている。礫は最も広いF-G-8付近で4~5mを測る。調査した範囲ではほぼ直線的になっているものの、盛上となる部分の試掘調査をした際には、調査区外であるJ-3やL-9付近でも多くの礫が検出されているので、全容は環状ないし馬蹄形を呈する配石になるのではないかと思われる。表土を重機で取り除いた際にも、かなりの礫を上げてしまっているので、実際にはもっと多くの礫によって構築されていたと考えられる。

本配石は、部分的に見ると径2m前後の集石がいくつも集まっているように見える箇所もあるが、全体的には礫はまばらで、明確にできなかった。配石に用いられた礫の中には、無頭石棒も見受けられた。検出時には横転していたが、配石構築時には立っていたものと思われる。

配石内からは、縄文時代中期から後期にかけての土器片が出土しているが、一括となるものはなかった。本配石の時期は、中期後半である58・59・86・88号住居址の覆土内または埋没後に構築されていることから、それよりも新しいことは間違いない、また、平安時代の住居址である53・54号住居址に切られていることから、それよりも古いことは明らかである。

縄文時代後期の柄鏡形住居址とした44号住居址の柄部の敷石は、本配石とほぼ同レベルにあったが、この敷石の下に配石の続きがあるのではないかとの推測で敷石を取り除いた結果、そこからは礫は検出されなかつた。この44号住居址を構築する際、配石を上が平になるように並べ直したのではないかと思われるが、住居址と配石が一体となっていると考えることもできる。ここでは、配石の時期を縄文時代後期としておく。

(4) 独立土器（図版29-3~31-1）

独立土器とは、発掘調査において、遺構検出前に単独で出土した土器をさう。整理作業において、出土土器とその後に検出した土坑が重なったりするものもあるが、遺構との関係が明確でないため、ここでは一括して独立土器として扱う。しかしこれらの多くは、その後に検出された土坑に作うか、掘り込みが浅いため検出できなかつた遺構に作うのではないかと考えられる。

独立土器はH-7で2個、H-8・I-9・J-8・J-10・J-14で各1個が出土している（第52図8・11・12・16、図版45-6~46-6）。この内、H-7で出土した2個の土器は中期後半のものであるが、これらを合わせ、すべて遺構は検出できなかつたものの、窓被り葬と同じ性格を持つものではないかと思われる。

(5) 石器・石製品

勝山遺跡から出土した主な石器と石製品には、石皿・磨石・凹石・横刃形石器・打製石斧・磨製石斧・小型磨製石斧・大型粗製石匙・石匙・石錐・砥石・蜂巣石・ハンマー・丸石・石棒・石錐・石錐・スクレイバー・垂飾・水晶などがある。時期不明とした住居址も多く、また、平安時代の住居址にも明らかに縄文時代の石器や石製品が混じって出土しているので、一括して述べる。

石皿は、27点が出土している。ほとんどが住居址からの出土であるが、土坑からも4点が出土している。また、廃土からの採集も2点あった。縄文時代の住居址からは14軒から19点の出土があった。83軒ある縄文時代の住居址の内14軒からの出土で、これは約17%にあたる。石皿を出土した遺構のはほとんどは1点だけの出土であるが、2点あるいは3点出土した住居址も見受けられる。しかし、これらの住居址からの出土状況を見ると、炉石に転用されたものであり、住居構築時には、すでに石皿としての機能を有していないかったと言える。

磨石は、42点が出土している。出土した遺構と数は、住居址が20軒で28点、土坑が5基で、遺構外からも3点、トレンチから1点、廃土からの採集も5点あった。2点以上出土した住居址は5軒で、最も多く出土した住居址は30号住居址の4点である。石皿が出土しているにもかかわらず、磨石の出土がなかった住居址は10軒ある。また、磨石の出土があって、石皿の出土がなかった住居址も、15軒と多い。

凹石は、294点が出土している。平安時代の住居址への混入も合わせると、54軒の住居址から出土している。住居址から出土した凹石は191点で、総点数の約2/3を占めている。最も多く出土した住居址は12号住居址で、18点もの出土があった。また、30号住居址からは13点、88号住居址からも11点が出土している。土坑からも25基から39点出土している他、遺構外からの出土も多かつた。凹石の中には、磨製石斧を転用しているものも幾つか見受けられる。

横刃形石器は、96点が出土しているが、その内77点が住居址からで、30号住居址からは24点もの出土があった。

打製石斧は、208点が出土している。住居址からは、41軒から134点が出土しているが、その中でも30号住居址は31点と最も多く出土している。土坑からの出土も多く、15基の土坑から総計19点の出土があった。

磨製石斧は、52点が出土している。断面形が円形のものと、扁平なものの二者がある。住居址からは17軒から23点が出土し、約半数を占める。四石に転用されているものも幾つか見受けられた。

小型磨製石斧は、43点が出土している。住居址からは16軒から20点が出土している。土坑からも7基から1点ずつの出土があった。質の良い蛇紋岩製のものも、幾つか見受けられた。また、刃部だけを磨いたものも多い。

大型粗製石匙は、21点が出土している。住居址からは、9軒から11点が出土している。土坑からは、2基から2点、他は遺構外からの出土である。30号住居址から3点が出土している他は、各遺構からそれぞれ1点ずつ出土しているだけである。

石匙は、30号住居址の2点、50号住居址の1点、155号土坑の1点の計4点が遺構からの出土で、他は遺構外からの出土である。

石錐の出土は、92点と多い。住居址からは、22軒から56点が出土している。長円形の長軸に抉りのあるものと、短軸に抉りのあるものがある。また、円形で、十字に抉りの入ったものも認められる。中には1軒の住居址に違う種類のものが見られることがあるが、多くの住居址でどちらか一方という偏りが見られる。12号住居址出土の石錐は短軸に抉りのある例、64号住居址出土の石錐は長軸に抉りのある例である。この2軒の住居址からはともに8点ずつの出土と、最も多い。

砾石は、4点が出土している(平安時代の8号住居址出土の1点を除く)。中には88号住居址出土の砾石の様に、石皿大のものもあったが、他は小型のものである。

石鑿は、37点と少ない。その内、住居址出土の石鑿は18点(平安時代の8・18号住居址の計4点を除く)と、約半数である。

石錐は、5点が出土している。住居址出土のものが2点、土坑出土のものが1点で、他は遺構外と廃土からの採集品である。

スクレイバーは、7点が出土している。住居址からは4軒から各1点ずつ出土している。他は遺構外と廃土からの採集品である。

石棒は、16点出土している。すべて無頭石棒である。中には44号住居址の様に、炉石に転用されているものも見受けられた。

垂鉤は、2点が出土している(第53図5・6、図版50-1・2)。どちらもヒスイ製である。239号土坑出土のものと遺構外出土のものである。239号土坑は、不整形で、掘り込みが浅く、坑底も凹凸が激しかった。遺構外から出土の垂鉤は、I-9から出土している。溝が彫られている。時期は、不明とせざるを得ない。

第2節 平安時代

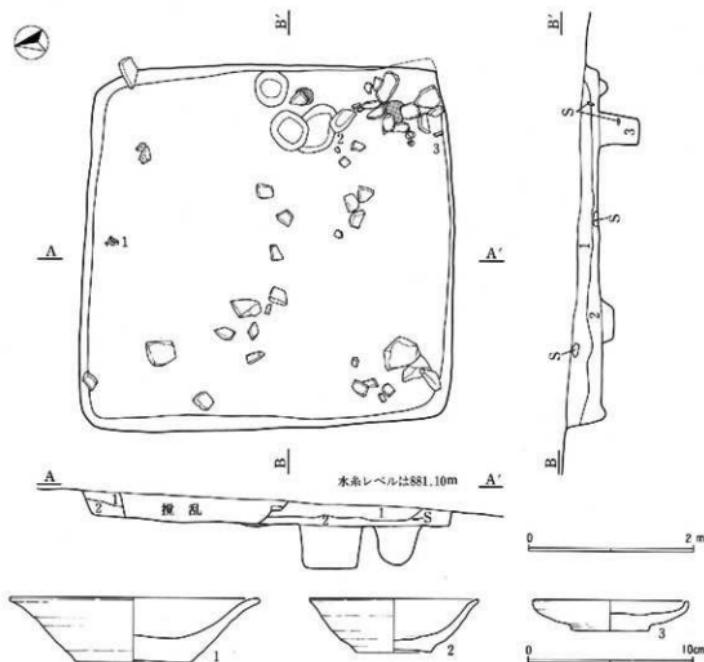
平安時代と考えられる遺構には、住居址と土坑がある。この他、時期不明の掘立柱建物址もあるが、一応平安時代のものとしておきたい。

(1) 住居址

平安時代の住居址は、13軒が検出されている。重複したものがあること、カマドの位置が異なること、出土遺物から、すべてが同時に存在したのではなく、ある程度の時期差をもっていると考えられる。

8号住居址（第39図、図版51-3）

本住居址は、C-D-3・4で検出された。平面形態は隅丸方形を呈し、規模は長軸が455cm、短軸が448cm、壁高44cmを測る。長軸方向はN-10°-Eを指す。明確なカマド跡は検出できなかったが、南東隅に焼土の分布が認められるので、この辺りにあったのではないかと考えられる。



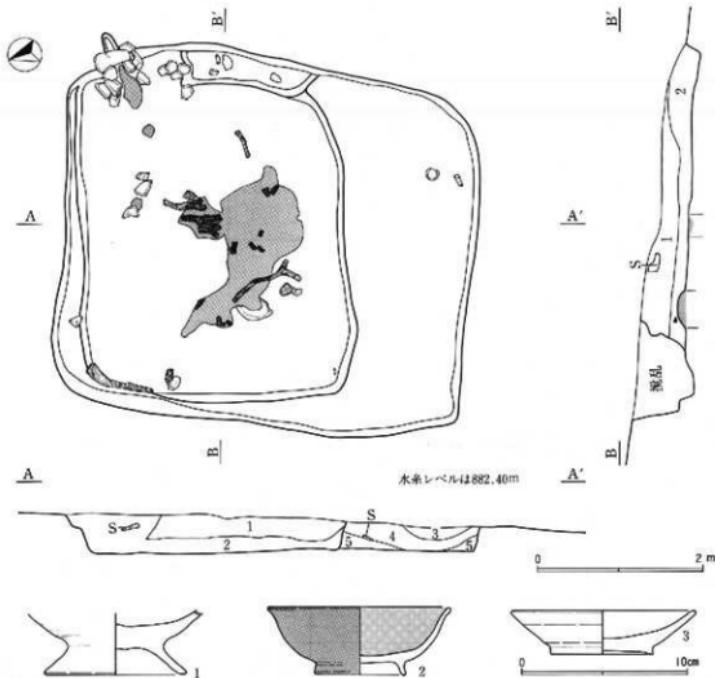
第39図 8号住居址 (1/60) と出土遺物 (1/3)

覆土は擾乱を除き3層に分層される。1層は暗褐色土で、ローム粒子の混入が多い。また、2mm以下のロームブロックを少量含む。2層は黒褐色土で、5mmほどのロームブロックを少量含むが、ローム粒子の混入は少ない。3層は柱穴内の覆土で、暗褐色土。炭化物や焼土を少量含む。ローム粒子の混入多く、明るく感じる。どの層も、全体的に粒子は細かく、よく締っているが、粘性はない。覆土内には20~40cmほどの礫が混入していた。住居内に幾つかのピットが検出されているが、本住居址に伴うかどうかは明らかでない。

遺物は土師器皿・坏が出土している。

9号住居址（第40図、岡版51-4）

本住居址は、C-D-6-7で検出された。大小2軒の重複と考えられるが、住居番号は分けていない。当初、平面形態が隅丸長方形を呈し、規模は長軸が501cm、短軸が446cm、壁高30cmで、長軸方向はN-25°Eを指す住居址と考えていたが、床の北側に掘り足りない箇所があり、掘り下げたところ、長軸400cm、短軸323cm、確認面からの深さ47cmを測る東西に長い隅丸長方形の別の住居が存在することが確認された。上層の観察から、小さい住居の方が新しいことが確認されている。これらには別の住居の番号を付すべきであったが、出土遺物を取上げる際に、2軒の重複を確認することができず、同一住居のものとしてしまったため、そのままとし

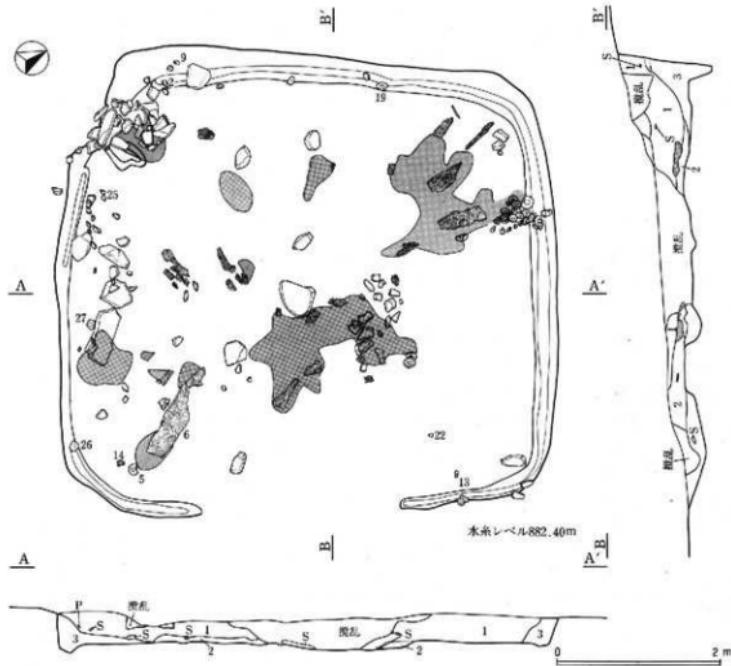


第40図 9号住居址(1/60)と出土遺物(1/3)

た。床面は、北側の一段低くなっている箇所が硬くなっている。壁際のかなりの部分に抜根による擾乱が入っており、北壁の西側及び西壁はプランの確認が難しい。カマドは石組みカマドで、北東隅にある。焼土や炭化物が、北側の新しい住居にだけ認められ、新しい住居は火災にあってか火をかけて処分をしたのではないかと考えられる。53・54号住居址と同じく、縮小が行われたのではないかと考えられる。南側からも遺物の出土があるので、当時大きく掘られていたのは間違いないが、何等かの理由で縮小されたものと思われる。なお、カマドの痕跡は北東隅の1ヵ所が検出されただけである。

覆土は、3層とした擾乱による土層が黒褐色土で、その他は暗褐色土である。そのため明確な分層は難しい。1層と2層は、2層に焼土と炭化物が多量に含まれることにより分層される。また、4層にも焼土や炭化物の混入は認められた。5層はローム粒子やロームブロックが多量に交じることにより分層される。擾乱である3層を除き、粒子は細かく、よく繋っているが、粘性はない。

遺物は、覆土中より焼成のあまい土師器塊が出土した(1)他、黒色土器(2)や刀子の出土もあった。また、灰釉陶器皿の完形品が抜根による擾乱中より出土している。



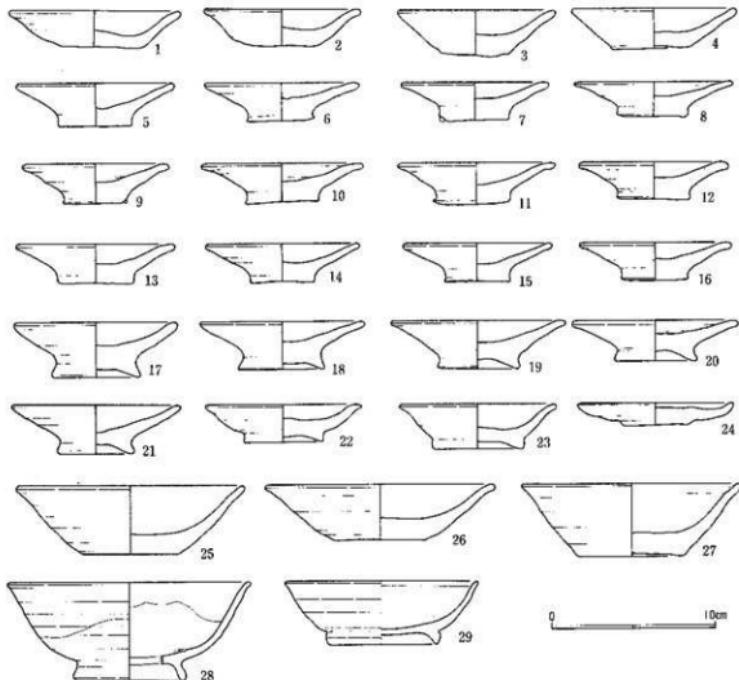
第41図 18号住居址 (1/60)

18号住居址（第41図、図版52、53、54-1）

本住居址は、E-F-9-10で検出された。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長軸が621cm、短軸が564cmを測る。壁は最も遺存状態の良い西壁側で、壁高88cmを測る。長軸方向はN-26°-Eを指す。周溝は、東及び南側の一部が流失しているが、全周していたものと思われる。カマドは石組みカマドで、南西隅にある。住居址の中央に抜根による擾乱が入っている他、住居址東側は、縄文時代の住居や土坑があるため、しっかりした床面が検出できていない。また、床面も中央が擾乱を受けているが、全体の残りは良い。確実に本住居址に伴うと考えられる柱穴や土坑はない。

覆土は3層に分層が可能である。いずれも粒子は細かく、よく縮っているが、粘性はない。1層と2層はどちらも暗褐色土で、2層の方がやや黒みを帯びている程度の違いであるが、間層に焼土や炭化材があるため分層した。床面と焼土や炭化材までは5~10cmの間隔で浮いている。どちらかというと炭化材の上に焼土が乗っている例が多い。炭化材は中央に向かって倒れたように出土している。

遺物は、床面直上から多くの土器器皿・环と灰陶陶器塊が出上している（第42図）。調査時にある程度の大きさのものに番号を付したが、それだけで50点を上回った。特に、北壁際の中央よりやや西側の床面からは、土師器皿・灰陶陶器塊の完形品がまとめて出土している。遺物番号を付して取上げたものだけで、20数点



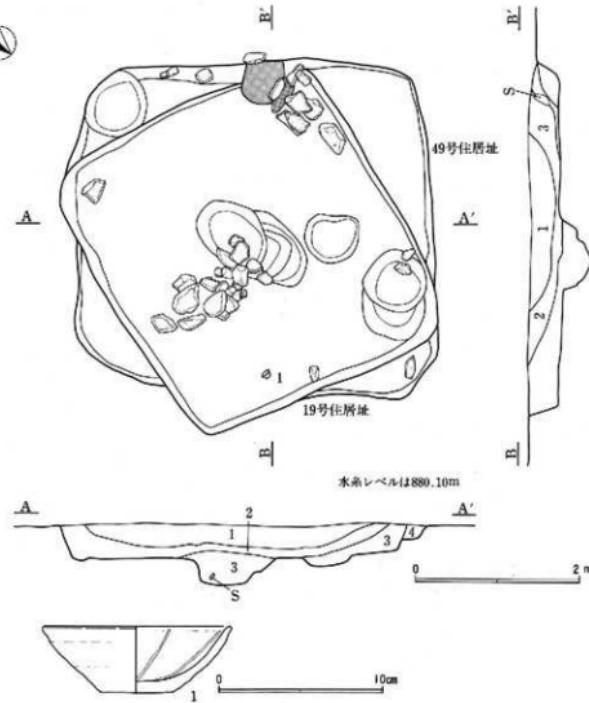
第42図 18号住居址出土遺物 (1/3)

を数える。平面図中、遺物番号を付していないものはここからの出土である。報告にあたっては、口縁部から底部まであり、全体の器形が窺えるものだけを図示した。

土師器の皿には壺をそのまま小さくした形態のもの、底部が厚く疑似高台状となったもの、高台が付くもの、ほとんど立ち上がりのない板状のものなどがあるが、特に形態によって出土位置が異なっているということはなさそうである。土師器の壺(26・27)は、それぞれが単独で出土している。また、刀子が北西隅から出土しているほか、鉄滓も2点出土しているが、出土位置はそれぞれ異なっている。

19・49号住居址（第43図、図版54-2・3）

19号住居址は、H-I 3-4で検出された。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長軸が391cm、短軸が365cm、壁高42cmを測る。長軸方向はN-15°-Eを指す。カマドは完全な形では検出されなかったが、焼土と礫が南西隅に認められたことから、石組みカマドであったものが、壊されたのではないかと考えられる。覆土内に20~40cmの礫が投込まれるように入っていた。土層観察では49号住居址との明確な上層の違いによる新旧関係の把握はできなかったが、投込まれた礫の出土状態により、19号住居址が新しいと判断をした。床面の中央に土坑状の掘り込みが検出されている。



第43図 19・49号住居址(1/60)と出土遺物(1/3)

覆土はいずれも暗褐色土で、粒子は細かく、よく縮っているが、粘性はない。2層にローム粒子の混入が多く、3層に分層した。3層と49号住居址の覆土である4層とは肉眼での観察では分層は不可能であるが、切り合ひ関係を示すために線引した。

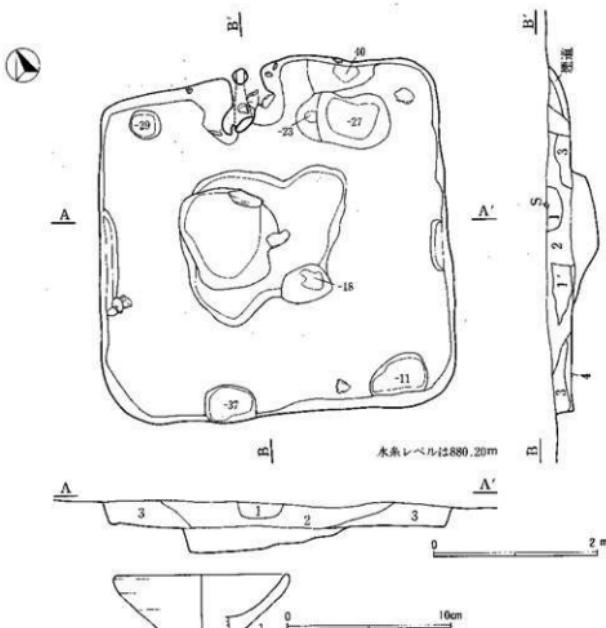
遺物は、放射状晴文のある土器器坏が出土している。

49号住居址の平面形態も隅丸長方形を呈している。規模は長軸が443cm、短軸が410cm、壁高18cmを測る。長軸方向はN-45°Wを指し、19号住居址とは約30°ずれた形で検出された。当初、本住居址のプランを検出し、掘り下げを行ったが、別の住居（19号住居址）が重複しており、その方が新しいことが確認されている。カマドは検出できていないが、19号住居址と同じ位置になるとすれば、西壁中央に存在したことになる。

図示できる遺物の出土はなかった。

20号住居址（第44図、図版55 1・2）

本住居址は、I-J-4-5で検出された。平面形態は隅丸方形を呈し、規模は長軸が440cm、短軸が431cm、壁高32cmを測る。長軸方向はN-19°Eを指す。東壁と西壁の一部に周溝らしきものが見られた。中央に掘り込みがあるが、一応本住居址に伴うものと理解している。柱穴は、北西隅にあるだけである。カマドは石組みカマドで、北壁中央にあるが、抜根のため一部破壊してしまった。カマドの東側に掘り込みがあり、灰や焼土が検出されている。



第44図 20号住居址（1/60）と出土遺物（1/3）

遺物は小片が多く、図示できたのは土師器壊の破片1点だけである。この他に、縄文時代の人体付土器(図版51-1)が住居址内で検出された土坑から出土している。

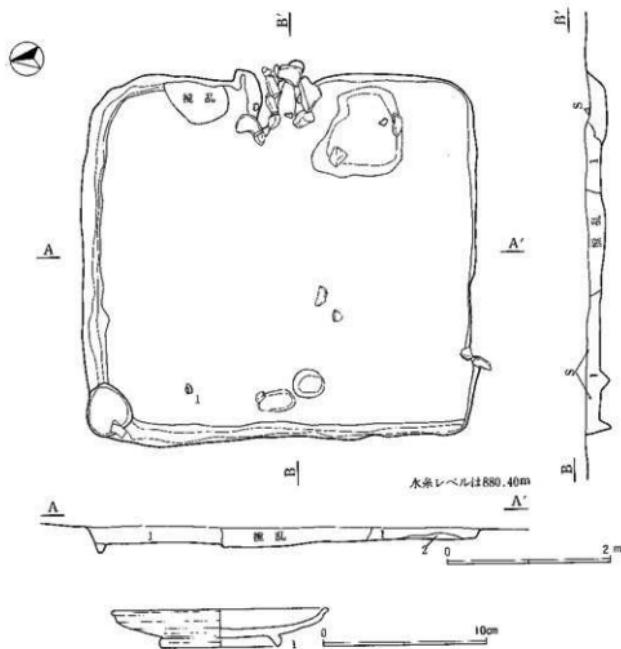
21号住居址 (第45図、図版55-3)

本住居址は、J-6-7で検出された。平面形態は南北に長い隅丸長方形を呈し、規模は長軸が486cm、短軸が450cm、壁高20cmを測る。長軸方向はN-5°-Wを指す。周溝は、西壁-北壁にかけてほぼ半周している。カマドは石組みカマドで、東壁中央にある。

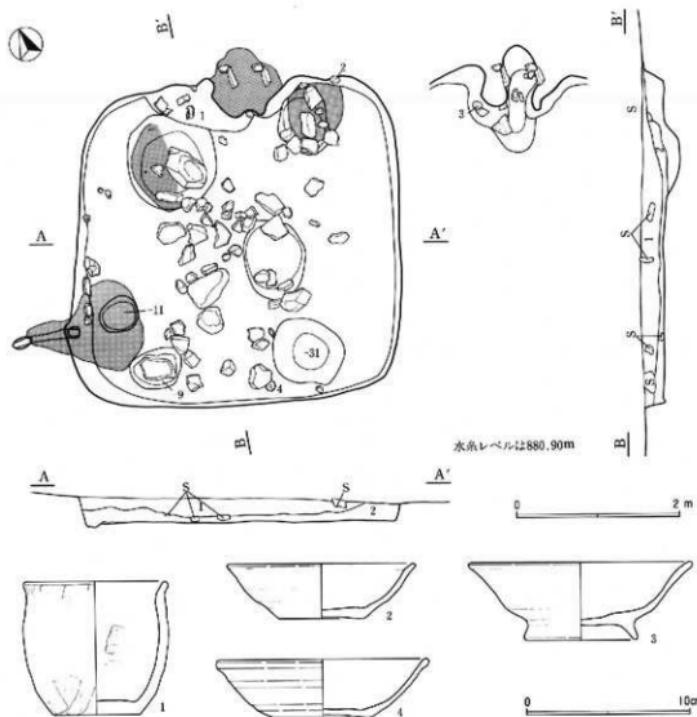
遺物の出土は少なく、図示できたのは、灰釉陶器皿が1点だけである。

22号住居址 (第46図、図版56-1・2)

本住居址は、I-8-9で検出された。平面形態は隅丸方形を呈し、規模は長軸が401cm、短軸が397cm、壁高33cmを測る。長軸方向はN-23°-Eを指す。カマドは石組みカマドで、北壁中央にある。また、これより古いカマドが西壁中央よりやや南側にあり、煙道部がそのまま残っていた。カマドの痕跡は2ヵ所に認められるものの、住居プランはそのままにカマドを移築したと考えられるため、住居番号は一つとした。覆土には、20~40cmの礫が、床面から20cmほど浮いて多数出土した。中央のものの方が床面に近い。2層に分層した下層の堆



第45図 21号住居址 (1/60) と出土遺物 (1/3)



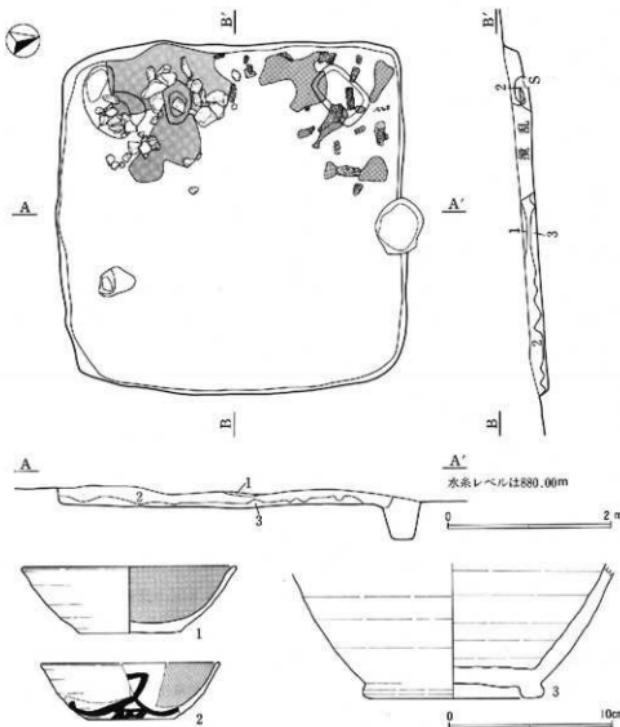
第46図 22号住居址 (1/60) と出土遺物 (1/3)

積後に投込まれたものであろう。新しいカマドの左右に土坑があり、そのどちらの覆土からも焼土や炭が検出されている。古いカマドのある南西隅や、中央付近、南東近くでも土坑が検出されているが、これらからは焼土や炭の検出はなかった。

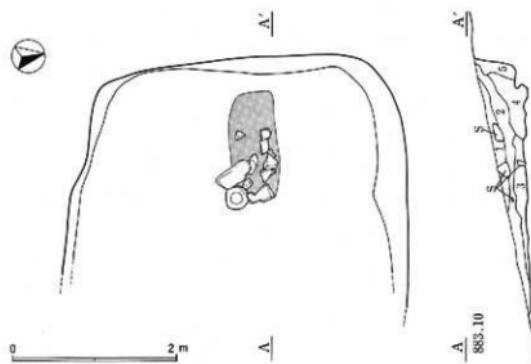
遺物は、南壁際中央付近に床面からやや浮いた状態で須恵器環(4)、北東隅の床から20cmほど浮いた所では上器器環(2)が出土。両者ともほぼ完形。また、カマド西側から土師器小壺(1)、高台付环(3)が出土している。

23号住居址（第47図、図版56-3、57-1・2）

本住居址は、J-K-17で検出された。今回の調査範囲のなかで検出された遺構としては、最北端に位置する。試掘調査の結果からも、おそらく本住居址より北側には遺構は検出されないのではないかと思われる。平面形態は隅丸方形を呈し、規模は長軸が434cm、短軸が422cm、壁高20cmを測る。長軸方向はN-77°Eを指す。カマドは石組みカマドで、西壁の南寄りにあるが、壊されている。住居址の西半分に炭化材と焼土が集中するが、特に北西隅は焼土が多い。礫も西半分に集中する。検出された掘り込みの内、北壁のほぼ中央に



第47図 23号住居址 (1/60) と出土遺物 (1/3)



第48図 29号住居址 (1/60)

あり、住居からはみ出すようにある土坑は、土層の観察から本住居址よりも古い時期のものであると考えられる。その他の掘り込みについては、時期を明らかにできないが、南側の柱穴は本住居址のものとしてよいかもしれない。

遺物のほとんどは、内面を黒色処理した土師器壺の小片である。図示できたものは少ないが、の中には黒青土器も1点ある(2)。また、須恵器の長頸壺底部(3)の出土もあった。

29号住居址（第48図、図版57-3）

本住居址は、F-12・13で検出された。平面形態は隅丸方形または隅丸長方形を呈していると考えられるが、本住居址周辺が縄文時代の住居址のため、その覆土を掘り込む形で構築されており、明確な掘り込みを確認できていない。また、床面検出中に縄文時代の住居址の石圓炉(45号住居址)が検出された。床面はこれより高い位置にあると思われるが、土層の観察からは一線を画すことはできなかった。推定規模は長軸が420cm、壁高は59cmを測る。長軸方向はN-80°-Wを指す。カマドは西壁の中央にあったと思われ、焼土と礫が検出されたが、壊れている。

遺物は少なく、図示できたものもないが、羽蓋の破片が出土している。

53・54号住居址（第49図、図版58、59-1・2）

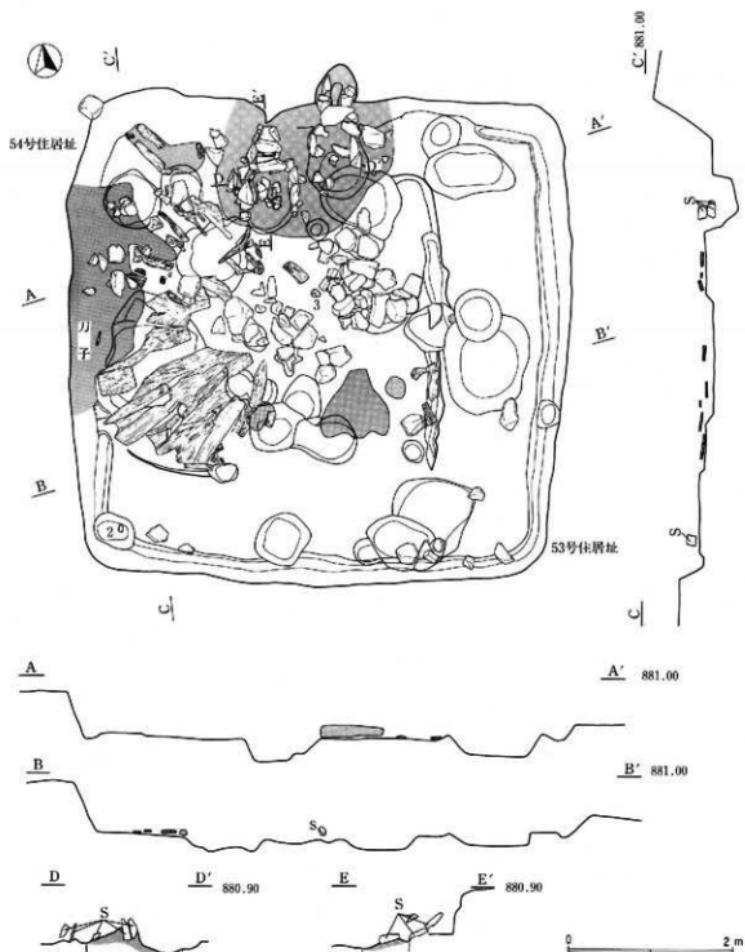
当初、1軒の住居址と考えていたが、覆土中の炭化物や焼土、投込まれたと考えられる礫の分布、カマドが2基存在することなどにより、2軒の重複であることが確認された。

53号住居址は、F-G-6-7で検出された。平面形態は隅丸方形を呈し、規模は長軸が613cm、短軸が600cm、壁高60cmを測る。長軸方向はN-7°-Eを指す。東・南壁の内側に、深さ4~8cmの周溝がある。北・西壁でも一部確認された。カマドは右組みカマドで、北壁には中央にある。覆土は暗褐色土で、粒子は細かく、よく縮っているが、粘性はない。炭や焼土を含むが、量は54号住居址より少ない。柱穴は南西隅、東壁の中央よりやや南側、北壁の中央よりやや東側で本住居址のものと考えられるものが検出されているが、その位置関係は不規則である。また、土坑も幾つか検出されている。土坑内からは灰や焼土、炭などが検出されている他、土師器の破片も出土している。

54号住居址は、F-G-6-7で検出された。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長軸が455cm、短軸が384cm、壁高72cmを測る。長軸方向はN-7°-Eを指す。周溝は、東壁の一部で検出されている。カマドは右組みカマドで、北壁には中央にある。覆土は黒褐色土で、粒子は細かく、よく縮っているが、粘性はない。炭と焼土が下層に多く見られるが、分層は難しい。火災住居と考えられ、焼土が多くみられた他、炭化材が中央に向かって倒れるようになっていた。また、炭化した茅草も見受けられた。柱穴や土坑と考えられる掘り込みも幾つか検出されているが、本住居址に伴うものか、53号住居址に伴うものか明らかにできたものは少ない。

遺物は、「大」字の墨書きのある内面を黒色処理された土師器壺(1)、灰釉陶器壺(2・3)が出土している。また、刀子が西壁際とカマドの東で出土している。

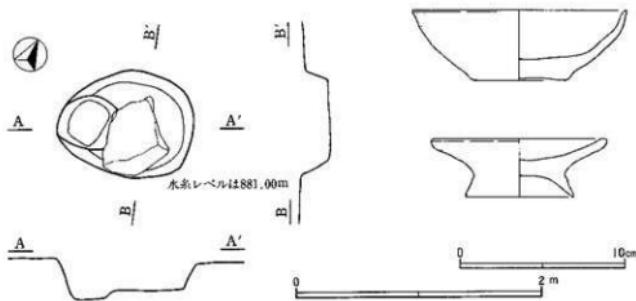
54号住居址が火災住居で、その範囲が53号住居址よりも小さいこと、53号住居址内に54号住居址のカマドがあることにより、小さい54号住居址の方が新しいのは明らかである。何等かの理由で住居を縮小したと考えられる。



第49図 53・54号住居址 (1/60) と出土遺物 (1/3)

(2) 上坑

確実に平安時代と考えられる土坑は、403号土坑の1基だけである（第50図）。径50cm以上ある砾の下から土師器環・高台付皿が出土している。墓壙になると考えられる。



第50図 403号土坑（1/40）と出土遺物（1/3）

第IV章 まとめ

本遺跡からは、縄文時代中期前半から後期の住居址と土坑及び後期の配石、平安時代の住居址と土坑が多数検出された。調査の終了までに番号を付した住居址は95軒と、近年の茅野市の発掘では昭和61年に工業団地造成に際し調査を行った、米沢の棚畠遺跡以来の数であった。本遺跡は調査前の試掘調査で約8,700m²の範囲を遺跡として確認したが、県教育委員会文化課と開発業者を交えた保護協議の中で、約5,000m²については盛土により保存を行うこととなった。

調査予定面積3,000m²ということで始めた調査であったが、その後当初試掘のできなかった、傾斜のきつくなるところから頂部にかけても遺構が検出されはじめた。その部分については、削平が行われる予定となっていたので範囲を拡大して調査を行っている。最終的な調査面積は3,400m²となった。調査を拡大して行った400m²を合せ、遺跡面積は9,000m²余となるが、その内の半分以下の面積で100軒近い住居址が確認されたことにより、遺跡全体では単純に計算しても200軒ほどの住居が密集する諏訪地方でも有数の遺跡となることが予想される。

なお、住居址の命名にあたっては、住居址プランが明確なもの、壁や床面はなくなってしまっていても、炉があり、柱穴が回っているものについてだけ番号を付した。調査中、あるいは整理作業の過程で柱穴が回るのではないかと考えられるものも数多く見受けられたが、これらには住居番号を付してない。また、柱穴と考えられるものも多く検出されているが、住居址に伴わないものについてはすべて土坑としてあつかっている。

第1節 縄文時代

縄文時代と考えられる遺構には、住居址と土坑、配石がある。住居址は83軒が検出されている。その多くは中期に属すると考えられるが、今後の整理作業によって、幾つかは後期のものとなる可能性が残されている。土坑はまだその総数を把握していないが、遺物の出土しないものも多く、時期の不明なものが多い。確實に後期と考えられる土坑は、ほとんどが墓壙で壊れ被り葬を行ったものである。

遺物の中で、最も古いと考えられるものは尖底になると思われる纖維土器で、小片1点が出土している。石製品ではヒスイ製斧2点などがある。小型磨製石斧は、蛇紋岩の質の良いものを含めるとかなりの数に及ぶ。

1 中期

中期と考えられる遺構には住居址、土坑がある。

最も多く検出された住居址は、やはり中期のものである。試掘調査で縄文時代中期初頭の遺物もかなり見受けられたが、遺構は検出されなかった。それ以降の遺構により消滅してしまったと考えられる。

検出した遺構の中で最も古いものは28号住居址で、新道式期のものである。ほぼ円形を呈し、炉は埋甕炉、柱穴や周溝は検出されなかった。

調査中、最も目をひいた住居址に30号住居址がある。これは中期中葉の暮内から井戸尻にかけての時期のもので、床面からはかなり浮いて出土したもの、多くの土器が投込まれた状態で出土している。この住居はこれよりも古い70号住居址をこわして構築されているが、その時期は不明である。

勝山遺跡は試掘時より縄文時代中期の全般と後期、平安時代の大きな遺跡と考えられていたが、中期の前半については、今回の調査範囲から外れた8トレンチで一括土器が出土（図版47-1）したこと、調査中ににおける中期前半の遺物の広がりなどから、検出された遺構だけの集落であったとは考えにくいものがある。中期前半の遺構は、それ以降の住居址や土坑により多くを壊され、検出できなかったと考えられる。土坑としたものの中に、柱穴と考えた方が良いと思われるものも相当数見受けられるが、それらの幾つかは検出できなかった中期前半の住居址の柱穴になるのではなかろうか。こうしたくなってしまった遺構の検出は、今後の課題である。

最も遺構の多いのは、中期の後半のものである。調査区のほぼ全体から検出されている。遺物を多く出土した住居址に43号住居址があるが、前述の30号住居址と同じように住居廃絶後に投込まれたものである。破片での出土は多かったが、復元により完形となつたものは少なかった。

土坑は調査区中程の傾斜が緩くなるところからその東の平坦部にかけて多く検出されている。検出された土坑は、後期のものも含めて1,400余基を数える。検出されたものの中には、住居址の柱穴となるものも含まれると考えられるが、前述のように、炉の検出など明らかに住居と確認されたものを除いてすべて土坑としてあつかっている。

土坑出土遺物の中には、完形には至らなかったが、有孔鉢付土器もあった。

2 後期

後期と考えられる遺構には住居址、土坑、配石がある。

縄文時代後期の住居址は13軒ある。

住居址には、僅僅かに礎を敷いただけのものも含めて、敷石を配したものと、そうでないものの二者がある。時期は壇ノ内期頃のものであるが、がも埋甕炉と石囲炉の二者がある。後期と考えられる住居址は、すべて配石の西側に位置している。後期と考えられる土坑の多くが配石の内側と考えられる東側にあると対照的で、遺跡内のそれぞれの空間の使い分けをきちんと行っていたことを窺わせる。

住居址からの遺物は少なく、土器は埋甕炉以外のものではミニチュア土器がある程度である。その他の遺物としては、石錘の出土が目立っている。特に64号住居址からは、北東隅から8個がまとまって出土している。

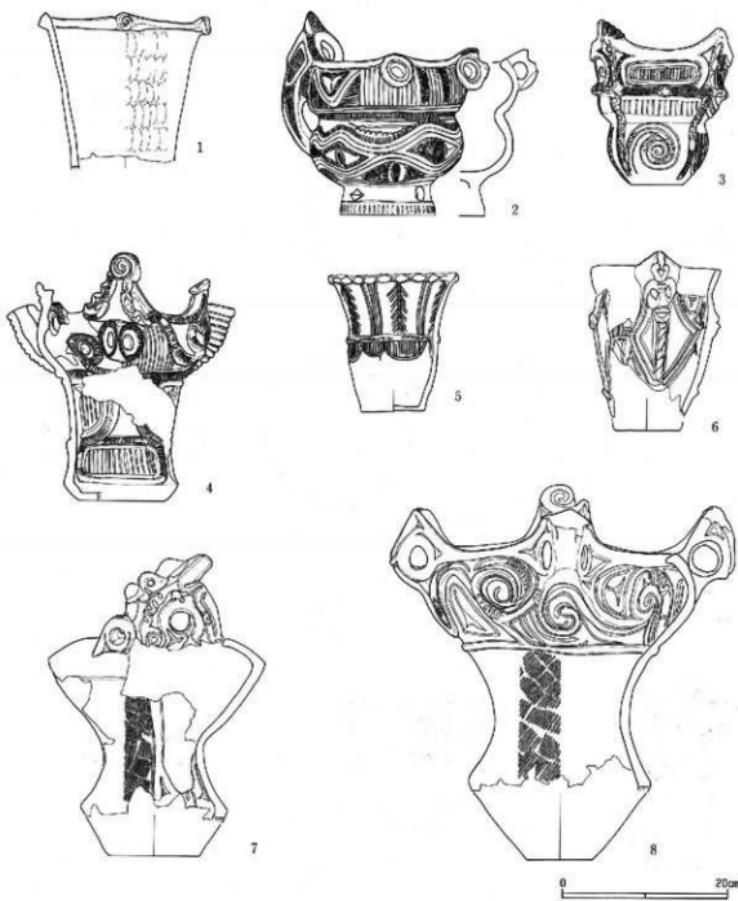
配石は、調査区の南西隅から北東方向に向かってほぼ直線に延びていた。盛土による保存部分の遺構の広がりをみるためのトレンチでは、調査区の南東隅のすぐ近くでも礎を確認していることから、調査区外に広がる環状または馬蹄形となる可能性がある。

後期の土坑は、壺被り墓と考えられる土坑が6基検出されている。また、掘り込みは検出できなかったものの、完形土器が単独で出土しているところもあり、浅い掘り込みがあったのではないかと思われる。また、小型の土器を副葬した土塙墓や配石墓も検出されている。

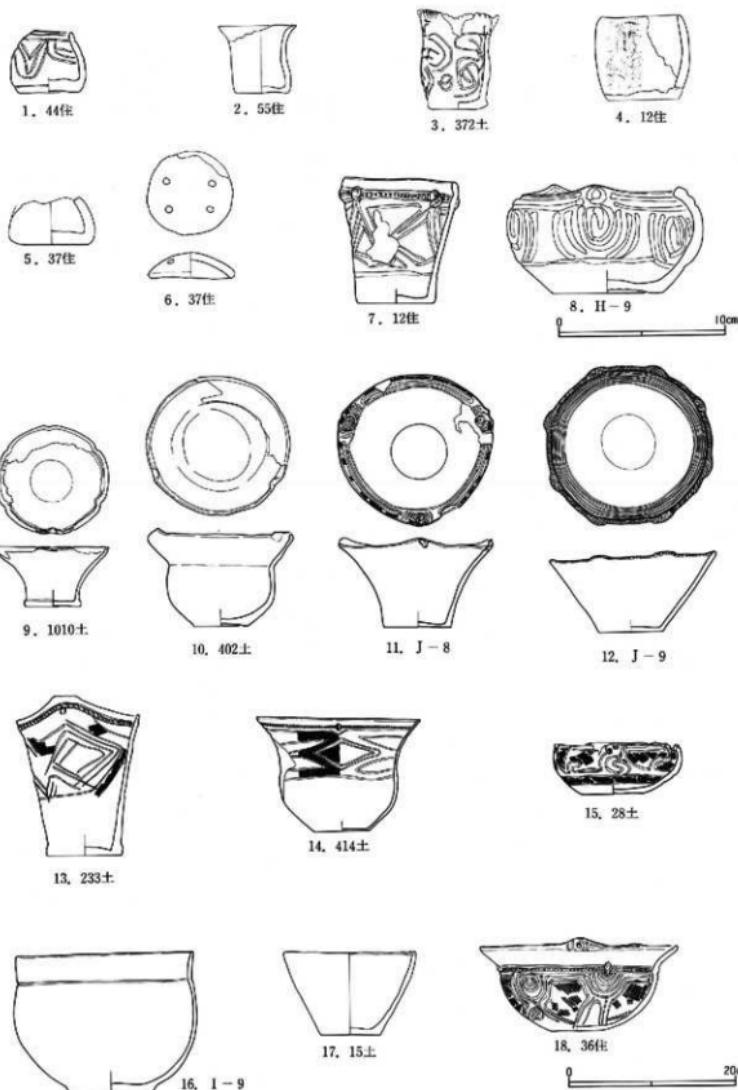
3 土器・土製品

勝山遺跡からは、復元により完形となる土器が100個体近く出土している。また、破片での出土もコンテナに100個以上収容されている。今回の整理作業では、すべての遺物を観察するのは不可能であると考え、調査段階で一括土器としたものについてだけ復元作業を行い、破片で出土したものについては、洗浄と注記を行った段階で袋詰めを行つたままとなっている。そのため、時期不明とした遺構も少なくない。

復元が完了した土器は、委託事業として写真測量を行つてあるが、実施時期が遅かったため、報告書には僅かな量しか反映できていない。報告書へは写真図版のみの掲載となってしまったものが多いが、機会を見



第51図 繩文時代中期の土器（1は28件・他は30件）(1/6)



第52図 ミニチュア土器 (1/3)・縄文時代後期の土器 (1/6)

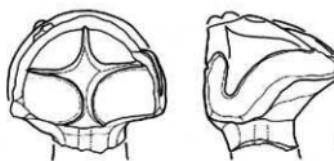


1. 1住

0 10cm



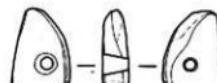
2. 30住



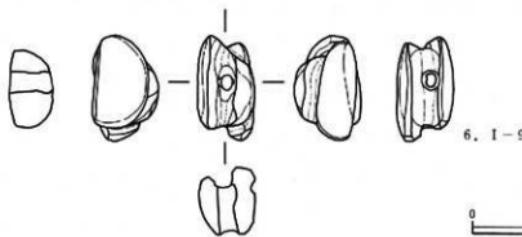
3. 1住



4. 44住



5. 239土



6. I - 9

0 5cm

第53図 土製品・石製品 (1は1/3、他は2/3)

新1表 出土石器一覧表

成様・クリップ	石面	磨石	磨石	礫石	礫石	打製(片)	磨製(片)	大型石器	小形石器	鉄石	石點	石核	石塊	石槍	石劍	鉄片(OB)	鉄片(2を含む)	その他の
1号生時社	1	6	6	7	1	—	—	—	—	4	—	—	—	—	—	34	1	
2号生時社	—	—	2	2	—	—	—	—	—	2	1	—	—	—	—	9	1	4
3号生時社	—	—	2	2	—	—	—	—	—	3	—	—	—	—	—	5	—	
4号生時社	—	1	3	1	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	11	1	
5号生時社	—	2	1	—	1	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	6	1	
6号生時社	—	2	1	—	1	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	22	1	
7号生時社	—	2	1	1	—	—	—	—	3	—	—	—	—	—	—	25	2	鉄片(OB)はチャート 鉄片2を含む
8号生時社	—	3	3	1	2	—	—	—	3	—	—	—	—	—	—	31	9	鉄片(OB)はチャート 鉄片1を含む
9号生時社	1	6	1	2	—	—	—	—	—	9	—	—	—	—	—	5	—	
10号生時社	—	3	—	2	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1	1	
11号生時社	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	—	
12号生時社	1	1	18	1	7	3	1	—	—	8	—	2	28	—	—	31	9	鉄片(OB)はチャート 鉄片1を含む
13号生時社	—	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
14号生時社	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5	—	
15号生時社	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	2	
16号生時社	—	—	7	—	1	—	—	—	—	14	—	—	—	—	—	2	2	
17号生時社	—	3	1	—	1	—	—	—	—	6	—	1	—	—	—	30	2	
18号生時社	—	3	1	—	2	—	—	—	5	—	3	—	3	—	—	63	3	ハンマー3
19号生時社	—	5	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	15	5	
20号生時社	—	—	—	—	2	—	—	—	—	3	—	—	—	—	—	4	—	
21号生時社	1	1	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	14	1	
22号生時社	—	3	1	—	1	—	—	—	—	4	—	1	—	—	—	79	—	
23号生時社	—	—	1	—	2	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	17	—	
24号生時社	—	2	3	3	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—	23	4	鉄片(OB)はチャート 鉄片1を含む
25号生時社	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	6	—	
26号生時社	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	3	—	—	—	—	—	
27号生時社	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1	—	—	—	8	—	
28号生時社	—	1	—	—	2	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	1	6	1
29号生時社	—	2	2	—	3	—	—	—	3	—	2	—	6	—	1	66	1	
30号生時社	1	4	13	24	31	1	—	—	2	—	2	—	6	—	1	111	3	ハンマー3
31号生時社	—	2	3	1	2	—	—	—	—	—	—	—	6	—	—	26	7	鉄片(OB)はチャート 鉄片1を含む
32号生時社	—	1	1	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	16	2
33号生時社	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	19	—	
34号生時社	—	1	—	1	2	—	—	—	—	2	—	1	—	—	—	5	1	
35号生時社	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	42	2	水晶1を含む
36号生時社	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	32	2	
37号生時社	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	96	3	
38号生時社	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	45	1	39・40号生時社を含む
39号生時社	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	16	2	
40号生時社	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	19	—	
41号生時社	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	2	
42号生時社	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
43号生時社	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

地質・グリッド	石Ⅲ	輸石	凹石	横刃	打削石片	大型鉄 製石片	小型 鉄 製石片	大型 石 片	石 片	石 棒	剥 片	軽石	石 錐	石 錐	スクリ ーパー	剥 片	OB	その他の 物
44号生層地	1	1	4	1	1	1	1	1	1	1	7	1	7	1	7	1	39	3
45号生層地																		
46号生層地																		
47号生層地																		
48号生層地																		
50号生層地																		
52号生層地	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	19	1
53号生層地	1	1	3	1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	11	1
54号生層地	1	3	2	3	6	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	5	1
55号生層地	2	3	2	3	6	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	9	1
56号生層地																		
58号生層地	2	8	3	5	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	21	1
59号生層地																		
60号生層地																		
61号生層地																		
62号生層地																		
63号生層地																		
64号生層地																		
65号生層地	3	1	1	3	3	10	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	20	1
66号生層地																		
67号生層地	2	1	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	19	1
68号生層地	2	1	3	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	54	2
70号生層地																		
72号生層地																		
74号生層地																		
75号生層地																		
76号生層地																		
83号生層地																		
84号生層地	1																	
87号生層地	1																	
88号生層地	1	1	11	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	10	1
89号生層地																		
92号生層地	1																	
93号生層地	1																	
2号上部																		
3号上部																		
4号上部																		
5号上部																		
6号上部																		
10号上部																		
11号上部																		
13号上部																		
15号上部																		
16号上部																		
18号上部																		
19号上部																		

遺構・グリッド	石皿	磨石	四石	楕円	打製石片	磨製石片	大型磨	大型磨	石片	燧石	石器	鉄石	石炭	スクリーン	鉄片 (OB)	鉄片 (OB) / 鉄片 (OB)	その他
403号土坑			1													5	
404号土坑			2													1	
405号土坑																	
408号土坑																	
412号土坑			1													3	2
414号土坑																1	
413号土坑			1	2													
419号土坑																	
436号土坑			1														
460号土坑																	
461号土坑																	
471号土坑																	
473号土坑																	
475号土坑			1													11	
1000号土坑																6	1
1001号土坑	1																
1002号土坑			1														
1005号土坑																	
1006号土坑																	
1008号土坑																10	2
1009号土坑																82	
1013号土坑																9	3
1015号土坑																8	1
1016号土坑																	
1号廐場																	
3号廐場			2														1
C-2																6	
C-3																4	1
C-4			1	6												16	2
C-8																16	1
C-9			2		2	1										6	
C-11			1														
D-2																5	1 塵石 (OB) はチャート
D-3																8	
D-4																4	1
D-6																5	2
D-7																4	6
D-8																1	
D-11																2	1
D-13																3	
E-2																5	4
E-3																26	
E-4																7	1
E-5																11	
E-6																134	8
E-7																7	

て何等かの形で報告したいと考えている。

4 石器・石製品

勝山遺跡から出土した主な石器と石製品には、石皿・磨石・凹石・横刃形石器・打製石斧・磨製石斧・小型磨製石斧・大型粗製石匙・石匙・石錐・砥石・蜂巣石・ハンマー・丸石・石棒・石鍬・石鉋・石錐・スクレーパー・亜鏡・水晶などがある（第1表）。

数と種類が非常に多いため、特徴的なものの写真を僅かに掲載したにすぎない。細かな分類も行わないまま、一覧表のみの掲載となってしまったが、実見していただき、ご教示を得たい。

ここでは、本遺跡の縄文時代における石器の在り方を見るため、石器の数量とその割合を棚畠遺跡との比較の中から探ってみたい。第2表は、勝山遺跡と棚畠遺跡の石器の数量と割合を示したものである。表には、1軒あたりの平均石器保有数も併せて示した。これは、ある特定の石器が棒端に多く出土していた場合など、組成比率が変わってしまうと考えたからである。

棚畠遺跡は、市内米沢境原田に位置する。集落のほぼ全面を調査し、縄文時代の住居址149軒を調査している。検出された住居址の時期は、前期の住居址が3軒、中期の住居址が146軒である。また、後期の住居址は検出されなかったものの、後期と考えられる墓壙や配石が検出されている点も、本遺跡に類似している。また、本遺跡が宮川から一段上がった守屋山系に位置するのに対し、棚畠遺跡は上川から一段上がった霧ヶ峰山地に位置するなど、遺跡の立地も似通っている。

勝山遺跡から出土した主な石器の総点数は、938点を数える。これらを棚畠遺跡と同様に、用途別に狩猟・漁撈具・植物採集具・調理具・加工具に分類した。表を作成するにあたっては、棚畠遺跡の報文では、各時期別に石器組成を考察していたものを、本遺跡の住居址が時期不明のものが多いことを踏まえ、遺跡内出土の石器の总数のみを示した。また、石製品や、剝片の類いも总数から除いている。個々の時期により構成数が異なっていると思われ、それぞれの時期の石器組成が大きく変る可能性もあるが、遺跡の立地や周辺の環境による違いが出てくるのではないかと考えられる。

第2表 勝山・棚畠遺跡出土石器対比表

	狩猟・漁撈具	植物採集具			調理具			加工具			総計				
		石錐	石匙	石錐	打製 石斧	横刃 石匙	磨石	凹石	石皿	磨製 石斧	石斧	ハン マー	スクレ ーパー		
勝山	個数	37	7	92	208	96	24	42	294	27	95	5	4	7	938
	比率	3.9	0.7	9.9	22.2	10.2	2.6	4.5	31.3	2.9	10.2	0.5	0.4	0.7	100
	個数/	83	0.45	0.08	1.11	2.51	1.16	0.29	0.51	3.54	0.33	1.14	0.06	0.05	0.08
棚畠	個数	354	31	36	1,142	131	95	47	553	62	171	102	12	23	2,760
	比率	12.9	1.1	1.3	41.3	4.7	3.5	1.7	20.1	2.2	6.3	3.7	0.4	0.8	100
	個数/149	2.38	0.21	0.24	7.66	0.88	0.64	0.32	3.71	0.42	1.15	0.68	0.08	0.15	

狩猟・漁撈具

石錐・石匙・石錐がこれにあたると考えられる。勝山遺跡では、遺跡全体で石錐が37点、石匙が7点、石錐が92点出土している。この中で特に目を引くのは、石錐と石錐の数量と全石器数に占める割合である。石錐は、棚畠遺跡での割合が約13%なのに対し、勝山遺跡は約4%と少ない数値となっている。逆に石錐は、棚畠遺跡が1.3%なのに対し、勝山遺跡は9.9%と1割近い数値となっている。これは、棚畠遺跡に前期のものを含んでいるため、石錐の数値が上がったとも考えられるが、石錐の多さは、本遺跡の方が、より漁撈に依存していたと考えられる。石錐については、当初形態の違いにより、短軸に挟りのあるものは中期・長軸

に抉りのあるものは後期と考えていたが、整理作業の過程で、短軸に抉りのあるものを最も多く出土した12号住居址が後期であると考えられることから、時期差ではなく、用途に関わるもの可能性もある。

植物採集具

打製石斧・横刃形石器・大型粗製石匙がこれにあたると考えられる。遺跡全体で打製石斧が208点、横刃形石器が96点、大型粗製石匙が24点出土している。本遺跡と棚畠遺跡との比較で見ると、石匙に大きな違いは見られないものの、打製石斧と横刃形石器では大きな数値の隔たりが見られた。これについては、欠損品での分類に違いが現われたのではないかとも思われる。

調理具

磨石・凹石・石皿がこれにあたると考えられる。遺跡全体で磨石が42点、凹石が294点、石皿が27点出土している。なお、敲石などもこれに入ると思われるが、磨石や凹石にその痕跡が認められるものが多く、凹みの有無によって両者に区別している。なお、棚畠遺跡の報文では、凹石・敲石・磨石に分類した後、磨石を凹石にも用いているもの、敲石にも用いているもの、磨石にしか用いられていないものの三者に細分している。そこで、棚畠遺跡の分類を、磨石の中で凹石にも用いられているものは凹石に、磨石の中で敲石としても用いられているものは敲石に含めて分類し直し、対比した。

本文でも述べているように、石皿が出土しているにもかかわらず、これと密接な関係にあると考えられる磨石の出土がなかった住居址が10軒ある。また、磨石の出土があって、石皿の出土がなかった住居址も、15軒と多い。棚畠遺跡でも、石皿は「凹石・磨石類の増減に関わることなく一定の量で継続しており、これらのことと踏まえると、直接的に凹石・磨石は石皿とは関連が少ないとされる可能性が出てくる。」(守矢1990)との指摘があるが、それを本遺跡でも再度確認した結果となっている。

加工具

磨製石斧・石錐・ハンマー・スクレイバーがこれにあたると考えられる。遺跡全体で磨製石斧が95点、石錐が5点、ハンマーが4点、スクレイバーが7点出土している。

なお、礫器については、本遺跡ではその他としてあるため、対比の項から省いた。

これら加工具については、石錐の出土が本遺跡で少ないことを除けば、ほぼ棚畠遺跡と似通った数値となっている。

5 瓢箪形集石

遺跡の中央部に橢円形の凹弧を描いて設置された配石遺構が、調査区のほぼ中央でやや強く曲り、配石が疊らになるあたりに長径153cm、短径80cmの瓢箪型を示す集石遺構(図版31-2)があった。

この集石は、軟質ロームに掘り込まれた中期後葉～中期最末期の土坑を埋め戻し、その上に設置されたものと考えられ、今日まで、同様の遺構の発見例もないので、この際、詳細な観察記録を記しておきたい。

集石の構築は一気になされたもののように、まず、本体は、上部で15cm、下部は20cm程の深さで、連続する凹みを掘る。次に、予め用意しておいた川砂利に白蝶を混ぜながら下部を充満させ、

第3表 瓢箪型集石内岩石数量表

岩石名	数量	重量
石英	5	
チャート	2	
石英片岩	34	
閃綠岩類	30	
石英斑岩	20	
半花崗岩	4	
ハンレイ岩類	190	
輝岩	1	
砂岩	10	
硬砂岩	1	
結晶片岩類	293	
安山岩類	39	
黒曜岩	6	
不明岩石	320	955個体で23.2kg
砂		約1kg
土		約6kg
合計	955	30.2kg

第4表 白礁(燧石等)測定表

番号	形 状	色・石質	混入物	硬軟	吸水量	体積	重 量	比 重
1	長楕円形	赤桃斑点		硬	29.5	140	179.0	1.28
2	米粒形	赤桃斑点		硬	27.5	150	183.0	1.22
3	長楕円形・扁平	白		硬	26.5	145	237.5	1.63
4	長楕円形・扁平	白		硬	78.3	490	620.8	1.26
5	長楕円形・扁平	黃味		軟	51.5	180	172.0	0.95
6	長楕円形・扁平	黃味		硬	29.8	125	163.0	1.30
7	不整円形	黃味		硬	3.5	150	249.5	1.66
8	長楕円形	黃味		硬	13.3	130	159.0	1.22
9	長楕円形	黃味		硬	12.2	180	255.8	1.42
10	長楕円形	白		軟	47.7	100	73.6	0.73
11	長楕円形	白		板	27.5	100	100.0	1.00
12	不整円形	白		硬	15.0	100	149.5	1.49
13	長楕円形	赤桃混	長石	軟	34.8	140	184.0	1.31
14	小稜円形	黃味		軟	33.4	90	84.6	0.94
15	三角形	黃味		硬	10.5	90	114.0	1.26
16	不整円形	白		軟	16.0	30	27.3	0.91
17	不整円形(半剖)	白		軟	19.0	35	28.0	0.80
18	米粒形	白		硬	3.2	23	35.3	1.53
19	円形・扁平	白		軟	11.5	20	18.0	0.90
20	長三角形	白・灰色混		硬	6.5	15	28.8	1.52
21	長楕円形	黃味		硬	5.5	10	16.0	1.60
22	不整円形	白		軟	8.0	15	21.0	1.40
23	不整円形	白		軟	1.2	4	3.1	0.77
24	長円形	黃灰色・多孔		軟	33.5	280	373.0	1.33
25	長円形	淡桃色	長石	軟	33.0	180	231.0	1.28
26	米粒形	白		硬	4.0	80	120.0	1.50
27	不整円形(破)	白		軟	6.0	30	38.0	1.26
28	長楕円形	角閃石安山岩		軟	1.5	40	74.0	1.85
29	市販隕石	白灰色		軟	11.5	30	20.2	0.67
30	不定形	輝岩		硬	3.0	215	451.5	2.10

上部は川砂利だけで満たす。最後に括れ部とその西側に2個白礫を配置して完成する。

文章に綴るとざっとこんなところで、何の変哲もなさそうだが、よく観察してみると、中なか味ありで興味深い事柄が多いので順を追ってみてみよう。

標題に記したとおり本体の形状は、だれがみても瓢箪そのもので、括れ部には、白礫を連ねた紐まで表現してある。次に木体の凹みだが、これも、上部は小さくて浅く、下部は大きくて深い。これまた瓢箪以外のなにものでもない。内部に満たされていた川砂利等は第3表の通りで、一見して近くを流れる鳴沢川からの採集品と判明した。こうした組合せの岩相は、配石造構全体にも通ずるところがあって興味深い。なお、これらのうち、不明としたものは、結晶片岩およびハネレイ岩に分類されるべきものであるが、小片であつたり肉眼鑑定不可能のものを一括した。また、砂岩には荒目のものと繊維のものがあり、安山岩のほとんどは加工しやすい軽質のものが35個と大多数を占め、黒曜岩はすべて3cm以下の小破片であった。ほかに、摩耗した中期上器の小破片4個と後期初頭期の小破片9個が含まれていた。

石材の最後は白礫であるが、この白礫は、瓢箪形集石に集中し、他に、配石中で2~3点の発見にとどまっている。集石中からは、大小あわせて25個発見されたが、厳密には23個とすべきで、他の2個は白礫成因と安山岩系列の岩石である証明資料として数に加えておきたい。

白礫の形は、楕円~長椭円形を基本とし、これらの不定形のものが多く、河原石である。したがって、成因地を離れてから可成りの時間と距離を移動して採集地に達したことが窺われた。しかし、調査中および調査後、採集地点を探したが、未だ分っていない。

白礫の性質についての詳細は、第4表に示しておいたが、体積の測定が不完全なため、比重の項は不鮮明な数値となつたが、その傾向だけでも理解できればと思って掲げた。

最後に集石と白礫の性格について一言述べておきたい。思うに、この集石は、縄文時代後期の初頭、この地に移住した人々は、村造りが一通りすむと、隣の鳴沢川を主体に、宮川・上川にかけての可成りに広い範囲から石材を集め環状の配石構築の大土木工事にとりかかったものと考えられ、その一環として瓢箪形集石の完成がみられたものと思う。瓢箪は夕顔とともに今日でもそうであるように、「命の水」として珍重がられた酒や種子などの貯蔵具として縄文時代の前期から使用されてきたもので、それらの供養か、納められた白礫に特に駒の意味をもたせ、「瓢箪から駒が出る」の諺のように、意外なところから大きな恵が出ることを祈る行事を行った場所」と、とりあえず理解しておこう。

この項については、調査資料の整理途上で感じた点を列記したにすぎない。今後、それぞれの資料の分析が進むと更なる詳細な駒が出てくることを期待しておきたい。

第2節 弥生時代・古墳時代

浅い土坑から1点だけ弥生土器甕の破片が出土している。描绘文を用いたものであるが、洗浄に際してほとんど文様がなくなってしまった。

また、頂部付近の抜根による搅乱からは、古墳時代初頭と考えられる高环あるいは器台と考えられるものの脚部の破片が出土している。透かしの入ったものである。

どちらも破片での出土で、量も各1点と少ないものの、該期の資料の少ない当市にあっては、貴重な資料となった。

第3節 平安時代

本遺跡で検出された平安時代の遺構は、住居址が13軒、土坑が1基である。また、遺物の出土がなく、時期ははっきりしないものの、掘立柱建物址も平安時代の遺構の可能性があると思われる。

住居址の中で、重複のないものは8号住居址、18号住居址、20号住居址、21号住居址、22号住居址、23号住居址、29号住居址の7軒で、重複しているものは9号住居址の大・小、19・49号住居址、53・54号住居址の6軒である。

重複している19・49号住居址は、カマドの痕跡は1ヵ所ながら、角度を約30°振った形で検出されており、時期が離れている可能性があると考えられる。

9号住居址の大・小と53・54号住居址は、共に規模を縮小して建て直していると理解された住居址であるが、主軸方向が同じであったり、同じ壁面を使っていたりと、時期的にはそれほど離れていないのではないかと考えられる。

また、22号住居址のようにカマドを構築し直している住居址は、同じ掘り込みを用いており、時期的には継続したものと理解される。

住居址の規模を見ると、53号住居址の613×600cmが最も大きく、18号住居址の621×564cmがこれにつづき、他の住居址とは一線を画している。最も小さい住居址は19号住居址の391×365cm、あるいは9号住居址(小)の400×323cmであろうか。この2軒の住居址から9号住居址(大)の501×446cm、あるいは21号住居址の486×450cmの住居址までは、ほぼ一群として捉えられ、区切ることは難しい。本遺跡においては、大規模住居址と小規模住居址の二者があると見てよいであろう。

各住居址の位置を見ると、地形的には西側の頂部からの傾斜がほぼ平坦になる地形変換点のあたりに18号住居址、53号住居址の大型の住居址が位置し、これを取巻くように小型の住居址が存在している。ただし、今回の調査が、遺跡範囲のはば半分であることを考えると、集落の範囲もさらに広がっていることが、充分予想され、集落形態も違ったものとなっていくと考えられる。

9・18・23・54号住居址の4軒は、覆土内に焼土や炭化材が大量に認められた住居址であった。焼土や炭化材は、覆土のかなり上の方から検出し始め、床面から数cm浮いた状態で検出が終っている。また、この焼土や炭化材の上には、人頭大かそれ以上の大きな礫が投込まれたかの様にまとまって出土している。こうした礫は、焼土や炭化材の検出されなかった19号住居址や22号住居址でも検出されており、住居址の廃絶に伴って投込まれたと理解できるものである。

こうした焼土や炭化材が大量に検出される住居址は、今まで火災住居として取扱われる事が多かった。しかし、遺物の出土状況を見ると、18号住居址のように大量の遺物を出土した住居址さえ、甕や羽釜といった煮沸形態の土器の出土は見られず、土器類の皿や灰釉陶器の塊ばかりが出土している。この様な遺物の出土状態から、住居を建直したり、村を離れる際には、住居をそのまま放置することなく、きちんと焼却処分をし、さらに大きな礫を投込むなどの行為を行なっていたのではないかと考えることができる。また、この土器類の皿や灰釉陶器の塊の出土状態を観察すると、ほとんどが完形品またはほぼ完形品に近い状態で、床面に密着するように出土している。しかし、これらの皿や塊はまとまっているものの、きれいに重なって出土しているものではなく、どちらかというと棚から崩れ落ちたかのような状態での出土であった。これらの遺物は住居址の廃絶にともない、持出されることなく、そのまま放置されたと理解される。

第5表 平安時代土器観察表

遺構名	標図No	No.	種別	器形	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	その他の
8号住居址	39	1	上師器	环	15.4	6.9	4.0	
		2	土師器	环	10.4	4.6	3.4	
		3	土師器	皿D	9.6	4.8	1.9	
9号住居址	40	1	上師器	高台付环		8.2		
		2	黑色上器	高台付环	11.2	5.5	4.2	外面ともよく磨かれている
		3	灰釉陶器	皿	11.4	6.2	2.7	胎肉厚く、後縁が少ない
18号住居址	42	1	土師器	皿A	10.6	5.0	2.2	
		2	土師器	皿A	9.7	4.1	2.3	
		3	土師器	皿A	9.7	4.2	2.8	
		4	土師器	皿A	10.2	4.8	2.3	
		5	土師器	皿B	9.7	4.5	2.7	
		6	土師器	皿B	9.5	4.1	2.3	
		7	土師器	皿B	9.1	4.3	2.3	
		8	土師器	皿B	9.8	4.4	2.1	
		9	土師器	皿B	9.0	4.0	2.5	
		10	土師器	皿B	10.0	4.6	2.4	
		11	土師器	皿B	9.7	4.7	2.6	
		12	土師器	皿B	9.2	4.5	2.3	
		13	土師器	皿B	9.8	4.6	2.4	
		14	土師器	皿B	9.5	4.0	2.3	
		15	土師器	皿B	9.2	4.1	2.4	
		16	土師器	皿B	9.4	4.1	2.3	
		17	土師器	高台付皿C	10.1	5.4	3.4	No.29内から出土
		18	土師器	高台付皿C	10.2	5.3	2.9	
		19	土師器	高台付皿C	10.7	5.0	2.9	
		20	土師器	高台付皿C	10.2	5.0	2.5	
		21	土師器	高台付皿C	10.4	4.6	3.0	
		22	土師器	高台付皿C	9.6	4.9	2.3	
		23	土師器	高台付皿C	9.7	5.5	2.8	
		24	土師器	皿D	9.6	3.9	1.4	
		25	土師器	环	13.5	6.6	4.5	
		26	土師器	环	14.2	5.0	3.4	
		27	土師器	环	14.1	6.0	4.2	
		28	灰釉陶器	塊	15.0	6.1	6.1	
		29	灰釉陶器	塊	11.9	6.6	3.9	
19号住居址	43	1	土師器	环	11.7	4.4	4.1	放射状暗文
20号住居址	44	1	土師器	环	10.9	5.1	3.4	
21号住居址	45	1	灰釉陶器	皿	13.4	7.2	2.3	
22号住居址	46	1	土師器	小壺	8.9	5.4	8.2	底部に木柴痕
		2	土師器	环	11.6	5.3	3.4	
		3	土師器	高台付环	13.8	6.8	4.9	
		4	須恵器	环	13.1	6.2	3.6	酸化炎焼成
23号住居址	47	1	土師器	环	13.3	6.3	4.1	内黒
		2	土師器	环	11.1	5.4	3.5	内黒、墨青
		3	須恵器	長颈壺		11.2		
53・54号住居址	49	1	土師器	环	12.9			内黒、墨青「大」
		2	灰釉陶器	塊	16.1	7.2	4.8	
		3	灰釉陶器	塊	12.6	6.7	3.8	
403号土坑	50	1	土師器	环	13.2	6.0	4.3	
		2	土師器	高台付皿	10.9	6.7	3.6	

13軒検出された住居址の中で、最も古いと考えられる住居址は、23号住居址である。23号住居址から出土した土師器は、すべて内面を黒色処理したもので、須恵器や灰釉陶器の出土は見られなかった。また、底部のみの出土であるが、須恵器の長頸壺かと思われる破片も出土している。また、53・54号住居址からも内面黒色処理された土師器が出土しており、同時期になるのではないかと思われる。22号住居址からは、高脚あるいは足高台と呼ばれる高台付杯に移行する前段かとも思われる土師器が出土しているが、酸化炎焼成の須恵器壺が出土しており、やはり古い様相を残している。これらの住居址には10世紀代の年代を与えることができる。

最も遺物を多く出土した18号住居址は、器形を窺えるような煮沸形態の甌などの出土ではなく、皿や碗が出土しただけであった。この住居址から出土した土師器の皿は、形態から大きく次の4に分類される。

皿A 口縁は直線的に開くか、やや外反気味となるもの。底部も比較的厚いが、内面側に厚くなっている。
底部が張り出すような感じはない。

皿B 底部が張り出すように厚く切られた皿で、口縁が直線的に開くが、中には口縁がやや外反気味に開くものもある。

皿C 高台の付いた底部から、口縁が直線的に開くもの。

皿D 底部が張り出すように厚く切られた皿で、底部から余り器高が高くならず、水平近くに開いた後、僅かに内湾気味に立ち上がるもの。

これらの土器は、市内宮川の高部遺跡に類例を求めることができる。本遺跡の皿Bは高部遺跡の皿Bに、皿Cは同じく高台皿Cに、皿Dは皿Eにそれぞれ対比できる。皿Aについては、高部遺跡の皿Aが本例に近いが、底部から立ち上がる部分での括れがなく、また、口縁部が極端に外反気味に開くことはないため、別の器種とした方が良いのではないかと思われる。

皿B・Dで底部を張り出すように厚く切る手法は、疑似高台あるいは柱状高台などと呼ばれている。

この種の土師器皿が後の中世のカワラケに移行していくものと思われるが、実年代については、研究者によって、11世紀の中ごろから12世紀代と分かれているようである。また、これより古い段階の資料としては、市内宮川の狐塚遺跡3号土坑出土の皿類を上げることができよう。

なお、本遺跡からは、8号住居址でも皿Aが1点出土している。

その他の住居址については、遺物の出土が余りにも少なく、はっきりしないが、いずれにしても平安時代の後半に位置するものと思われる。

茅野市内の平安時代の遺跡を見ると、諏訪盆地から続く現在の市街地周辺には平安時代の継続した集落が営まれていたが、八ヶ岳山麓には10世紀の後半から11世紀の前半にかけて、一時的に小規模な集落が営まれたか、単独の住居が存在するというが一般的な傾向である。その様な中にあって、本遺跡の平安時代の集落は、ある程度の継続性が認められる。これは、諏訪の古代の中心地であると考えられる。宮川の諏訪大社前宮周辺に比較的近いこと、さらに、この地が宮川沿いに現在の山梨県方面へ抜ける道筋であることなどが考えられる。また、金沢町を経て伊那方面へ抜ける道筋になっていた可能性もある。

同様な性格の遺跡としては、昨年度調査された市内金沢の犬狗山遺跡が考えられる。やはり山梨県方面へ抜ける道筋であるばかりでなく、金沢町・芝平岸を経て伊那方面へ抜ける道筋でもある。出土した遺物を見ても、土師器皿などに本遺跡と類似したものが見られ、ほぼ同時期になるのではないかと思われる。

本遺跡からは、遺構検出作業中にフイゴの羽口や鉄鋤が出土したことから、平安時代の鍛冶遺構があるのではないかと予想された。住居址の掘り下げは、細心の注意を払って行なったが、残念ながら拔根による影

磬が床面にまで達しているものが多く、明確な鐵冶遺構の検出された住居址はなかった。ここでは18号住居址の床面中央で、培塿穴かと思われる十字型の浅いビットが検出されたことを記録にとどめておきたい。

鐵冶に伴うと思われる鐵滓は、遺構からは18号住居址で検出されただけであるが、鐵製品は幾つかの住居址で出土している。刀子は8・9・18・54号住居址の4軒から5本が出土している。紡錘車は18号住居址からの出土であった。22号住居址からも鐵製品の出土があったが、小片で種類は不明である。

あとがき

勝山遺跡の調査は、7月末から開始された。平成5年度は、例年ない記録的な冷夏と長雨により、調査期間前半の9月の終わりまでは二日に一日は雨が降るという状態であった。その様な中で、なんとか予定期間4ヶ月で終了できたのは、発掘調査委託契約により作業員の確保などを行っていただいた協和建設株式会社の協力によるところが大きい。ここに記して、感謝したい。

また、発掘期間中、武藤雄六氏には、ほとんど毎日現地に来ていただき、遺構検出・掘り下げ等、毎日の作業を進める上でご指導いただいた。また、遺物の復元・着色でも、整理作業を行った尖石考古館に何回も足を運んでいただいた。さらに、鰐型集石については、原稿の執筆もお願いしている。特に記して感謝したい。

引用・参考文献

- 守矢昌文 1990 「棚畠遺跡の石器組成について」『棚畠遺跡—八ヶ岳西山麓における縄文時代中期の集落遺跡—』
- 鶴岡幸雄 1983 「高部遺跡山上の平安時代後期の土器様相」「高部遺跡—静香苑進入道建設に併なう埋蔵文化財緊急発掘調査報告書一』茅野市教育委員会
- 服部敬史 1986 「関東甲信地域における古代末期の土器様相」「シンポジウム 古代末期～中世における在地系土器の諸問題」神奈川考古 第21号
- 川上 元 1986 「信濃国における古代末期の土器様相」「シンポジウム 古代末期～中世における在地系土器の諸問題」神奈川考古 第21号
- 川上 元 1986 「足高高台付土器」「シンポジウム 古代末期～中世における在地系土器の諸問題」神奈川考古 第21号
- 坂本美夫 1986 「甲斐国における古代末期の土器様相」「シンポジウム 古代末期～中世における在地系土器の諸問題」神奈川考古 第21号
- 坂本美夫 1986 「柱状高台のⅢ・Ⅳについて」「シンポジウム 古代末期～中世における在地系土器の諸問題」神奈川考古 第21号
- 茅野市 1986 「茅野市史」上巻
- 茅野市教育委員会 1990 「棚畠遺跡—八ヶ岳西山麓における縄文時代中期の集落遺跡—」
- 茅野市教育委員会 1983 「高部遺跡—静香苑進入道建設に併なう埋蔵文化財緊急発掘調査報告書一』
- 茅野市教育委員会 1990 「孤塚遺跡—前宮公園建設工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書一』
- 茅野市教育委員会 1993 「犬狗山遺跡—金沢住宅用地」宅地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書一』

図 版





(1) 4・15号住居址（南東から）



(2) 5・6号住居址（南から）



(3) 7号住居址（東から）



(1) 10~12号住居址（南東から）



(2) 10~12号住居址敷石除去後
(南東から)



(3) 12号住居址石圓炉（東から）



(1) 13・14号住居址（東から）



(2) 16号住居址遺物出土状態
(東から)



(3) 16号住居址（東から）



(1) 17号住居址遺物出土状態
(東から)



(2) 17号住居址 (東から)



(3) 24号住居址 (南から)



(1) 24号住居址埋甕（西から）



(2) 25号住居址（南から）



(3) 26・27号住居址（東から）





(1) 30号住居址（南東から）



(2) 30号住居址石圓炉（南東から）



(3) 31号住居址（南から）



(1) 32号住居址（東から）



(2) 33号住居址（東から）



(3) 34号住居址（南から）



(1) 36・48号住居址（南から）



(2) 36号住居址埋甌



(3) 37号住居址（南から）





(1) 43・45・57号住居址（東から）



(2) 43号住居址遺物出土状態
(東から)



(3) 44号住居址石圓炉（1）
(北東から)



(1) 44号住居址石圓炉（2）
（南西から）



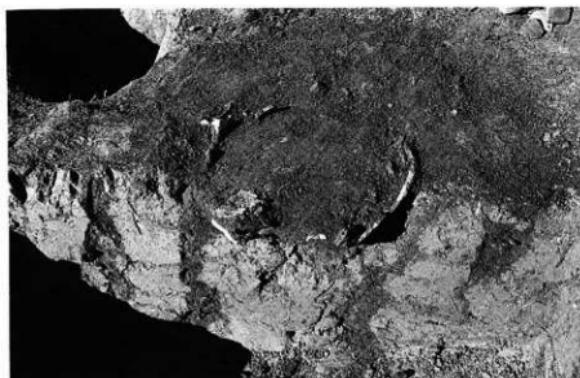
(2) 44号住居址ミニチュア土器出土
状態



(3) 45号住居址埋甕（1）（南から）



(1) 45号住居址埋甕 (2)
(北東から)



(2) 56号住居址埋甕炉 (1)
(南東から)



(3) 56号住居址埋甕炉 (2)
(南東から)



(1) 58・59号住居址出土状態
(東から)



(2) 58号住居址 (東から)



(3) 65号住居址 (南東から)





(1) 67号住居址（南から）



(2) 68号住居址（南東から）



(3) 68号住居址石囲炉（北から）



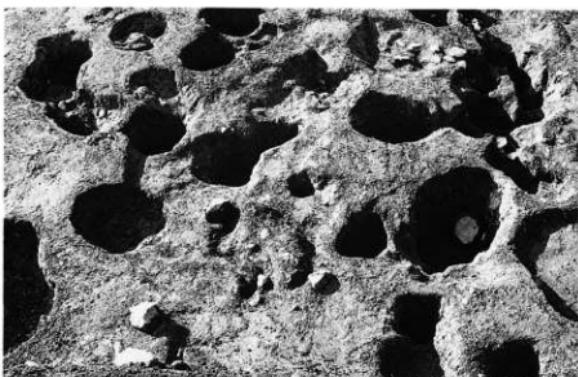
(1) 69号住居址 (東から)



(2) 71号住居址 (東から)



(3) 72号住居址 (東から)





(1) 76号住居址（東から）



(2) 77号住居址（東から）



(3) 79号住居址（東から）





(1) 84号住居址遺物出土状態
(東から)



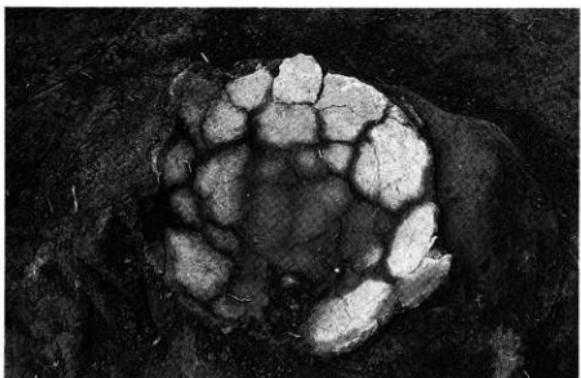
(2) 84号住居址埋甕 (北から)



(3) 85号住居址 (北から)



(1) 85号住居址遺物出土状態(1)
(北から)



(2) 85号住居址遺物出土状態(2)
(東から)



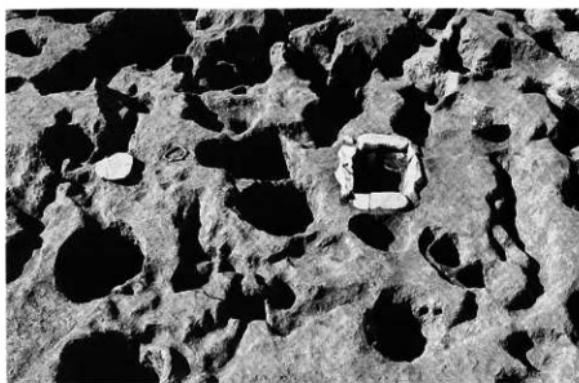
(3) 87号住居址 (南東から)



(1) 87号住居址（部分）
(北西から)



(2) 87号住居址埋甕（北から）



(3) 88号住居址（東から）



(1) 88号住居址埋甕（1）
(東から)



(2) 88号住居址埋甕（2）
(東から)



(3) 89号住居址埋甕（北から）



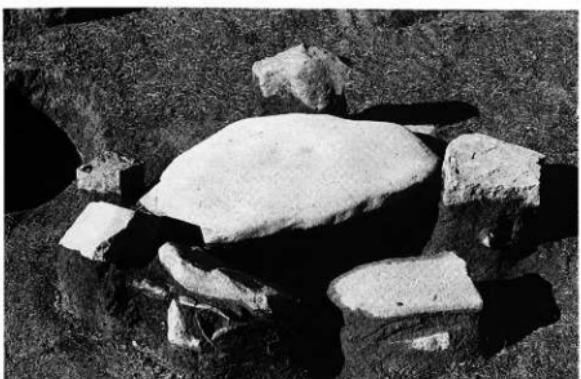
(1) 92号住居址石焼埋葬炉
(東から)



(2) 93号住居址 (南東から)



(3) 2号土坑 (東から)

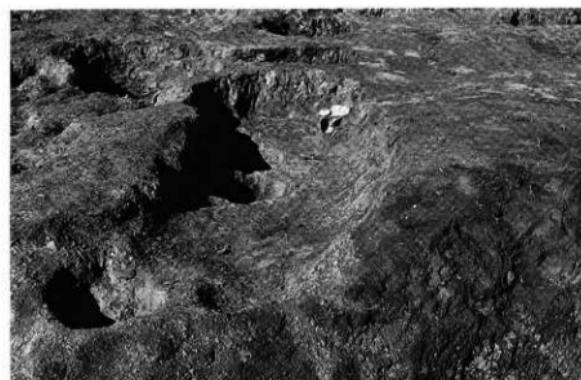




(1) 399～401号土坑（南から）



(2) 401号土坑遺物出土状態
(南から)



(3) 402号土坑（南から）



(1) 414号土坑遺物出土状態
(東から)



(2) 1010号土坑 (東から)



(3) H-7遺物出土状態
(東から)



(1) H-8 遺物出土状態



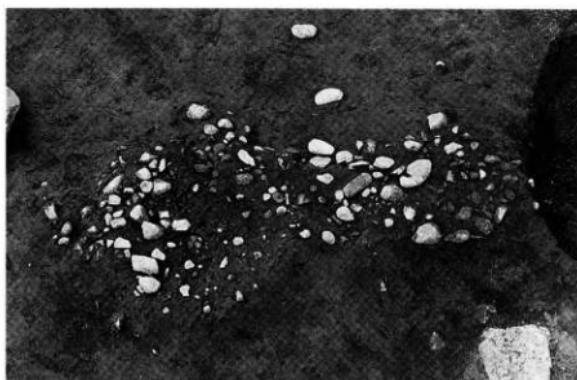
(2) J-8 遺物出土状態



(3) J-9 遺物出土状態
(南東から)



(1) I-9 遺物出土状態



(2) 無草形集石（東から）



(3) 1号住居址出土土器



(4) 3号住居址出土壺甕



(1) 7号住居址出土土器



(2) 10号住居址出土土器 (1)



(3) 10号住居址出土土器 (2)



(4) 10号住居址出土土器 (3)



(5) 11号住居址出土炉体土器



(6) 12号住居址出土土器



(1) 12号住居址出土ミニチュア土器 (1)



(2) 12号住居址出土ミニチュア土器 (2)



(3) 16号住居址出土土器 (1)



(4) 16号住居址出土土器 (2)



(5) 17号住居址出土土器 (1)



(6) 17号住居址出土土器 (2)



(1) 24号住居址出土土器 (1)



(2) 24号住居址出土土器 (2)



(3) 24号住居址出土埋甕



(4) 28号住居址炉体土器



(5) 29号住居址出土土器



(6) 30号住居址出土土器 (1)



(1) 30号住居址出土土器 (2)



(2) 30号住居出土土器 (3)



(3) 30号住居址出土土器 (4-1)



(4) 30号住居址出土土器 (4-2)



(5) 30号住居址出土土器 (4-3)



(6) 30号住居址出土土器 (4-4)



(1) 30号住居址出土土器 (5-1)



(2) 30号住居址出土土器 (5-2)



(3) 30号住居址出土土器 (6)



(4) 30号住居址出土土器 (7)



(5) 30号住居址出土土器 (8)



(6) 31号住居址出土土器



(1) 33号住居址出土土器



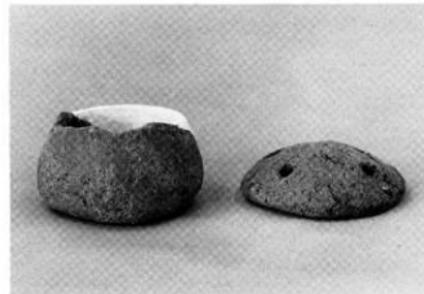
(2) 34号住居址炉上出土土器



(3) 36号住居址出土炉体土器（1）



(4) 36号住居址出土炉体土器（2）



(5) 37号住居址出土ミニチュア土器・蓋



(6) 38~40号住居出土土器（1）



(1) 38~40号住居址出土土器 (2)



(2) 41号住居址出土炉体土器



(3) 43号住居址出土土器



(4) 44号住居址出土土器



(5) 45号住居址出土埋甕



(6) 47号住居址出土土器



(1) 55号住居址出土土器 (1)



(2) 55号住居址出土土器 (2)



(3) 55号住居址出土ミニチュア土器



(4) 56号住居址炉体土器



(5) 63号住居址出土土器



(6) 65号住居址出土土器



(1) 66号住居址出土埋甕



(2) 75号住居址出土土器 (1)



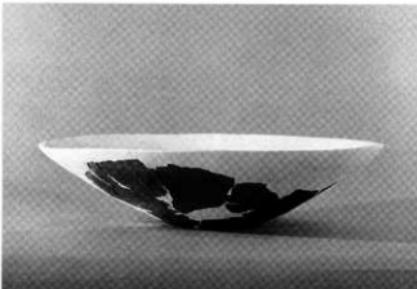
(3) 75号住居址出土土器 (2)



(4) 76号住居址出土土器



(5) 81号住居址炉体土器 (1)



(6) 81号住居址炉体土器 (2)



(1) 84号住居址出土土器 (1)



(2) 84号住居址出土土器 (2)



(3) 84号住居址出土土器 (3)



(4) 84号住居址出土土器 (4)



(5) 85号住居址出土土器 (5)



(6) 85号住居址出土土器 (6)



(1) 87号住居址出土埋甕 (1)



(2) 87号住居址出土埋甕 (2)



(3) 88号住居址出土埋甕 (1)



(4) 88号住居址出土埋甕 (2)



(5) 88号住居址出土埋甕 (3)



(6) 89号住居址炉体土器



(1) 92号住居址出土炉体土器



(2) 15号土坑出土土器



(3) 233号土坑出土土器



(4) 243号土坑出土土器



(5) 248号土坑出土土器



(6) 318号土坑出土土器



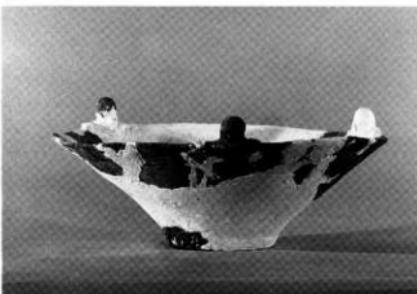
(1) 342号土坑出土土器



(2) 372号土坑出土ミニチュア土器



(3) 388号土坑出土土器



(4) 399号土坑出土土器



(5) 400号土坑出土土器



(6) 401号土坑出土土器



(1) 402号土坑出土土器



(2) 413号土坑出土土器



(3) 414号土坑出土土器



(4) 415号土坑出土土器



(5) 1010号土坑出土土器



(6) H-7出土土器(1)



(1) H-7 出土土器 (2)



(2) H-8 出土土器



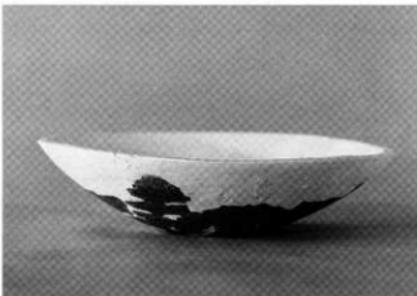
(3) I-9 出土土器



(4) J-8 出土土器



(5) J-9 出土土器



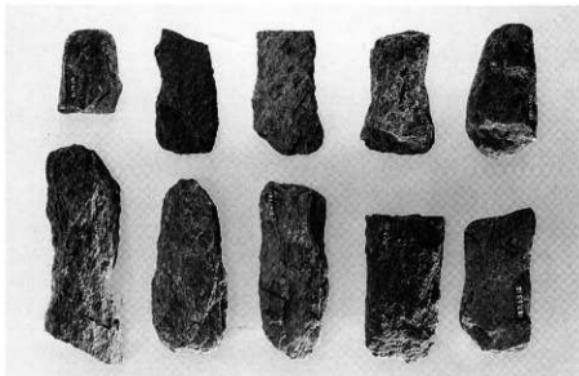
(6) J-14 出土土器



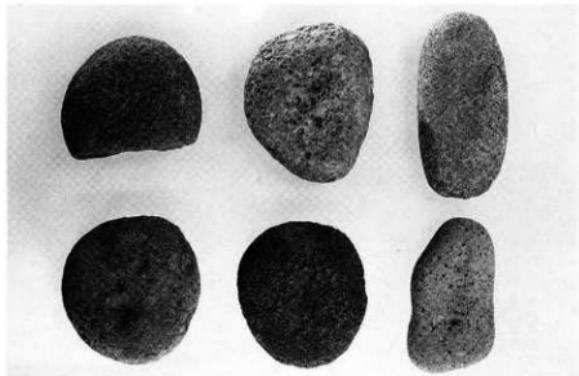
(1) 8トレンチ出土土器



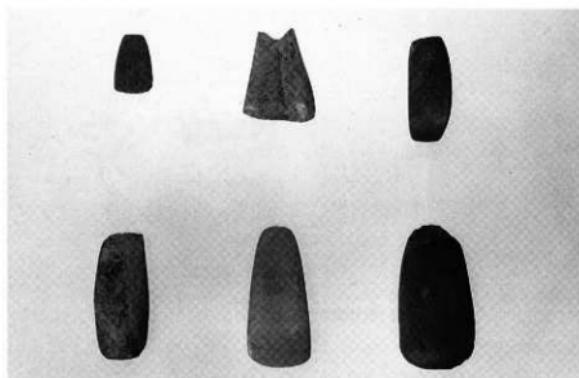
(2) 脼算形集石出土土器



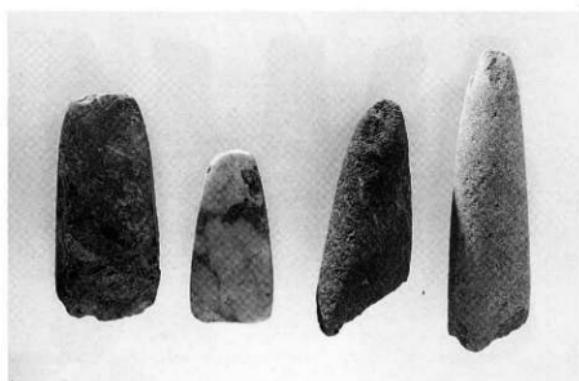
(3) 63号住居址出土打製石斧



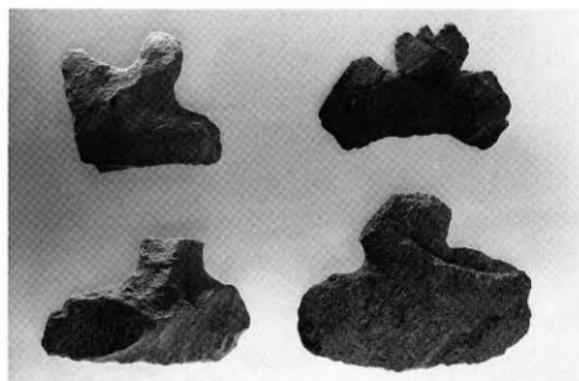
(4) 58号住居址出土凹石



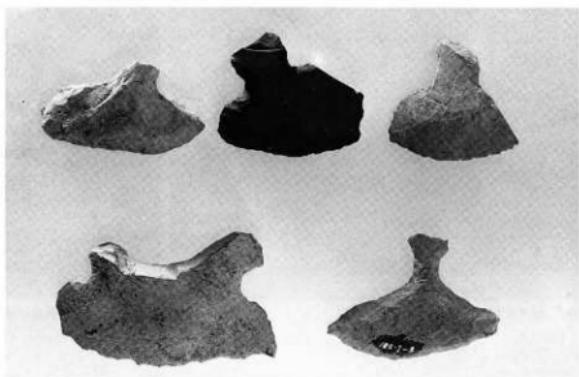
(1) 小型磨製石斧



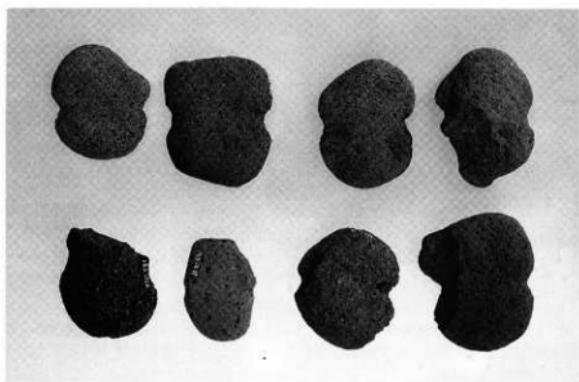
(2) 磨製石斧



(3) 大型粗製石匙



(1) 石鉤



(2) 12号住居址出土石鉤



(3) 64号住居址出土石鉤



(1) ヒスイ製垂飾



(2) ヒスイ製垂飾（裏面）



(3) 1号住居址出土土偶頭部



(4) 1号住居址出土顔面把手



(5) 30号住居址出土土偶頭部



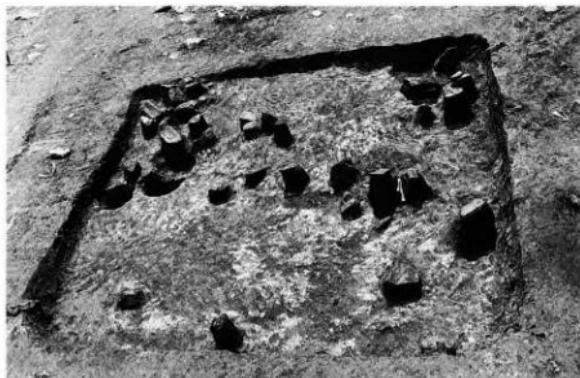
(6) 6号住居址出土土偶足部



(1) 20号住居址内土坑出土人体付土器



(2) 4号住居址出土土製品



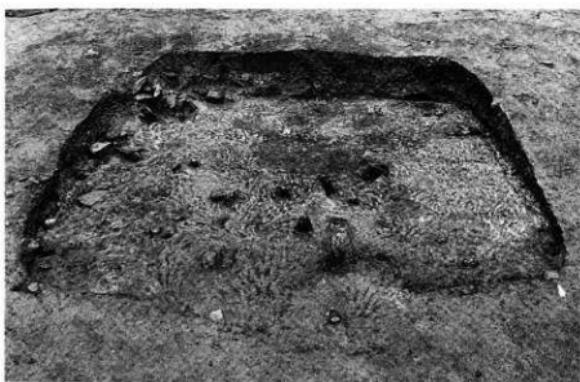
(3) 8号住居址（北から）



(4) 9号住居址（南東から）



(1) 18号住居址（1）（東から）



(2) 18号住居址（2）（東から）



(3) 18号住居址カマド



(1) 18号住居址遺物出土状態（1）



(2) 18号住居址遺物出土状態（2）



(3) 18号住居址遺物出土状態（3）



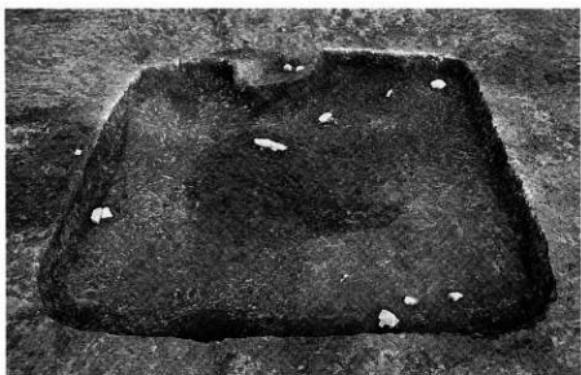
(1) 18号住居址遺物出土状態（4）



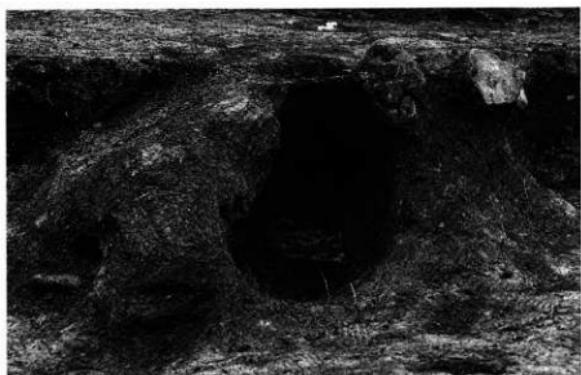
(2) 19・49号住居址（北から）



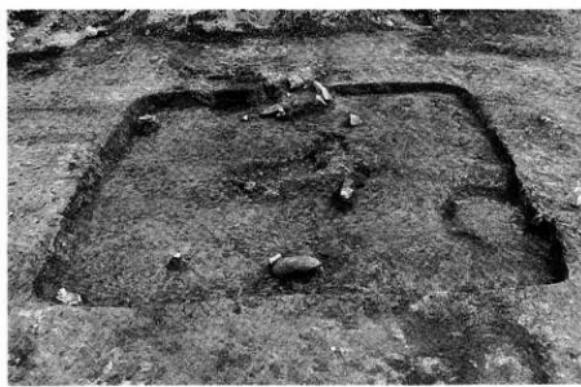
(3) 19号住居址遺物出土状態



(1) 20号住居址（南から）



(2) 20号住居址カマド（南から）



(3) 21号住居址（西から）



(1) 22号住居址（南から）



(2) 22号住居址カマド（南から）



(3) 23号住居址（1）（東から）



(1) 23号住居址（2）（東から）



(2) 23号住居址カマド（東から）



(3) 29号住居址（東から）



(1) 53・54号住居址（1）（南から）



(2) 53・54号住居址（2）（東から）



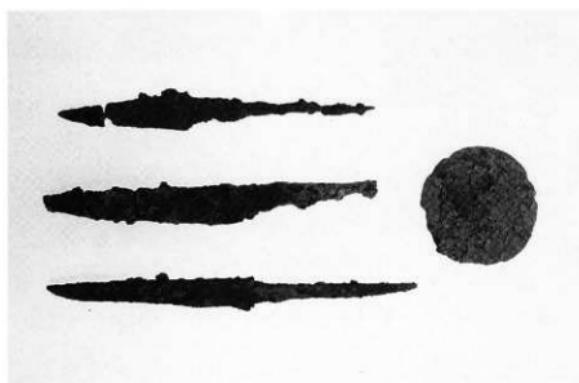
(3) 53・54号住居址遺物出土状態
(北から)



(1) 53・54号住居址炭化茅出土状態
(南から)



(2) 53・54号住居址カマド
(南から)



(3) 鉄製品

勝山遺跡

グリーンプラザ茅野（仮称）建設に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

平成6年3月23日 印刷

平成6年3月30日 発行

編集長：長野県茅野市諏原2丁目6番地1号
発行：茅野市教育委員会

印刷：はおづき書籍株式会社

